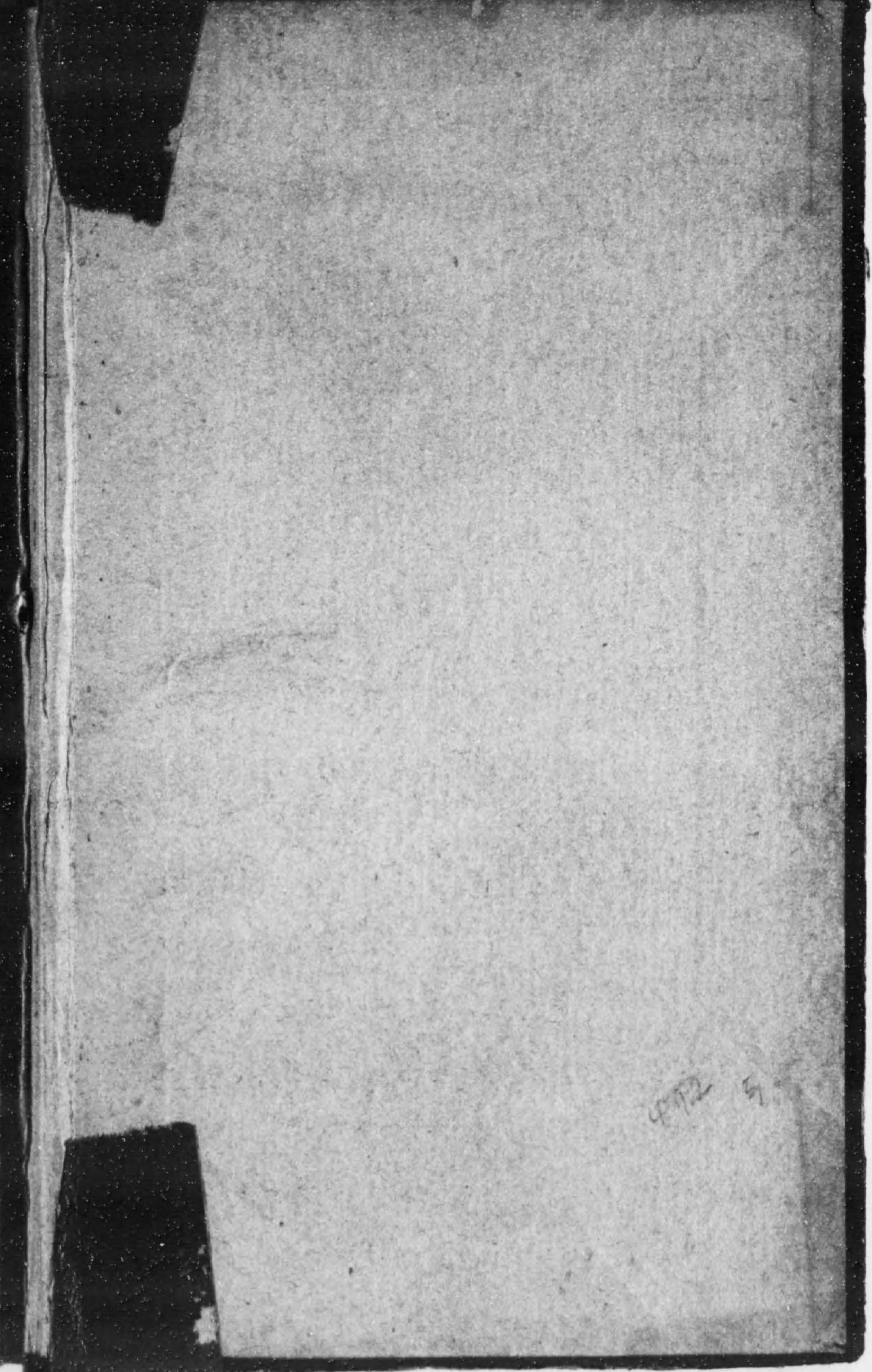
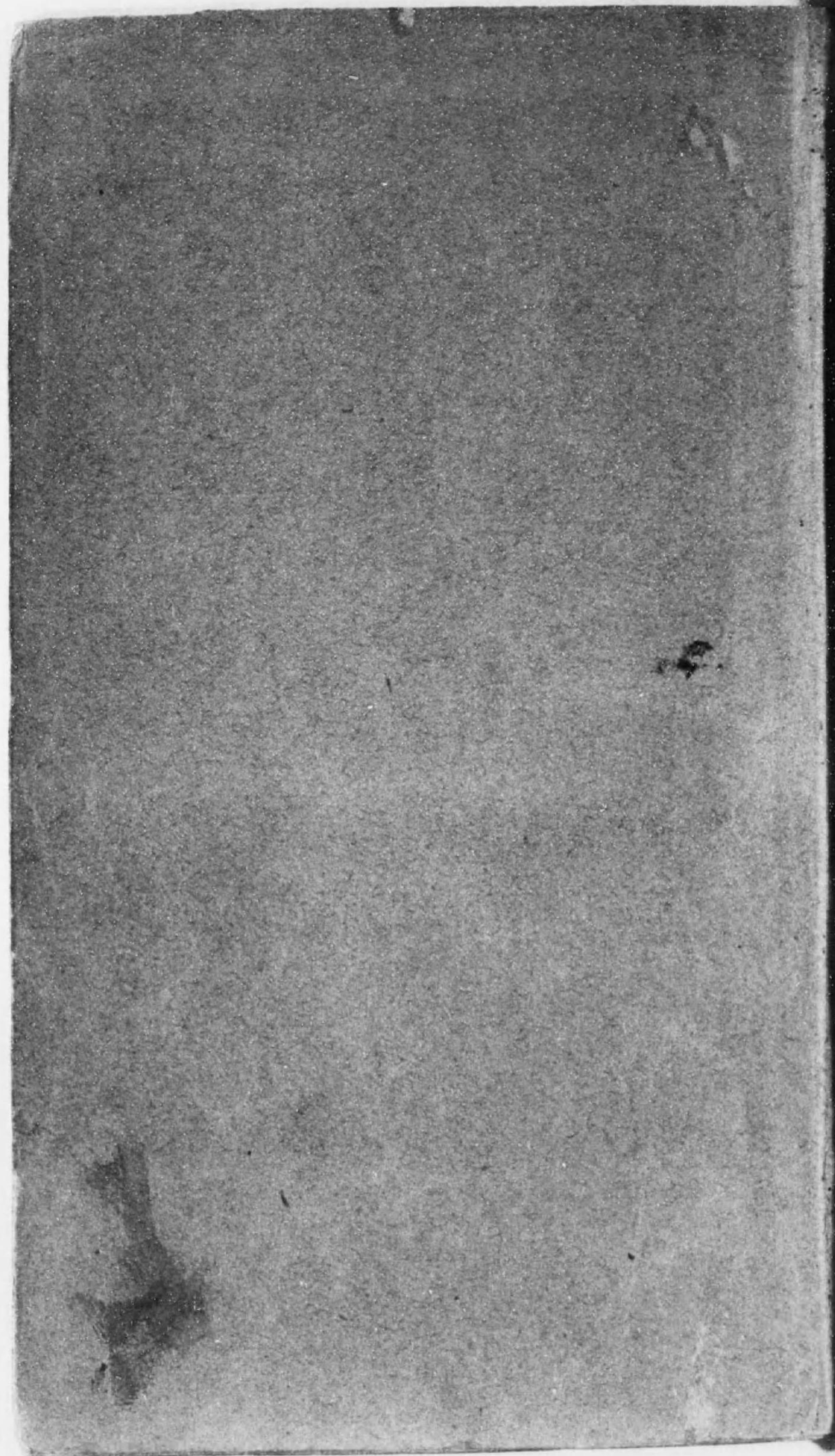


503
160

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
cm

始





503-160

正。クテートス教説・中島祐神譯

我等は如何にして

自己を救ふべき乎

早稻田大學出版部

大正 11. 11. 4
内交



序

タレースに發源した希臘哲學は、客觀的自然を對象とする宇宙論期から一轉して、人間其物を對象とする人事論期に入り、再轉して人事及び自然の兩者を綜合統一する組織期に入った。此の第三期にはデモクリトス及びプラトーン各其の組織的天才を振ひ、最後にアリストテレスに至つて大結收を見、茲に希臘哲學は古今に比類なき偉觀を呈したのである。然るに希臘の學術が其のクライマックスに到達しつゝ、ある一面に於て、既に同國の思想界には、理論的思索の興味が衰へて、倫理的乃至宗教的興味、換言すれば、個人の實生活を中心とする興味が漸次に代りつゝ、あつた事を忘れてはならぬ。當時希臘は、外的にも内的にも動搖不安の状態にあつた。即ちかのペロポネソス戰役以來、國內諸州の軋轢は次第に激しく、其の隙に乗じて、マケドニヤは希臘統一の野望を懷いて國內に侵入し、斯くして其の理想的國家組織は崩壊すると共に、在來の宗教はもはや生命を失つて、國民の精神生活とは次第に縁遠いものになつて來た。

かやうな時代であるから一般思想界がソークラテース時代の人事論期的色彩を帶び、次第に

主觀的になり、切に自己の安心、自己の充實、自己の救済を求めたのは決して不思議でない。此の精神的空虚を充たさうとした苦悶の結晶が所謂倫理期の哲學である。其の主なるものは懷疑學派、エピクローロス學派、ストア學派及び折衷學派である。以下特に本書に直接關係の深い前三者に就いて其の學說の一斑を述べて見る。

二

懷疑學派の祖をピロロン(紀元前約三六〇—二七〇)と謂ふ。此の學派は、其の名稱の通り感官の知覺を不確實なものとして、認識の可能、真理の標準の存在、神の存在を疑ふ。我等の禍害、憂悶は、感官の知覺に信賴し、認識可能の信念に囚はれるからである。故に、我等は須く一切事象に對する斷定を保留して(Εἰρησίζησις)安靜不動の心境に落在すべきである。實に絶對消極の立場である。其の後、新アカデミー學派になつて、此の峻烈な哲學説は幾分緩和されて、實生活上、比較的便宜な表象は、比較的確實性を有するものだから信賴しても差支ないと云ふ所謂蓋然論に變つて來た。

エピクローロス學派の創唱者は即ちエピクローロス(紀元前三四二—二七〇)である。此の學派は、人間の本性を感情に認め、人間の理想は快樂に在りと説く。然し肉體的快樂は、利那的のもの

で、それを求める結果は、却て苦痛を永續させる事になるから、それは我等の理想とすべきものでない。我等は寧ろ精神的快樂を目的とすべきである。所謂精神的快樂とは、物慾を節し、生活を簡素にして、社會的、否、家族的縁をさへ超脱し、世俗的關心、煩累を棄絶した平靜(ἀταραχία)の境界を謂ふ。それ故、同志の者だけが相集まつて清樂裡に美的生活を送る事が彼等の本願であつた。従つて又、家庭を構へ、子女を養育する事は、其の理想に對する障礙だとして彼等はこれを排斥したのである。

三

以上の二學派と並んで、當代の自我充實の欲求から生れた第三の學派は、ゼーノーン(紀元前三三六—二六四)先づ唱へ、クレアンテース之を繼承し、クリシッポス之を學說に組織したストア學派である。

此の學派は其の認識論では、懷疑派とは反對に認識の可能を信する。先づ外物は感官を通じて我等に表象を與へる、表象は保留されて記憶となり、記憶が累積されて經驗となり、經驗から觀念を生ずるのである。そして觀念の眞妄は、其の客觀との合、不合によつて極まるが、此合不合を判定するには別に標準がなく、觀念自身の直證によると云ふのである。

尙ストア學派によれば、人の精神は、出生時に於ては白紙のやうなもので、爾後其上へ投ぜられた外物の印象からして漸次觀念や概念ができる。そして各人に對して共通な必然的な觀念は、所謂普遍觀念で、これが最も確實な眞理と看做される。然しエビクテートスのやうな後代のストア學徒になると、これを人の生れながら有するものとして、本有概念と名づける。善惡、正邪等の觀念は即ちそれで、知識及び道徳の根柢を爲すものである。

ストア派は其の自然論では唯物論を主張した。實在は物體である、然し物體には受動的な物質と能動的な精神と此の兩性を具へてゐる。宇宙の運行は理法即ち神に従ふもので、理法は宇宙に遍通してゐるから宇宙間の各個體は亦此の普遍的理法を分有する。ストア派は又此の理法を火と見た、即ち神火である。一切萬象は此の神火から生れ、いつかは再び此の本原の火に還り、斯くして無限の時間に亙つて周期時に同一過程を繰り返すのである。

ストア學派で最も重きをおくのは他の倫理期の諸學派と同じく倫理即ち實踐に在る。そして形而上學では唯物的一元論であるが、其の倫理説では二元論である。然し倫理學上其形而上學の延長と看るべき點は、即ち此の學派の所謂、「人生の目的は自然に順應して生活するに在り」である。此の自然とは宇宙の理法である、神である。各人の主觀に就いて云へば理性である。自然に順應するとは、即ち各人の衷なる此の理性に従ふ事である。意志以外の事象は、悉く外

物で我等の左右する事のできない、所謂權外のものである。有徳者とは、外物の知覺及び感情(エビクテートスは二者を總稱して表象と云ふ)に動かされない、安靜不動の絶對境 (apatheia) に達した者を云ふ。即ち其の理想は、懷疑學派及びエビクテートス學派の所謂アタラキヤと略々同一であるが、其處へ到達する態度方法には大なる相違がある。懷疑學派は認識の可能を疑ひ、神の存在を否定するが、ストア學派では、神の攝理と云ふ事が、其の倫理説の根本原理になつてゐる。又エビクテートス學派では、人間の目的を快樂に在りと見たが、ストア學派では、理性に順應する事に在りと説く。従つてストア學派では、當爲と實際とを峻別し、我等の實際生活は、不合理、反自然のものであるから、不斷の克己修練によつて一步步此の理想に近づかねばならぬと云ふ。従つて又、ストアでは義務の觀念が極めて強い。人間一切の行動は、善か悪かいつれかで、中間を容れない、所謂、一切か然らずんば無かで、其の所説は、極めて深刻、大膽、峻嚴、所謂秋霜烈日の感がある。ストア學説が、ローマでは其の嚴肅、剛毅、忠誠な國民に喜ばれ、其の質實簡素な生活、尙武的な氣風によく合致して遂に皇帝の尊崇をさへ得るやうになつたのは決して偶然でない。ストア學徒の中で最もストア的純潔な精神の持主であつたローマの皇帝マルクス・アウレリウスが、奴隸哲人エビクテートスの教説を知り得た事を以て其の生涯に於ける一大福祉として神に感謝したと云ふ話しは有名である。後年一部分基督教とも

融和し、或基督教行者は、エビクテートスの教説に深く感動して、自分の教への中にそれを取り入れたと傳へられてゐる。

四

以上、私はストア學説の僅かに一小部分を見たゞけで、まだ其の概要をさへ盡してゐない。尙詳しい事は、専門の哲學書に譲るとして、左にストア末期の哲人で、本譯書原典の教説者たるエビクテートスの思想を概観したいと思ふ。それが讀者にとつて本書通讀上多少の参考にもなれば幸ひである。

奴隸哲人エビクテートス (*Epiktetos*) の事蹟も多くの古聖賢のそれと同じく詳かでない。其の生歿の年月も不明である。今諸説を綜合して見ると、彼は紀元五六十年頃、小亞細亞フリギヤの一都市ヒエラポリスに生れた、エビクテートスは其の本名でないと云ふ説もある。少年の頃、ネロ帝の新自由民にして寵臣たるエバフロディトスの邸に奴隸としてかゝられてゐた。然しどう云ふ譯で彼がローマへ來たかと云ふ事は判らない。彼は跛で、からだも健康でなかつた。其の奴隸時代には、随分虐使され、手荒な目にも遇つたらしい。其の不具も、それが原因だと云ふ説はあるが、眞偽は疑はしい。彼れの消極的な、主我的な、そして厭世的な人生觀も、

幾分は彼れのかう云ふ境遇と體質に因る事であらう。それは兎に角、此の奴隸時代に彼はストアの碩學ムソニウス・ルフォスの講義所へ通つて、哲學を修める機會を得た。それ故、此の奴隸時代こそ彼れの一生の中で最も意味の深い時代である。其の後幸ひにして、彼も亦自由民になる事ができ、そして自分で哲學の講義所を開いた。それが紀元九十年頃まで續いた。然るに偶々ドミニティアヌス帝が、ストア學徒の中に、帝の反對黨を援助する者があると云ふ理由で哲學者追放令を出した爲めに、彼も亦、ローマを去つて北部希臘エペイロスの一都市ニコポリスへ移り、其處で彼を慕つて集まる多くの老若學徒に熱心に自分の學説を講じた。即ち其の日常接觸する事象を捕へて自己の學説の例證に應用し、其等から出發して彼等を靈の世界へと導いたのである。一説によれば、彼はニコポリスで歿したと云ひ、又一説によれば再びローマへ還つて、ハドリヤヌス帝の治下に死んだとも云ふ。彼は終生獨身で、簡素清貧の生活に甘んじ、ストア學徒として模範的生涯を送つた。

彼には多くの教祖哲人と同じやうに、自分の著述と云ふものがない。其の教へは、門弟ヌエウヰウス・アリヤノス (アリヤノスは、生れは希臘人で、多方面の才能を具へてゐた。即ち政治家として、ローマの元老院議員ともなり、執政官ともなつたが、又文筆に秀で、歴史に明るく、其のアレキサンドル傳は有名である。そして又將帥として戰陣に臨んだ事もある。彼はエ

ピクテートスの忠實な學徒であつた)の記録を通して我等に傳へられてゐるだけである。アリアノスのエビクテートス記録に二つある。即ち一はエビクテートス教説 (*Enchiridion Marci Pauli*)と云つて、もと八卷あつたが、今日残存のものは其の中の四卷だけである。一は教説の要旨をとつて格言風に書いた要訓 (*Excerpta*)である。此の教説及び要訓は、今日殆ど各國語に翻譯されて、ストア研究上最も貴重な文獻になつてゐる。

五

エビクテートスは、ストアの創設者ゼーノンを去る事約三百年、所謂ストアの末期即ちローマ時代に屬する、従つて同じストアと云つても、其の學説上に多少の變化は免れない。然し彼れの所説竝に其の日常生活は、我等をして當時の理想的ストア哲人の佛を偲ばしめるに十分である。

神、理性及び自由意志、此の三者はエビクテートス人生觀の基調を爲す。此の三原理の中、神と理性とは畢竟同一で、唯だ見方を變へただけである。

ストア學派では、懷疑派及びエビクトロス派と違つて、神の遍在、神の攝理を動かすべからざる事實として、極力主張する。エビクテートスには屢々ゼウス神云々の言葉がある、ゼウス

神は希臘神話中の最高神の名稱であるが、エビクテートスの場合では、これを一個の人格神と見るよりも、寧ろ宇宙人生に遍通する理法と解すべきである、汎神論的神である。此の神は理性として我等の心内に宿つてゐる。此の意味に於て、理性は即ち神性であり、人は神の分身である。一切衆生悉有佛性である。斯く、神即ち理性の尊嚴を力説する結果、必然の勢ひとして、感覺乃至感情を排斥する事になる。人は一方に於て、神と共通な理性を有するものであるが、他方に於て、動物と共通な、肉體的、感性的方面をも具へてゐる。人は須く此を去つて彼に就くべきであると、斯くして形而上學的一元論は、倫理上では二元論になつて來る。

エビクテートスは、口を開けば、自然に従つて生活せよと云ふ。自然とは前にも云つたやうに、宇宙の理法である、神である、理性である、道である、支配的性能である。それは感官の知覺及び感情(總稱して表象)を統制し、此等を解釋し、此等を使用するものである。意志は絶對に自由である。そして意志こそ我等が所有する唯一のものである。善も惡も歸する所は、意志の善惡である。他のもの——富貴、貧賤、親子、朋友、生老病死——は悉く、我等にとつて外物である。非善非惡の無性である。此等は我等の力を以て如何ともすべからざるものである。我等の權外に屬するものである。彼れの所謂外物である。故に此等の外物の爲めに動かされ、此等に就いて憂惱する事は愚である、惡である。我が子に死別して衷心悲嘆する者をさへ、彼れ

は迷亂顛倒であると云ふ。何となれば、死は我等が如何ともすべからざるもの、自由權外に屬するものだからである。我等は、自然の理法に順應し、神の與へたものを以て満足し、感謝すべきである。總じて、不幸、悲惨、憂悶、嫉妬、邪推、動亂、此等一切の害惡は、我等の權外に在るものを權内に在りと誤認するからである。故に悲劇とは、外物に囚はれた權勢者の悲境を劇と云ふ詩に仕組んだものであると。彼に従へば、生も死も、神の計ひである、理法である、運命である。

部屋が煙たいか。もし煙がひどくなければ私は室内にぬよう。もし激しければ、出て行く。何となれば、君は始終此の一事を記憶して確保せねばならぬ、曰く、『戸は開けり』と。ニコポリスに住む勿れ』と云ふ。私はニコポリスに住まい。『アテネを去れ。私はアテネに住まい。』ローマにも居住する勿れ。私はローマに住まい。『ギアロス島に在住せよ。私はギアロスにぬよう。然しギアロス島に住むのは濼々たる煙の中に住むやうな氣がする。そして私は何人からも居住を妨げられない場所へ行かう。』

茲に至つて、神則ち退却の合圖を與へるのである。我等は從容として死に就くべきである。暴君、我れを殺すと云ふ、殺すは暴君の分、毅然として去るが我れの分である。有徳者とは、自然に順應して表象を使用し、自(意志)他(外物)の領域を確認して、平靜、不動の境地を體得した者である。此の世は一場の演劇である。或者は國王に扮し、或者は臣下に扮し、或者は富豪

に扮し、或者は乞食に扮する。演劇を全うする爲めには、俳優は各々、作者から指定された役割を守らねばならぬ。職業に貴賤はないが、何人と雖も、然り神さへ、此の理法の鐵鎖を破る事はできないと。即ち宿命論である。

此の形而上學から來た宿命論と一方倫理學上の意志自由説とをどうして調和するか、これは實に難中の至難事である。然も此の調和し難く思はれる二つのものは、彼が人生觀の根柢を爲してゐるのである。誠に彼れの哲學は、自由の爲めの闘ひとも云ひ得る。然し、それは意志の自由であつて、近代の政治的、經濟的、人權的思想から發した自由とは根本的に其の意味を異にする。或時、暴主が彼れの兩脚を縛つて、『さてエビクテートスよ、釋いてやらうか』と云つた。エビクテートスは傲然として答へて曰く、『釋くとはどう云ふ事か。私は縛られてゐない。何故なら、私の靈は、明かに自由であるから』と。此の一挿話は、彼れの人生觀の核心を捕へたものである。又彼は云ふ、『部屋が煙たくば、出て行け、戸は開いてゐる』と。其の心は、此の人生に不満ならば、潔く去れと云ふのである。確かに彼は自殺を是認してゐる。(ストア哲學者の中には、自殺を人間の權利として認めてゐる者がある)尤もエビクテートスは、敢て自殺を獎勵する譯ではなく、我等の生存も亦神の必要に基くものであるから、自殺は慎重熟慮の末、徳乃至自由を確保すべき最後の手段であると斷つてゐる。

エビクテートスは、來世の有無、靈魂の滅不滅に就いては、明確な斷言を下してゐない。少くとも今日傳はつてゐる彼れの教へだけではさう思はれる。彼れはかう云ふ獨斷に流れ易い問題は、認識の限度を超えたものとして、これに觸れる事を好まなかつたのかも知れぬ。

そして尙所要のものが與へられなければ、彼神、退却の合圖を與へるのである。戸を開いて行けと命するのである。何處へ行くのか。何等恐ろしい所ではない、我々の生れた所、我々の友へ、同族へ、元素へ還るのである。我々の内の火なる部分は火へ、土なる部分は土へ、氣なる部分は氣へ、水なる部分は水へ還るのである。

兎に角、彼れの未來觀は、暗い消極的なものだつたに違ひない。そして、彼は、未來に於ける應報を説いてゐない。應報は行爲それ自身に在る、善行に對する應報は善行其の物に在る、惡行に對する應報は、惡行其の物に在る。

そしてこれに満足しない者は、どう云ふ罰を受けるか。彼等の現状がとりもなほさず罰なのだ。獨居を不満に思ふ者があるか。然らば彼をして一人在らしめよ。(それが彼に對する)罰である。兩親を不満に思ふ者があるか、然らば其の者をして不孝兒たらしめよ、そして彼をして悲嘆せしめよ。自分の子供に不満を懷く者があるか、然らば其の者をして不仁の父たらしめよ、彼を牢獄に投ぜよ。何の牢獄か。彼れの現在の境遇が其の儘牢獄である、何となれば、彼れの境遇は彼れの意志に反す

るものだからである。人の意志に反する所、それが即ち其の人の牢獄である。それ故ソークラテースは牢獄にはゐなかつた、彼は喜んで其處にゐたからである。

換言すれば、善の爲めの善、徳の爲めの徳、正の爲めの正で、此等はそれ自身目的として取扱はるべきものである。従つて多くの宗教に説かれるやうな、溫い、希望に満ちた來世を死後に期待する事はできないが、それだけ其の義務の觀念は嚴肅で、徹底的だと云ひ得る。

エビクテートスは、人間の社交性を是認し、共働、博愛を説き、妻帯、育兒を勤めてゐる。そしてかのエビクテートスの反社會的、高踏的、利己的、獨善的倫理を攻撃してゐる。けれども彼から見た理想的ストア學徒とは、(第三卷の二二参照)家もなく、土地もなく、祖國もなく(宇宙の公民)、弊衣を纏うて地上に眠り、斯くして俗世間的繋累を脱して、然る後偏へに神に奉仕し、神の旨を受けて迷へる衆俗に向つて正しい道を説く者でなくてはならぬ。彼れの理想に近い人物を史上に求めれば、ソークラテースとか犬儒學徒とかであらう。

エビクテートスは論理を輕視しない、そして論理の問題を屢々其の説話の題材に使つてゐる。然しながら、論理(學問)は、畢竟、倫理即ち實生活的修養の方便たるべきものと見てゐる。又

かう云ふ方便として論理の必要を説いてゐる。元來、ローマのストアには、原理學説として見るべきものが少い、そしてエピクテートの懐疑學派に對する攻撃も、皮肉で痛快ではあるが、極めて常識的に過ぎない、けれどもそれは決して怪むに足らない。彼は第一論件として、欲望及び嫌惡(感性)に關する修養と説き、第二論件として、追求及び回避(意志的行爲、義務)に關する修養を説き、第三論件として、承引、不承引(論理、知解)に關する修養を説いてゐる。そして第三論件に關する修養は、既に第一、第二を修了して、平靜、不動の境地に達して尙餘暇を有する聖哲の領域に屬するのである。一般人は、第一次ぎに第二と、先づ日常生活に於ける修養に留意すべきだと云ふのである。

八

エピクテートスは第一に萬有に遍通する理法即ち神を信ぜよと云ふ。人は瞬刻も、此の理法に背く事ができぬ。然らば何故此の世に反理法的事象即ち惡は存在するか。理法の約束に縛られた我等にどうして意志の自由が許されるか。茲に充塞すべからざるギョッブが在る。けれどもかう云ふ困難は、多數の教説に免れ難いものである。殊に學理を副次と見て、實生活の修養を第一義としたストア學説に接する場合には、かう云ふ論理上の穿鑿を姑らく保留して、先づ其

の教説に一貫する所の實感を味ふべきである、其の眞精神に直入すべきである。エピクテートの因果律的宿命觀は、近代の科學思想と一脈相通するものがある。そして人は、誰れでも、程度の差こそあれ、或意味に於ては宿命論者であると私は思ふ、學説、理論に於てははなく、其の純なる實感に於てはある。然し又我等が内觀する時、其處にはどうしても意志の自由、責任の存在を感知せざるを得ない。彼も此も我等の内面的體驗である。

九

エピクテートの思想は、エピクテロスほどではないが、やはり當時の時代思想の所産として極めて主我的である。そして自己の修養を高調する餘り、時々自然の人情を無視した點もある。けれども凡そ宗教の究極は自己一人の救済ではないか。自利が主で利他が副ではないか。親鸞が「彌陀の五劫思惟の願を案ずれば偏へに親鸞一人が爲めなりけり」と云つたのは、此の切實な自己救済の祈願から自然に發漏した衷心の叫びではなかつたか。他を救ふ事がやがて自己を救ふ途だと屢々云はれる、他は自己の延長だとも云はれる。然し、自己と云ふものが、事實我等の興味を中心であり、自己充實の欲求が、我等一切の内外生活を支配すると云ふ事は、當爲でないかも知れぬが少くとも事實でないか。エピクテートスは此欲求を正しい道によつて滿

足する方法を我等に教へるのである。人類愛もい、社會奉仕もい、それは決してエピクテ
 ーテスの教へと矛盾しない、否、彼は屢々其等を人間の義務として勸説してゐる。然し思ふに
 それは彼れの所謂合理的人類愛でなくてはなるまい、眞の意味の、精神主義的社會奉仕でなく
 てはなるまい。自己の權内のものと然らざるものとを識別し、自然に順應して、意志の自由境
 を確保する事を教へる意味のものでなくてはなるまい。(第三卷二二参照)そしてそれには先
 づ自己がそれを領得しなくてはならぬ。溺者を救ふ者は、己れ先づ岸上に立たねばならぬ。他
 を救ふ前に先づ自己を救はねばならぬ。

10

エピクテテースには基督教思想と共通な部分が少なくない。然し彼は基督教其の物をよく體
 得してゐたかどうかは疑はしい。然し彼が自己の信念を以て、基督教思想以上のものだと思
 してゐるらしい口吻をところ／＼に洩らしてゐる。

尙一言つけ加へておきたい、それは彼れの思想が極めて否定的、消極的、厭世的だと云ふ事
 である。此の點で我等は印度思想を聯想する。何となく陰慘な、暗い、もの寂しい、頼りない
 感じを起させる。けれども眞實の否定消極には眞實の肯定積極が宿つてゐるのだ。一步退く事

は、それだけ視角を大ならしめ、視野を擴大する事である。無限に退く事は視野を無限大にす
 る事である。否定又否定し、更に又否定する、斯くして否定の究極に達した(假に究極に達す
 る事があるとして)其の姿が、とりもなほさず肯定の究極である。懸崖に手を放してから、絶後
 に甦るのではない、彼の次ぎに此が繼起するのではない、彼の裡に此が内在するのだ。否定な
 き生活、厭世なき人生は、浮草にも喩へよう、其處は無制限がない、實在の核心に食ひ入る力
 がない。天に冲づる肯定の巨木は、否定の大地へ深く根を下ろしたものでなければならぬ。謂
 ふ心は、無智からの否定ではない、怯懦からの厭世ではない、否、眞の智者なればこそ絶大の
 否定に達し得るのだ、眞の勇者なればこそ深刻な厭世に入り得るのだ。エピクテテースの外物
 に對する大否定は意志の領域に自由の大肯定を見出だしたのである。成るほどエピクテテース
 にも尙我執があり獨斷がある。我執や獨斷は、小肯定である、小樂觀である。けれども、彼れ
 の人生觀は、我等のそれに比べて遙かに高い深いものではなかつたか。

11

エピクテテース教説の原典は、先きにも一言した通り、其の門弟アリアノスが希臘語で書い
 たものである。我が國でエピクテテースの翻譯書として私の知る限りでは先きに稻葉昌丸氏の

『エビクテタスの教訓』があり、後に高橋五郎氏の『エビクテタス遺訓』がある。此の兩譯書は共に英人ローレストンの英譯書に據つてゐる。該英譯書は英譯者自身の意見に基き、要訓を骨子として、それに適宜教説中の文章を抜萃して添加し、多少系統的に、簡明にエビクテタスの思想を案配したものである。従つてアリヤノスの原典とは全然體裁が變つて、内容の分量から云つても、原典の三分の二以下に減縮されてゐるかと思ふ。私の翻譯は大體ジョージ・ロング及びイリザベス・カーターの英譯書に據り、傍ら伯林グライヒェン・ルスウルム發行の獨譯書を参照した。又ローレストンからの前記兩氏の日本譯をも通讀して、得る所あつた事は云ふまでもない。私はかう云ふ聖典とも云ふべきものは、成るべく、原典に近い形式と内容を翻譯上にも保留したいと思つて、希臘の原典其の儘の翻譯書から更に重譯したのである。

エビクテタスの教説は所謂隨感隨録で、全篇を通じて一貫した脈絡のあるものでない、又其の各節でも略々中心思想はあるが、尙前後の連絡を知るに苦む所も少なくない。そして原典が約一千八百年前の古典で、今日殘存のものにも、字句の脱漏、誤謬が時々あつて、さらでだに難解のものを益々難解ならしめてゐる。英獨の諸譯書を併讀して見ると、原典の同一であるに拘らず、譯文の上では相互に甚しい差異があり、意味が全然反對になつてゐる箇所もある。此の點から考へても原典の如何に難物であるか、略々推察できる。私は上記の諸譯書に就いて、

成るべく脈絡の通つた、意味の明瞭な譯文を採用して、できる限り平明にと努めた。それでも尙意味の曖昧で、首尾一貫しない部分の少なくない事を遺憾とする。又アリヤノスの原典は、『教説』と云ふ標題であるが、私はエビクテタス自身の教への精神を汲んで、一層具體的にかう云ふ標題を選んで見た。そして序でに要訓をも譯して、卷末に附け加へておいた。

終りに、本書の翻譯に際し、參考書を貸與された上に時々有益な暗示を與へられた矢部八重吉氏に對し、並に同じく參考書を提供され、且本書の爲め特に貴重な時間を割いて裝幀の勞を執られた大槻憲二氏に對して衷心の謝意を表す。

大正十一年秋

東京郊外の寓居にて

譯者

目次

序

第一卷

一 我等が権内の事物と権外の事物……………一

二 人は如何にして其の本性を保持し得るか……………七

三 神は人類の父なりと云ふ教義より生るゝ結論……………三

四 向上……………三

五 アカデミー學徒を駁す……………一八

六 神意……………二〇

七 换位命題、假言命題及其他……………二五

八 才能は無教育者にとつて危険なり……………二九

九 我等が神と同性なりと云ふ事實より如何なる結論に至るか……………三三

一〇 ローマにて登用を切望する者を戒む……………三七

一一 生得の愛情……………三九

一二 知足……………四七

一三 如何にせば諸神の意に適ふか……………五二

一四 萬有は神の監視の下に在り……………五三

一五 哲學の約束……………五六

一六 神意……………五七

一七 論理の必要……………六〇

一八 他人の過失を憤る勿れ……………六四

一九 我等は暴君に對して如何に振舞ふべきか……………六八

二〇 理性は如何にして理性自身を省察するか……………七三

二一 賞讃を希ふこと勿れ……………七五

二二 本有概念……………七六

二三 エピクルスを駁す……………八〇

二四 我等は如何にして困難と闘ふべきか……………八一

第二卷

二五 同上……………八五

二六 人生の法則とは何ぞ……………九〇

二七 表象の現れ方は幾何。之に對する防衛策……………九三

二八 他人に對して憤るべからず。人の小事と大事……………九六

二九 不動心……………一〇一

三〇 難局に處する途……………一一一

一 大膽にして細心……………一二三

二 平靜……………一二九

三 哲學者へ人を推薦する者に告ぐ……………一三三

四 姦通者……………一三四

五 大度と慎重とは如何にして並立するか……………一三六

六 無性……………一三一

七 卜占……………一三五

八 善の本質……………一三七

九 人間たるの資格なくして哲學者たるの資格を裝ふ者……………一四二

一〇 名稱と義務……………一四六

一一 哲學の始……………一五〇

一二 討論に就いて……………一五四

一三 懸念……………一五七

一四 人生の市場……………一六二

一五 頑迷者……………一六七

一六 善惡に關する我等の意見を實行する事に努めよ……………一六九

一七 如何にして本有概念を個々の場合に適用すべきか……………一七七

一八 我等は如何にして表象と闘ふべきか……………一八四

一九 口舌の哲學學徒を戒む……………一八八

二〇 エピクローロス及アカデミー學徒を難す……………一九五

二一 矛盾……………二〇一

二二 友情……………二〇六

第三卷

二三 説話の力……………二三

二四 エピクテトスより輕視せられたる一人……………三二

二五 論理の必要……………三七

二六 過失の特性……………三八

一 美服……………三三

二 達人は如何なる鍛鍊を爲すべきか。我等は重大事を閑却せり……………三四

三 善人の勵むべき事。我等は主として何を修練すべきか……………三五

四 觀劇の心得……………三九

五 疾病を口實として歸郷せんとする者を戒む……………四一

六 雜……………四四

七 獨立市の知事にてエピクローロス學徒たる者に就いて……………四六

八 我等は表象に對して如何に修練すべきか……………四八

九 訴訟の爲めローマへ赴かんとする者に一言す……………五〇

一〇 我等は如何にして病苦を忍ぶべきか……………二六九

一一 雑……………二七二

一二 修練……………二七三

一三 孤獨とは何ぞ。而して孤獨者とは如何なる人か……………二七六

一四 雑……………二八〇

一五 慎重に着手せよ……………二八二

一六 親交を結ぶに方つて慎重なるべし……………二八四

一七 神意……………二八六

一八 我等は報道に接して惑亂すべからず……………二八七

一九 俗人と哲學者と……………二八九

二〇 我等はすべての外物を利用する事を得……………二九〇

二一 進んで詭辯家となれる人を戒む……………二九三

二二 犬儒學派……………二九六

二三 虚飾の爲に讀書し論議する者に告ぐ……………三〇五

二四 自己の權内に在らざる事物の欲望に動さるゝ事勿れ……………三〇三

第四卷

二五 自己の志望を斷念せる人に告ぐ……………三四五

二六 窮乏を懼るゝこと勿れ……………三四七

一 自由……………三五七

二 親交……………三八九

三 何を何と交換すべきか……………三九一

四 平靜なる生活を望む者に告ぐ……………三九三

五 兇猛なる好争者を難す……………四〇二

六 憐愍を受けてそれを嘆ずる者を戒む……………四〇九

七 無畏……………四一七

八 輕々しく哲學の衣を着けんとする者を難す……………四二五

九 破廉恥漢への警告……………四三三

一〇 何を輕んじ、何を重んずべきか……………四三六

一一 純潔(清淨)……………四四二

一二 注意……………四四九

一三 一身上の事を容易く口外する者を戒む……………四五二

エピクテートス要訓……………四五七

口繪 エピクテートス肖像

目次終

我等は如何にして自己を救ふべき乎

第一卷

一 我等が權内の事物と權外の事物

あらゆる性能の中で、それ自身を省察し得る、従つて自身の是非を定め得る性能は唯だ一つしかない、文法の術にどれだけの觀察力があるか、文書及び説話に關して判断を與へる程度である。そして音楽にはどれだけの力があるか。旋律に關して判断を與へる程度である。然らば此等の中、どちらかやそれ自身を觀察するか。決してしない。然し君が友人へ何か手紙を書かねばならぬ場合には、文法は書くべき言葉の如何を君に教へる、が、手紙を書かざるべからざるか否かを教へるものでない。そして音楽と曲調との關係も亦其の通りである。然し君が今歌はざるべからざるか否か、琵琶を弾かざるべからざるか否かと云ふ事を音楽は教へはしない。然らばそれを君に教へるのはどう云ふ性能か。それは自身を省察すると同時に他の一切事象を

觀察する所の性能である。して此の性能は何物か。理性の性能である。何となれば我々に授けられた性能で、それ自身を、その力を、價値を、又同時に他の一切性能を考察するものはこれ以外にないからである。「金製の物は美し」と云ふものは、即ち此の性能ではないか。(物それ自身は口をきかないからである)。此の能力こそ明かに表象を批判する力を有するものである。音楽や文法や其の他様々な性能に對して判断を下し、其の效用を證明し、そして其等を用ふべき機會を指示するものはこれ以外に何があるか、一つもない。

(一) ストア學派では感官の印象に對し、並に外物が惹起する一切の感情に對して表象と云ふ名稱を與へてゐる。

そこで諸神は、此の最優最勝の能力、即ち表象の正用と云ふ事だけを我々の自由權内において。これは寔に至當の事であつた。然しこれ以外のものを諸神は我々の權外においたのである。これは神に其の意志がなかつたからか。實際私の考へる所では、もし諸神に其の力があつたら、此等爾餘のものをも我々の權内においたであらうが、確にそれができなかつたのである。何故なら、我々が斯かる世界に住み、斯かる身體、斯かる朋輩に繋がれてゐる以上、我々は此等のものに關してどうして外物の支障を受けずに行はれたであらうか。

(二) これは神の力に制限ありと云ふ意味でない。エピクテートの考へによれば、世界の組織が

かうなつてゐる以上、神として此の組織に接觸する事ができない。換言すれば、神は、人間が外物の爲に支障を蒙るやうに世界を組織したのである、と云ふのである。尙セネカの言葉に「然し、悲むべき、憂ふべき且堪へ難き事少からざるにあらずや」と云ふ者もあらう。そこで神は「我れ汝を此等より救出する事能はざりしが故に此等すべてに對する武器を汝の精神に與へたり」と云ふのである」と。

然しゼウス神は何と云ふか。「エピクテートスよ、得べくんば我れ汝の小なる身體並に汝の小なる財産をして自由ならしめ、且支障を免れしめんと欲したるならん。されど忘る、勿れ、此の身體は汝の有にあらずして微妙に練られたる粘土に過ぎざる事を。而して我れ汝の爲めに上述の事を爲し得ざりしが故に我等の一小部分を汝に與へたり、事物を追求し且回避する此の性能及び欲望し且嫌惡する性能、約言すれば表象を使用する性能即ち是れなり。而して汝もし此の性能を保護し且これを以て汝が唯一の財と考ふるならば、汝は決して支障せらる、事なく、阻碍せらる、事なかるべし、汝は嘆く事なく、恨む事なく、人に諛ふ事なかるべし」と。

さて此の事を君は詰らないと考へるか。飛んでもない話だ。然らばこれに満足して諸神に祈るべきである。

そこで唯だ一事を保護し、唯だ一事に即する事が我々の權内に在るのに、却つて多數の事物を保護し、多數の事物、身體、財産、兄弟、朋友、子女、奴隸に束縛されたがるのである。斯

くして我々は、多数の事物に束縛されてゐるから、其等の爲に壓倒され、引き落されるのである。それ故船出をするに天氣が悪いと、我々は坐して悶へ、外を覗いて風向を氣にする。『北風だ。』北風がどうした。『いつ西風が吹くだらうか。』それは、風、アイオロス(風の神)の心次第だ。何故なら、神は君を風の司つかさどにはしないでアイオロスを司にしたからである。そしてどうか。

我々是我々の権内に在るものをできるだけ利用せねばならぬ、そして他の物を其の本然の性に従つて使用せねばならぬ。

本然の性とは何か。

神の心の儘を云ふのである。

『そこでおれ一人が首を斬られるのか。』

はて、君はすべての人が首を斬られなくては氣が済まないのか。ローマにゐて、ネロ帝から斬罪を宣告された時のラテラヌス(二)のやうに君は自分の首を差し出すのが嫌やか。彼は首を差し出して、軽く打たれた瞬間に首をすくめたが、再び首を伸ばした。そしてそれより少し以前ネロ帝の新自由民たるエバフロディトゥス(三)が彼の所へ來て彼の陰謀の事を尋ねた時、彼は云つた『もし自分が何か口外する位なら足下の主人に話す』と。

(一) 執政官ラテラヌスはネロ帝に對するヒーソの陰謀に荷擔したと云ふ罪で妻子に暇乞する猶豫も與へられずに死刑に處せられた。そして彼の刑執行者たる保民官スタティウスもやはり一味だつたのであるが、彼は一言も口外せず、黙々として死に就いたのである。

(二) 嘗てエヒクテリトスを奴隸にかゝへてゐた。ネロ帝の祕書官。主人と云ふのはネロ帝の事。

然らばかう云ふ場合に人はどんな覺悟を有つべきであるか。曰く、我れの所有する物と、我れの所有せざる物と、我れに許されたる物と我れに許されざる物と、此の外に何がある。『自分は死ぬ事になつた。』で自分は是非とも哀みながら死ななくてはならないか。『自分は縛られるのだ。』それで又私は哀まなくてはならないか。『自分は流罪になつた。』私が配所へ赴くに當つて満悦裡に笑を含んで出かけるのを誰が妨げ得ようぞ。又『おまへの祕ひそしてゐる事を云へ』と云ふ者があるか、私は答へて曰ふ、『私は口外すまい、何となれば口外すると否とは私の権内の事であるから』と。『では縛るぞ。』それは何の事だ、私を縛る、成るほど私の脚は縛られよう、然し、私の意志、それはゼウス神でも征服する事ができない。『獄へ入れるぞ。』それは私の貧弱な身體の事だ。『首を斬るぞ。』はて『おれの首だけは斬られない』と私は言明した事があるか。是等は哲學者たる者の靜思すべき、日々書き止むべき、修練すべき事柄である。

トラセア(ストア派の哲學者)は常に『余は明日追放される位なら寧ろ今日殺されたい』と云

つた。そこでルフォスは彼にどう云つたか、『君が「死をより大なる不幸として余はそれを欲す」と云ふのなら、君は大馬鹿者である、然し又「死をより、輕き不幸として余はそれを欲す」と云うたところが君に其の選擇の力があるか。寧ろ何でも與へられたもので満足することを工夫したらどうだ』と。

次にアグリッピヌス^(一)はどう云つたか。『余は自分で自分の身を拘束しようとは思はぬ』と。彼は自分の審問が元老院で進行中だと云ふ事を聞いて、『甘く行けばいいが。然しもう五時だから(或書には十一時とある、兎に角彼の入浴前の運動時刻の事)行つて運動しよう』と云つた。運動が終つてから、彼の刑が定まつたと云ひに來たものがあつた。彼は『流罪か、死罪か』と尋ねた。『流罪だ。』余の財産はどうなるのか。『没収にはならぬ。』『ではアリチャ^(二)へ行つて甘い食事をしよう』と彼は云つた。

(一) 彼の父は不忠と云ふ冤罪の下に死刑に處せられたが、彼は其の父の不忠の性質を遺傳してゐると云ふので追放に處せられたのである。

(二) ローマより約二十羅馬哩の都市

これこそ人間の學ぶべき事を學んだのである。其の欲望する所に支障を受けず、其の嫌惡する所のものを回避し得た姿である。『余は死せざるべからず。』今すぐか、私には死の用意が出

來てゐる。少時く經つてからか、そんなら今は飯時^(一)だから食事を済ましてから死なう。どんな風にか。己れの所有にあらざる事物を返還^(二)する所の人として聴かしからぬやうに。

(一) エピクテートス要訓に曰く『どんな時にも「失つた」と云ふな「返した」と云へ』と。

二 人は如何にして其の本性を保持し得るか

理性を有する動物にとつてのみ理性に悖る事は堪へ難い。が理性に適つた事なら堪へ得られる。打擲は本來堪へられぬ事でない。どうしてか。見よ、かのスパルタ人は笞打が理性に適ふ事を知つてから如何にそれを堪へ忍ぶかを。縊死は堪へ難くはない。そこで君が縊死を理性に適ふと思へば、行つて首を縊る。要するに我々がよく考へると、人間と云ふ動物は理性に適はぬ事を最も苦痛とし、反之、理性に適ふものに最も愛着すると云ふ事が判る。然し合理と云ひ、不合理と云ふも、善惡、利不利と同様に人によつて其の考へが違ふ。それ故特に我々は合理的なもの、不合理なるものに就いての吾人の本有概念をば個々の事物の性に應じて適用する方法を知る爲に訓練を必要とする。(本有概念とは、各人各様のものにあらざる、普遍的、本然的觀念を指すので、知識及道德の根本觀念である)

然し合理不合理を判定する爲めには外物を正しく評價するのみならず、一々の人に對して何

が適當するかをも考慮する。例へば(貴)人の便器を持つ人が、それをやめれば打たれるし、食ふに困る、便器さへ持つてをれば何の辛い或は不快な思ひもせず済む』など、こればかりを考へてゐるならば、便器を持つのが其の人の理性に合つてゐるのである。然し或人は、自分で便器を持つのは無論の事、他人からそんな世話をして貰ふのでも堪へ難く思ふ。それ故君がもし便器を持つべきかどうかと私に相談しても、私は、『糊口の途があると云ふ事はそれがないと云ふ事よりも値打がある、打たれる事は打たれないと云ふ事よりも不面目だ、それ故君がかう云ふ事を以て君の利害の尺度とするなら行つて便器を持って』と云ふ。君は云ふ、『そんな事はおれの値打を落とす』と。そこで値打を云々するのは君の仕事で、私の知つたことではない。何となれば君自身、君自身に對する君の價值、君自身の賣價を知つてゐるのは君だから、そして人が自己を賣る代價は一定してゐないからである。

それ故、フロールスがネロ帝の催しに出演しようかしまいかと思案してゐる時、アグリッピヌスは彼に出よと云つた。でフロールスが『何故足下は出ないか』と尋ねた。アグリッピヌスは答へた。『私はそんな事を考へた事さへないから』と。こんな事を考へて、外物の價值を計算するのは既に自己の本質を忘れたのと殆ど同じである。死と生とどちらが好いかなどと何故尋ねるのだ。私は『生だ』と云ふ。『苦痛と快樂とどちらか』と云ふなら、『快樂』だと答へる。『然し出演

なければ私は首を斬られる。』それなら出演るがい、私は出まい。『其の譯を聽かう。』足下は自分を胴着の布地の中の一本の絲だとしか思つてゐないからである。で一本の絲は他の多數の絲よりも拔んで、えらくならうと思はないが、丁度其の通り、足下も他の人間と同じものにならうと云ふ事ばかりを考へてをればそれでい、のだ。然し私は袍の紫の縁になりたいたいのだ。あの光り輝いて全體を美化する所の小さい部分に。然らば足下は何故私に向つて衆人に伍せよと云ふか、衆人に伍したらもはや紫の縁ではあるまい。

(二) ネロ帝は演劇に熱中して名門の子孫で困窮してゐる者に出演を命じたのである。

ブリスクス・ヘルヴィディウス(ローマの元老院議員で有徳の哲學者)も亦此の事を承知して、相應はしい行動をとつた。即ちヴェスパスミアヌス帝が使者を遣はして彼の元老院へ行くのを差止めようとした時に、彼は答へた、『私の元老院議員たる事を禁ずるのは陛下の權限に屬します、然し現に私が元老院議員たる以上は、登院しなくてはなりません』と。帝は云ふ、『然らば登院せよ、然し何事も云ふな』と。彼は云ふ、『私の意見を問いて下さるな、それなら私は黙つてゐます』と。帝は『然し余はおまへの意見をどうしても問かなくてはならぬ』と云つた。『それでは私は私の正しと信ずる所を云はなくてはなりません。』『ではおまへの命がないぞ。』そこで彼は云つた。『私はいつ陛下に向つて「私は死すべきものでない」と申上げましたか。陛下は陛下の分

を盡して下さい、私は私の分を盡します。私を殺すのが陛下の分、毅然として死に就くのが私の分です。私を追放されるのが陛下の分、少しも悲む事なく去るのが私の分です」と。

そこで一個の獨り者に過ぎなかつたプリスクスはどんな功績を挙げたか。又紫の縁は袍に對してどんな功績があるか。はて、それは袍に於ける紫の縁として人目を牽き、他の一切に對する立派な模範として示されると云ふ事ではなくて何だ。然しかう云ふ場合に皇帝が他の元老院議員に登院を禁じたならば、其の議員はかう答へたであらう、「不參をお許し下されて忝うございませう」と。然しヴェスバシアヌス帝はこんな人間には登院を禁じさへしなかつたであらう。何となれば、こんな議員は土偶のやうに院内に坐席してゐるか、或は偶々口を開いても、皇帝の云はうとする事を云つて、それに尙おまけをさへつけ加へる人間だと云ふ事を皇帝が知つてゐるからである。

或競技者ですら其陰部を切斷しなくては一命が危いと云ふ時にかう云ふ態度をとつた。即ち哲學者なる彼の兄弟が彼の所へ來て、「兄弟よ、さておまへはどうするつもりか、此の病氣の部分を切取つて、力技所へ歸らうではないか」と云つた。彼れはそれを拒絶して、勇敢なる最期を遂げた。或人がエビクテートスに向つて彼の此の行爲は競技者の行爲か哲學者の行爲かと尋ねた、エビクテートスはかう答へた「人間としての行爲である。即ち單にバトーン(競技所々

長)の學校で練習したゞけではなくて、技を闘はし、かう云ふ場所に慣れた人間としての行爲である。外の者なら首を切られる事をも甘んじたであらう、もしそれでも命さへ助かるものなら。これこそ衷心より發する品性尊敬の念であつて、他の事柄につけても常にこれを深く考慮する所の人々に對して非常な力を有するものである。

『さてエビクテートスよ、「鬚を削れ」と云ふか。私が哲學者たる以上は鬚を削らぬと答へる。』
『そんなら首を斬るぞ。』私の首を切つて何かの役に立つなら斬つてくれ。

(一)ドミニティアヌス帝の哲學者追放を指した言葉らしい。當時哲學者の中には哲學者たる事を隱す爲めに鬚を削つた者もあつた。エビクテートスは鬚削を拒絶したのである。

我々銘々が自分の性格に適した事柄を認知するにはどうすればい、かと尋ねたものがある。エビクテートスの答に曰く、「牡牛が獅子の襲撃を受けた際に、どうして牡牛獨りで自己の力量を知つて先に立つて群獸を防護するか。力あるものが直に自己の力を覺知するのは明白な事實である。故に我々の内で、誰れでもかう云ふ力を有する者は自己の力を覺知する。さて牡牛は一朝にしてできない、勇者も亦然りである。然し我々は冬の内に夏の戦の用意をし、そして我々の關係外の事へ輕卒に手出しせぬやうにせよ。唯だ君が君自身の意志をいくらで賣るかを考へよ。別に理由がないのなら少くとも少々の代價では賣らぬやうにせよ。偉大とそして又恐ら

く優越とは、ソークラテース及びソークラテース一派の人々に属するのである。然らば同様な天性を享けた我々一同、が少くとも大多数が、何故彼れのやうにならないのか。

馬はすべて敏快であるか。犬はすべて巧みに足跡を嗅ぎつけるか。自分が天分に貧しいと云うて自己を全然等閑にすべきであるか。それはいけない。エビクテートスはソークラテースよりも勝れてゐない。然し劣つてゐなければ、それで満足である。私はたとひミロン（大力を以て有名な競技者）たらずとも、我が身體を粗末にしない。クロイソスタらずとも我が財産を粗末にしない。要するに、第一流たる見込がないからと云つて自分に属するものを粗末にはしない。

三 神は人類の父なりと云ふ教義より生るゝ結論

『我等はすべて特殊の方法により主神より生れたるものなり、主神は人類及び諸神の父なり』と云ふ教義を正しく承引できれば、自己を卑しく考へる者は決してあるまいと私は思ふ。然し萬一皇帝が君を拔擢するやうな事があれば、君はとてまたまらない位傲慢になるであらう。して君は自らゼウス神の子だと知りつゝ、それを得意としないのか。然も我々は事實それを得意としないのである。我々の天性には二つのもの、即ち動物と共通な身體と諸神と共通な理性及び睿

智とが混じてゐるので、悲惨必滅なるかの同類に傾く者は澤山あるが、神的にして幸福なる此の同類に傾く者は僅かしかない。そして各人が個々の事物を取扱ふに當つて必然それについて懐く所の觀念に従ふものであるから、誠實、謙讓の爲め及び表象を確實に取扱ふ爲めに自分が作られてゐると信ずる少数者は決して自己を卑しく考へない。然し多数者はこれと反対である。何故なら彼等は云ふ、「自分は一體何だ、此のあさましき肉體に包まれたる憐むべき不幸者」と。成るほどあさましいが、然し君は其の卑しい一片の肉塊よりも勝れた何ものかを有たないか。然らば何故君は此の勝れたものを忘れて彼の肉體に執着するか。

かう云ふ動物的縁資によつて、我々の或者は、其方へ傾いて、狼のやうに不信、陰險、姦邪になる。又或者は獅子のやうに剽悍粗暴になる。然し、概は寧ろ狐で、其の他、獸の内でも悪い方である。何故なら、讒謗を好み悪心を有する人間は、畢竟狐でないか、否、狐よりもつと悪い卑しいものではないか。そこで君はこんなあさましいものとならないやうに注意すべきである。

四 向 上

欲望とは善事に對する欲望を意味し、嫌惡とは惡事に對する嫌惡を意味すると云ふ事、幸福

と安靜とは畢竟欲望する所のものを得、回避せんとする所のものに陥入せざるに在りと云ふ事を哲學者から聽いて、向上の途に在る人、かう云ふ人は自己の欲望を全く撤去し、姑らくこれを延期し、そして嫌悪の情を自分の意志でどうにでもなるものだけに向ける。何故かと云ふに、彼が自分の意志の關係外のものを回避しようとするれば、時として其の回避せんとする所のものに逢着して不幸を招く事を承知してゐるからである。

扱て徳が好運と平靜と満足とを約束するとすれば、道德へ進む事はやがて此等の各々へ進む事である。何となれば完全無缺の域は何處に在るにせよ、向上とは兎に角此の域に近づく事である。此の事は常に眞理だからである。

徳が此の點に在ると云ふ事を承知しながら君は別事に於ける向上を希ひ、それを誇示するか。さて徳から何が生れるのか。

平靜である。然らば如何なる人間を指して向上の途に在るか云ふか。クリシッポスの多數の著書を読んでゐる者の事か。然し徳とはクリシッポスの著書を解してゐる事か。もしさうなら、向上とは明かにクリシッポスの著書に關する多量の知識と云ふ事に過ぎぬ。さてかうなると徳の生む所のものと向上即ちそれに近づく事とが全然別ものだ云ふ事になつて来る。

(一) 紀元前二百八十年タルススに生れ、アテネへ行つてストア學派のクレアンテースの門に入り

多數の著書を遺したと云はれてゐる。

或人は云ふ、『此の人はもうクリシッポスを獨りで讀む事が出来る』と。又其の當人に向つて『あなたは確かに向上されました』と云ふ。どんな向上か。何故其の人を愚弄するか。其の人が寧ろ不幸である事を何故意識させておかないか。君は此の當人に徳の効果を教へ、何處に向上を求むべきかを教へてはどうだ。あさましき者よ、君の爲すべき事に於て向上する事を努めよ、そして君の爲すべき事は何處に在るか。それは欲望と嫌悪とに存する、即ち欲望を逸して落膽し、嫌悪する所のものに却つて逢着するやうな事のない爲めである。又それは追求と回避とに存する、即ち失敗せざらんが爲めである。又それは承引と承引保留^(三)とに存する。即ち事物を誤解せざらんが爲めである。就中最も肝要なのは第一の論件である。然し君は戦慄し悲嘆しながら嫌やなものを避けようとしてゐるが、そんな事ですらして向上するか。

(一)(二)(三) エピクテイトスの屢々論ずる題目で、(一)は單純なる感性、(二)は複雑で有意的なもの、(三)は過謬を避ける事即ち理論の方面である。

それで此等の點に於ける君の向上の實跡を見せて貰はうか。もし私が假に競技者と話してゐるなら、其の競技者に向つて私は云ふであらう、『君の肩を見せてくれ』と。で彼は云ふかも知れぬ、『これがおれのハルテレース(競技の道具。鉛の塊で、これを持つて飛ぶのである)だ』と。

私は答へて云ふ、「君及び君のハルテレースよ、私は、それを持つて飛ぶ所を見たいのだと云ふ事を忘れてくれるな」と。(理論や口先きだけではなく、行爲を見たいのだと云ふ意味)

『活動力に關する私の論文を手にとつて私の研究の跡を見てくれ』など、は何の事だ。あさましき者よ。私はそれを知りたいのではない、君が君の追求、回避、欲望、嫌惡をどんな具合に修練し、どう云ふ意圖目的を立て、ゐるか、自然に順應してゐるかどうかを知りたいのだ。

もし自然に順應してゐるならば、其の證據を見せてくれ、然らば君は向上しつゝ、あると云ひ得るのである。さもなければ去れ、去つて論文の解説どころではなく、君自身でそんな書物を書け。然しそれが何の役に立つ。君は承知か、一冊の價が五デナリウスだと云ふ事を。だから解説者の値打はそれ以上とは思はれまい。故に自分の任務と向上とを別々の點に求めてはならぬ。

然らば向上とは何處に在るか。もし君等の中誰れでも外物を去つて、自己の意志へと轉向し、努めて意志を鍛練し、努めてそれを向上させ、斯くしてそれを自然に順應させ、けだかく、自由、融通無碍に、信實に、謙讓にするならば、そして自己の權内にないものを欲望し又は回避せんとする者は信實自由なる事ができず、却つて嵐の唯だ中に在るやうに、其等のものと共に轉々變動せざるを得ず、其の欲望し回避せんとするものに對する與奪の權を有する所の他人

の下風に立たざるを得ざる事を知るならば、又結局朝起きると此等の掟を守り、誠實な人として沐浴し、謙讓な人として食事し、斯くして、凡そ生起する事象に於て、競走者の走駈に於ける如く、演説家の音聲に於ける如く、自己の第一義を實行するならば、それこそ眞の向上である、行脚の甲斐があつたのである。然し讀書にのみ没頭し、讀書の爲めに行脚に出かけたやうな者には私は即時歸郷し、そして郷に在つて其の任務を勵めと云ふ、何となれば其の行脚の目的は無意味だからである。我が一生をして悲嘆と呻吟とより免れしめ、『噫悲しい哉余は悲慘なり』の嘆聲を發する事なからしめる所の途を學び、不運と失望とを免れしめ、死の何たるか、流刑、入獄、毒殺の何たるかを了知し、以てソークラテースと同じく獄中になるながら、尙『親愛なるクリトーンよ、もしそが神の意志ならば、願はくは然かあらしめよ』と云ひ得るやうになり、『老いばれたる此の隣れなる我が身よ、我れは斯くならんとて此白髯を貯へおきしか』と云ふ怨言を發せざる事、これこそ唯一の眞實事である。こんな怨言を吐くのは誰だ。何か身分の卑しい名もない人間の事だと君は思ふか。ブリアム然り、オーディボス然り、否、すべての國王皆然りである。何となれば悲劇とは外物を重んずる人間の惱亂を劇と云ふ詩に表現したものに過ぎないからである。もし人が意志を以て左右すべからざる外物は我々に無關係だと云ふ事を、作り話から學ばねばならぬとするならば、私はかう云ふ作り話を讀みたいと思ふ、それに

よつて私は幸福に平安に暮すであらう。然しながら君は何を求めるか、それを考へるのは君の仕事である。

然らばクリシッポスは何を我々に教へるか。幸福の大本たり、平靜の源泉たる所のもの、偽りならざる事を知れと云ふのである。「我が書を翻け、然らば汝は我れをして迷亂より免れしむる所のもの、如何に本然の性に適へるかを知るならん」と。噫幸福の如何に偉大なる事よ、道を説く大恩人よ。トリプトレモスは我々に農耕によつて食を得る途を教へたので、すべての人が彼の爲め神殿を建て祭壇を設ける。然るに單に生活の途ではなく、善良なる生活の途を示す所の眞理、此の眞理を發見し、それを明かにし、萬人にそれを傳へた者の爲めに、此の故を以て祭壇神殿をしつらへ、或は像を建立し、或は此の理由を以て神を禮拜する者が君等の内に在るか。諸神は我々に葡萄樹や小麥を與へたと云ふので我々は諸神の爲めに犠牲を供へる。然し彼等が幸福の眞髓を我々に示すものと思つてわざ／＼人の心内に果實を實らせてくれたのに、我々はそれを神に感謝しないのであるか。

五 アカデミー學徒を駁す

エピクテートスは云ふ、明白な眞理に反對する者がある場合に、此の者を説きつけて其の意

見を變へさせる議論を見出だす事は容易でない。然しながらこれは彼の力が強いからでもなく、亦教師の弱い爲めでもない。何故ならたとひ彼が論破されても、石のやうに頑固であれば、議論ではどうすることもできないではないか。皮の裏に鉄が隠れておれば、鉄が露れぬやうに、頑固には二た通りある。一は理解の頑固で一は廉恥心のそれである。かうなると明瞭な事を承引せず矛盾した事を斷念しようとしな。大概の者は身體の敗死を恐れ、これを防止しようとして萬策を回らす、靈の敗死は氣にしない。で、靈が頑固になつて全然何事をも理解しないやうな状態に在る人間を見ると成るほど我々は、それを病的だと思ふ、が、廉恥禮節の心が鈍つてゐる者を見るとあれは強者だとさへ云ふ。かう云ふ人間に、おまへは今醒めてゐると云ふ事が信じられるかときいても、おれには判らぬ、何故なら、おれは夢で自分が醒めてゐると思ふ時にも自分が醒めてゐるとは信じられないからと云ふ。睡眠中の表象と覺醒中の表象と違ふではないか。答へて云ふ、『少しも違はぬ』と。私はこんな人間と尙議論を續けようか。彼をして其の鈍感を感じさせるに私はどんな火、どんな鐵を彼の上に加へたいか。彼は實際認めてゐるのだ。然し認めないと言ひまへするのである。彼は死人にも劣る。彼には矛盾が判らない。彼は病的である。それから又これを了解するけれども、感動しない、そして少しも向上しない者がある。彼は一層劣る。

皮の裏に鉄が隠れておれば、鉄が露れぬやうに、頑固には二た通りある。

彼の謙讓心や廉恥心は死滅してゐる。其の理性の働きは彼から斷り離されてはゐないが、獸化してゐる。これが果して精神力と云ふものか、決してさうではない、變童をして公衆の中であたまたに浮ぶ事を何でも行ひ喋らせる所のそれが精神力と謂ひ得ざる限りは。

六 神 意

人が一切の人及事物に屬する所のもの竝に此等に生起する所のものを認める能力と、そして感謝の心と、此の二つの素質を有するならば、此の世に存在し或は生起する所の萬象に就いて容易く神意を讚美するやうになる。もし彼に此の二つの素質がなければ存在し且つ生起する事象の効用が判らない、或は其の効用が判つてもそれに對して感謝の心が起らない、決して起らない。然しながら神から色を作つて貰つても、それを見る性能を與へられなかつたら色の効用は何處にあつたであらう、少しもない。然し神がよし視力を作つてくれても事物が視界に入るやうにしてくれなかつたら視力の効用は何處にあつたであらう、少しもない。

さて、又此の兩者を作つてくれても光を造らなかつたらどうであるか。

兩者の効用は少しもなかつたであらう。然らば此を彼に、彼を此に適合させたものは誰れか。劍を鞘に、鞘を劍に合せたものは誰れか。それは誰れでもないのか。物の結構が完全にでき上

つたのを見て我々は、其の結構が、必ずや或製作者の手でできたもので、偶然にできたものでないと斷言する。然らば、此等はそれら製作者の存在を證明するが、可見的事物や視力や光は、斯かる者の存在を證明しないと云ふのか。兩性の差異、男女の相愛、組立てられた諸部分を使用する力、此等を以てしても尙其の製作者の證明とならないか。確かに證明となる。

然し更に一言する。我々をして感知し得べき事物を感知させるだけでなく、其等から或ものを選出し、或もを除去し、添加し、其等から様々なるものを組立て、そして實際或ものから進んで他のいくらか似通つたものへと移行させる所の悟性の組織を考へて見よう。これだけでも或人々を動かして製作者を認知させるに十分でないか。もしさうでなければ、様々な物象を作つたもの、何たるか、斯くも不思議な、斯くも精巧な事物が、どうして偶然且自發的に存在し得るかを彼等から説明して貰はうではないか。

然らば、此等の事物は我々の爲めにのみ存在するのか。さうだ、多數は我等の爲めにだけである。理性ある動物(人間)は特に其等が必要とするのである。然し君は我々が理性なき動物と共有する所のもの、少からざる事を知るであらう。

然らば動物でも事物を理解するか。決してしない。何となれば此等を使用する事と此等を理

解する事とは別問題だからである。然し神は、表象を其の儘使用させる爲めに動物を要し、これが使用を理解させる爲めに我々人間を要したのである。それ故彼等動物は、飲み、食ひ、眠り交尾し、其の他各自様々な事をすればそれで十分なのである。然し神から智力を授けられてゐる我々にとってはこれだけでは十分でない。何となれば、もし我々の行爲が正當でなく秩序的でなく、各事物の本性と組織とに合致しなければ我々は決して我々の眞の目的を達成しないからである。苟も生あるものに於ては、其の組成が違へば其の行爲及び目的も違ふからである。斯くして、物を使用するだけの組成を與へられた動物ならば、それを使用するだけで十分であるが、使用するのみならず、使用を理解する力を與へられてゐる動物(人間)にとつては、此の能力を適當に鍛練しなければ彼は到底其の正しい目的を達成する事がない。そこで、神が一々の動物を造るに方つて、或物は食はれ、或物は農耕に使役され、或物はチーズを取られ、又或物は何かしらかう云ふ風に使はれるやうにしたのである。彼等には表象を理解し、それを識別する必要が何處にあるか。然しながら神は、神を見、神の技を見せる爲めに人を伴れて來たのである。否、それを見せるだけでなく、それを解釋させる爲めである。それ故、無理性の動物と共に終始する事は人たるもの、恥辱である、寧ろ人は動物と共に出發して自然が我々を終らしめる所で終るべきである、自然の究極は觀照と理解と、そして自然に順應した生活とである。然

らば此等を見物する事なくして一生を終る事のないやう注意すべきである。

けれども君等はフィディアスの作(黄金と象牙とで作つたゼウス神の巨像)を見ずに死ぬのが詰らぬと云つて、皆それを見にオリンピアへ行くと。然し態々出かける必要もなく、眼前に(神の)作品があるのに、それを見、それを理解しようと思はないのか。君等は、自己の何たるか、何の爲めに生れたか、自己の受けた視力によつて見る所のもの、何たるかを認知しないのか。そこで君等は云ふ、人生には嫌やな煩はしいものもあると。それではオリンピアへ行けばそんなものがないのか。焼けるほど熱い目に逢はないか。人込に逢はないか。入浴の不便はないか。雨が降つたら濡れないか。喧躁其の他不快な事はないか。然しこんな色々な事があつても、あんな立派なものが見られるのだからと思つて君等はそれを我慢する事であらう。さうだ、そして君等は凡そ如何なる事件が起らうとも、これに堪へられる性能を受けてゐるではないか。君等は靈の偉大を貰つてゐないか。精神の雄々しさを貰つてゐないか。忍耐を貰つてゐないか。そして私に靈の偉大の存する限り、何が起らうと何の心配があるか。何物が私の心を攪亂しようぞ、苦めようぞ。私は、私の性能を其の與へられた目的通りに使用せずに、事件の起るのを見て悲嘆悲痛すべきであるか。

『さうだ、然し鼻汁が垂れる』と。

不潔なる者よ。君の手は何の爲めだ。鼻汁をかむ爲めではないか。

『然し世の中にこんな汚いもの、存在する事が理に合はない。』

そんな縁言くろごを並ひなべる暇ひまに鼻汁はなをかんだらどうだ。もしあんな獅子や、ヒドラ(九頭の怪蛇)や、牡鹿や、猪や、不逞非道の徒がなくて常に其等を打ち拂ふ事がなかつたらヘラクレスは果してどれだけのものになり得たか。かう云ふものがなかつたら彼は何事を爲しつゝ、あつたであらう。蒲團にくるまつて眠つてゐるに違ひない。先づ第一、こんな逸樂の裡に一生を眠つて過ごしつゝ、遂にヘラクレスとなり得なかつたであらう。たとひヘラクレスとなつても何の使ひ途があつたか。彼の腕、其の他の體力、忍耐、崇高な精神も、あゝ云ふ境遇に臨んで活動修練する機会がなかつたら、其の効用はなかつたであらう。

『然らば我々も亦我々の鍛練の爲めに、獅子や猪やヒドラを國內へ伴れ入れなくてはならないか。』

それは痴愚狂氣の沙汰である。然し昔はかう云ふものがあつたからヘラクレスの實力を示し彼自身の鍛練の爲めに有効だつたのである。それ故、君はやはり此の事を承知し、君の有する性能を檢し、性能を調べたあとで、さて『お、ゼウス神よ、あなたの心のま、にどう云ふ艱難をも私に與へて下さい、何となれば私は、生起する事件を通して自分が榮譽を贏ち得るやうにと

あなたから性能及び權能を賦與されてゐますから』と、云ふべきだ。君等はさうは云はずに坐して何か起らないかと憂慮して戰慄し哀哭し愁傷し、事の實際起るに及んで呻吟する。そして次に神を咎める。蓋しかう云ふ卑陋な精神は結局瀆神に終らないでどうする。然も神は、どんな事が起つても銷沈せず落膽せず之に堪へ得る所の此等の性能を與へたゞけでなく、此等を與へるに就いて宛ら名君のやうに、慈父のやうに、支障、強制、阻碍なからしめ、これを全然我々の權内におき、神は自ら我々を障礙し支障する權能を自身に保留する事さへしなかつたのである。君等は此等の自由なる權能を自己のものとして受けてゐながら、これを使はない。君は自分の受けたものの何たるか、又誰から受けたかさへ知らずにある。或者は授與者に盲目であり、恩人を知らずにさへゐる。或者は精神の卑陋な爲めに神を怨み、神を責める。然も雄々しい心を有ち、偉大な靈を有ち得る力と方法とが君に具はつてゐる事を私は教へてやらう。然し何の權力によつて、君は他を咎め他を怨むか、それがあつたら見せてくれ。

七 換位命題、假言命題及其の他

換位命題、假言命題の議論、設問から結論を抽出する議論、要するに此の種の一切の議論は人生の諸々の義務に關係を有するものであるが、俗人には此の消息が判らない。何となれば一

切の實行問題に就いて、我々は聖賢が如何にしてそれを切り抜け、如何にして其の場合自己の義務に従つて行動するかと云ふ事を尋求するだけだからである。それ故世人がまじめな人は問答(即ち論理)の争ひなどに身をくだすものでない。或はたとひ争ひをしても、もしや輕忽な問答をせぬかなど、氣にするやうな事はないと云ふかも知れぬが、然し假りにさうだとしても特に問答の使はれる題目に就いては當然何等かの研究をすべきものだと言ふ事を承認せざるを得ない。何故なら、一體推論の目的は何であるか。立言を眞實ならしめ、虚偽を排し、未だ明瞭ならざる事柄に對して承引を控へる爲めである。してそれを知るだけで十分であるか。「さうだ」と或人は答へるかも知れぬ。それでは貨幣の使用を誤らざらんとしてゐる者に對して君は直正な貨幣を受取り、贋物を拒絶しなくてはならぬと説法したゞけで十分であるか。それでは不十分だ。では其の外に何が必要か。眞實を證明し識別する能力に外ならぬ。従つて推論に於ては今云つたゞけでは足りない。即ち我々は眞と偽と曖昧とを吟味し鑑別する性能を必要とするのであらう。さうだ。其の外、推論にはどう云ふ目的があるか。一事を正しく承引した上は其の結論をも承引する事である、さて、此の事を知るだけで此の場合十分であるか。十分でない。どうして一事が他の數事に繼いで起るか、どう云ふ場合に一事が一事に繼いで起るか、どう云ふ場合にそれが數事の結合に繼いで起るかを知らねばならぬ。まだ必要な事がある。即ち推論に熟達

したいと思ふ者は、自己の言表した事柄を證明し且他人の證明を理解し得なくてはならぬ、詭辯を證明だと思つて詭辯者に欺かれてはならぬ。それ故我々は三段論法的方式を用ひ、それを練習する。そして其の必要な事が判つてゐるのである。然し場合によつては前提又は假定の承認が正しいのに虚偽の結論の生ずる事がある、然し虚偽ながらもそれは結論である。こんな場合にどうすべきであるか。虚偽を承認すべきか、そんな事はできない。では私は、私の承認が間違つてゐたと云ふか。それもいけない。それでは、前に承認した事からは結論がで、來ないと言はうか。それもできない。そんならかう云ふ場合にどうしたらいいか。詰りかうではないか。即ち、以前に金を借りた事があつても今日尙債務者とは云へない、それには其の人が今尙金を借りてゐて債務を済ましてをらぬと云ふ事實が加はらなければならぬ。其の通りで、我々が嘗て前提を承認した事があると云ふだけで、今日尙それを承認してゐない限りはそれからの推理を承認しなくてはならぬと云ふ事はない。もし前提が、最後まで、承認された當時の儘であるならば、我々は依然それを固執して其の結論を承認せざるを得ない。反之前提が承認當時の儘でないならば、我々は是非先きに承認をした所のものを棄て、承認を與へる際に川ひた言葉から歸結せざるものを棄てなければならぬ。何となれば承認した前提を棄てたからには其の推理はもはや我々の推理の歸結でもなく又我々の承認する結論でもないからである。それ

故我々は此の種の前提竝に前提の變化（一の意味から他の意味へ變ずる事）を檢查すべきである。此の變化の爲めに問答の途中に於て、或は演繹的結論を下すに方つて、或は其の他かう云ふ風な點で、前提に變化を來し、爲めに結論を豫見し得ない愚人は混亂に陥るのである。何故我々は檢查すべきか。此の問題に對して取扱を誤らず混亂に陥らざらんが爲めである。

假定や假言的命題でも同様である。即ち時としては次の命題への道筋として或假定を承認する必要がある。然らば我々は提出された假定を全部承認せねばならぬか、或は全部ではないのか。もし全部でないならば、どちらを承認するか。又一旦或假定を承認した者は、永久にそれを承認しなくてはならないか。それとも、時としてそれを棄て、唯だ其の結論だけを承認し、矛盾は承認しない事にすべきであるか。さうだ、然し假に或人が「一事を可能なりと假定して、おまへが其の假定を承認しても、おれはおまへをしてそれを不可能だと推論させて見せる」と云つたとせよ。賢明な人はそんな人間との論争を嫌つて、論議、對話を避けるであらうか、と云つて見たところで賢明な人こそ議論を闘はず事ができ、問答を巧みにし、詭辯に欺かれぬ者ではないか。然らば其の賢明な人は論争を始めるが然も輕卒な議論をせぬやうにと心がけないのであるか。もしさうなら、彼は我々の想像するやうな賢者ではあるまい。然しいくらかかう云ふ修練と用意とがなくて、どうして彼は終始一貫の議論ができようぞ。もしそれができた

らかう云ふ法則は無用で不合理で我々の君子なる觀念と無關係になつて來る。我々は何故依然とし、怠慢でものごさいのか、又何故自己の理性の涵養に怠慢不注意である事を辯解しようと努めるか。『然しつまるゝところ其の點に於ておれに或過失があつたとしても、それで父を殺した事になるか』^(一)（そんな事は重大事であるまいと云ふ意味）と反問するか。あさましき者よ、當面の事件には君が殺すべき父など、云ふ者が問題になつてゐないのだ。當面の事件で過失の懼れがあるとするれば、唯だ一つしかない、其の一つの過失を君は犯してゐるのだ。私が或三段論法に於て省略されてゐるものを見付けなかつたのでルファスから叱られた時に、私は丁度、さう云ふやうな事を云つたものだ。『さうすると私はローマの廟宇を焼いた事になるのでせう』^(二)（それ位の過失が大罪を犯した事になるのかと云ふ意味の皮肉）と私は云つた。彼曰く、『あさましき者よ、茲に省略されてゐるのは、ローマの廟宇か』と。罪惡とは父殺しと廟宇を焼く事の外にないか。然し人が外物から受けた表象を愚かに輕々しく取扱ひ、理由を判らず、證明も判らずにゐるとして其處に何の過失もないか。

(一)(二) 父を殺す事と、ローマの廟宇を焼く事とは最大罪惡と看做されてゐるのである。

八 才能は無教育者にとって危険なり。

相互に相等しい命題や名辭は、様々に變へる事ができる。それだけ又我々は、立論や省略論法(二段論法)の形式を様々に變更し得る。例へば『汝、我れに金を借りて且それを返濟せざる時は、汝は我が債務者なり』然るに汝は我れに金を借りたる事なく、且汝、我れにそれを返却したる事なし、故に汝は我が債務者にあらず。』これを巧みに行ふのに、哲學者ほどの適役はない。何となれば、省略論法が不完全三段論法としても、完全三段論法に熟達した者はやはり不完全三段論法に熟達してゐる筈だからである。

(二) 茲て才能とは辯舌、議論等の才を指す。

『然らば我々は何故、かう云ふ風に自己を鍛練し且我々相互に鍛練しないか。』私は答へて云はう、何となれば、現在、我々がかう云ふ事柄を修練もせずにあるのに(なまじひ、こんな理窟ばつた事を練習すると徳の進歩がおくれるからそんな修業をしない)そして又少くとも私一個としては道徳の研究から氣が散つてゐる譯ではないけれども、然も徳に於て何等向上しないからである。然るに此の上尙萬一こんな事を仕事にするやうでは將來どうなるか。殊にこんな仕事は我々を一層必要なる仕事から遠ざけるばかりでなく、自負、慢心を誘發し、ゆゑ、しい結果を來すものとすれば。議論の力や説服の才能は偉大である、特に其の練習が積み、其の上、言辭の修飾が伴ふ場合に然りとする。そして一般に無教育者や軟弱者にかう云ふ才能ができると

通常慢心し増長する危険がある。何となれば我々が青年に向つて、此等のもの、附屬物となるな、寧ろ此等を君自身の附屬物とせよと云ひ聽かせても青年がかう云ふ議論の點で勝れてゐれば、どうにも始末にならないからである。彼はそんな理由を悉く一蹴して、得意になつて我々の面前に濶歩し、他人の叱責を肯んぜず、他人が其の缺陷を注意し、道に迷へる事を教へてもそれを顧みないではないか。

『ではプラトーンは哲學者でなかつたか。』

答へて云ふ、してヒポクラテースは醫者でなかつたか。然も彼は辯舌に巧みであつたのだ。然し彼の能辯と醫者の資格との間に何の關係があつたか。(プラトーンは能辯であつた、そこで問者は、プラトーンは能辯だつたが爲めに哲學者とは云へないのかと詰問する。エビクテートスはこれに對してヒポクラテースは醫者でありながら能辯であつた、然しヒポクラテースは醫者として完全な資格を備へてゐたので其の辯舌は偶々其處へ附屬したゞけである、と答へたのである)君は、同一人に偶然並存してゐる事柄を何故混同するか。プラトーンが奇麗で強かつたと云うて、私も亦奇麗で強くなるやう努めなくてはならないか。或哲學者が奇麗で同時に哲學者だつたと云ふので、それが哲學者の要件でもあるかのやうに。何故君は、人を哲學者たらしめる所のものと別の理由で彼等に附屬してゐるものとを認知識別しないのか。私が哲學者だ

と云ふので、君も亦跛にならねばならぬか。(エピクテリトスは跛であつた)
 然らば私はいかう云ふ君の才能を排斥するのか。否。何となれば私とて視る能力を排斥しないからである。然し人間の善とは何かと云へば、私はいかう答へる外はない、即ち、それは表象に對しての意志の或調整を意味すると。

九 我等が神と同性なりと云ふ事實より如何なる結論に至るか

神と人間との同類關係に就いて哲學者の云ふ事が事實だとすれば、人間はソークラテースの如く行動する外はない。『汝は何處の國に屬するや』と云ふ問に對して、おれはアテネ人だ、或はコリント人だなど、答へずに、おれは世界の公民だと答へよ。何故なら、君は何故自分はアテネ人だと云つて、自分の出生當時其の貧弱な身體の投り込まれた小隅處の者だとは云はないか。君がアテネ人とかコリント人とか自稱するのは、大なる權能を有し、例の小隅處其の物や自分の全家族を包括するのみならず、君に血統を及ぼしてゐる祖先等が生れた土地全體を包括する所の場所(即ちアテネ)に因んで國籍を名乗つてゐることは明白ではないか。然らば睿智を以て全世界の運川を觀察し、そして最も偉大なる、優勝なる、そして包括的なる社會とは即ち人と神とより成るものだと云ふ事、竝に神の種子が我々の父や祖父のみならず、此の世界に

生れた一切萬物、別して理性的存在——何となれば、此の理性的存在のみが、本來神と交通し、理性によつて神と結合してゐるから——に傳來せる事を知つてゐる者が、何故自ら世界の公民と稱してならないか、何故神の子と名乗つていけないか、又何故彼は人間界に起る所の事象を虞れなくてはならないか。皇帝其の他ローマの有力者と血族關係があれば安全に生きてゐられるか。輕蔑を免れ、何の怖れもないか。神を創造者とし、父とし、保護者とする事、これによつて我々は悲哀、憂怖を脱するのではないか。

『一物もなくて、おれはどうして生きて行かれる』と云ふ者があるかも知れぬ。

はて、奴隸はどうするか、逃亡者はどうするか。彼等が主家を脱出する時、彼等は何に頼るか。彼等に頼るべき土地があるか、召使があるか、銀の器があるか。彼等は彼等自身の外に頼るべき一物もない、然も食物には缺かさない。我々の内の哲學者たる者は、其の住家を離れたら、他人に縋がり、他人に頼つて、自己の事を放つておかねばならぬか(やはり自己に頼るべきものだ、と云ふ意)。彼は、自足して、相當の食物に缺かさず、又自然に順つた適當な生活の途を失はない所の無理性の動物にも劣り、其等よりも尙臆病であらねばならぬか。

私は思ふ、老人は(エピクテリトス自身を指す)此處にちつと坐つてゐて、そしてなまじひどうしたら君等が自身を賤しく考へないやうになり、自身について下品な言を吐かないやうにな

るか、そんな事を心配すべきではなくて、寧ろ我々の内の或青年が、「我々は神と同類である我々は身體と身體の所有物と竝に此等の爲めの故に人生の經濟及び交通にとつて必要なる諸々の事物とに束縛されしめるのだと云ふ事が判つた以上、我々は實際此等の事物を苦痛な堪へ難いものとして投げ棄て、我々の同類の許へと歸る（死ぬ）工夫をせねばならぬ」と云ふやうな考を懐かないやうにするのが、此の老人の義務であると。

然し眞の教師たる者の任務は茲に在る。君等は老人の處へ来てかう云ふべきだ、「エビクタートスよ、我々はもはや此憐むべき身體に繋れて、それに飲食を與へ、それを憩め、洗ひ、そして此の身體の爲めの故に様々な人間の機嫌をとらねばならぬやうな事には堪へられない。こんな物はどうでもい、ではないか。そして死は悪とは謂はれないではないか。そして我々は、謂はゞ神と同類で、神から生れたのでないか。我々が元と來た處へ歸るに任せよ、我々が最後に此等の束縛と重荷とから免る、事を許せ。此處に追剥があり、盜賊があり、法廷があり、暴君と稱し、身體と其の所有物との爲めの故に我々に對して權能を有すと自稱する者がある。我々をして彼等自身が何等の權能をも有せざる事を彼等に教ふる事を許せ」と。そこで私一個としては、かう云ふ、「友よ、神を待て。神が君等に信號を與へ、君等の任務を解いたなら、其時こそ神の所へ行け。然し今暫く忍耐して神が君等を置いた此の場所に滞在せよ。君等が此處に滞在する時間

は實に短い、そしてさう云ふ考への者なら忍ぶのもたやすい。何となれば身體及び身體の所有物を無價値と悟つた者は、如何なる暴君を、盜賊を、又は法廷を恐れるか。故に待て、理由なくして去るな」と。

教師たる者は、利口な青年に對してかう云ふ教へを説くべきである。然るに今日の有様はどうだ。教師は死んだ肉體にすぎず、君等も亦死んだ肉體である。君等は今日満ち足つてゐながら、坐つて、明日どうして食ふかと悲泣する。あさましき者よ、今日それが得られるならば明日も得られよう。もし得られなければ、死ぬだけだ。戸は開けりだ。何故悲しむか、泣く譯が何處にある。何故諛ふか。何故人を羨むか。富者や權勢者が、強力であり、疍辯であつても、何故彼等を見て感嘆するか。彼等は我々に對して何事を爲し得るか。彼等の權内に在るもの、それは我々の欲する所でない、して我々の欲する所のもの、それは彼等の權内にない。ソークラテースは此等に對してどんな行動をとつたか。はて、彼は、自ら諸神の同族たる事を信する者の當然爲すべき通りに振舞つたわけである。ソークラテースは自分の判官に向つて云つた、「卿等が、余に向つて、余が從來とり來れる教説の方法を棄て、青年又は老人等の間に、決して騒動を起さざるべしとの條件の下に余を許すと云ふならば、余は答へて云はん、もし余が軍司令官の命に依つて或地位に就かば、それを保持し、萬死を賭してそれを固執するは余の本分なり。然る

に神が我等に對して或地位又は或生活の途を充てたるに、我等はそれを放棄すべきものなりと卿等は思惟せらる、か、そは滑稽至極なり」と。ソークラテースの言葉こそ、正に諸神の血族たる者の言である。然るに我々は、我々自身を、胃の腑や、腸や、恥づべき諸部分の集合に過ぎないと思へてゐる。我々は憂怖し、欲求する。我々は此等のものに關して我々を助力し得る者に諛ひ、且彼等を恐れるのである。

或人が自分の事に就いてローマへ手紙を書き送つてくれと私に頼んだ、其の人と云ふのは、以前上流社會に屬し、富裕であつたのだが、無一物になつて此處に住んでゐたので世人の考へる所では不仕合せな人であつた。そこで私は其人に代つて謙遜な書き振りで手紙を書いた。然し彼れがそれを讀み終ると、私にそれを突つ返してかう云つた、「私は君に手傳つて貰つたので君の憐みを乞うた譯でない、私は別に不遇ではない」と。

ムソニウス・ルフォス(エビクテートスの教師)もよくこんな事を云つて私を試みた。「おまへはこんな事を主人からされるよ。」で、私が、「そんなものは日常普通の事です」と答へた。彼は云つた、「おまへが自身に有つてゐるものなら私がおまへの主人に取りなしてやる必要はあるまい」と。何となれば、實際自分に有つてゐるものなら、それを他人に求めるのは餘計な愚な事だからである。然らば私は偉大なる靈、寛宏なる精神を自己から得られるのに、地所や金錢や官職を

求めようか。さうありたくない。私は自分の所有財産に就いてそれほど無智でありたくない。然し人が臆病な賤しい者である場合に其人に立ち代つて手紙を書くには、死人と看做して書いてやれば澤山だ。「どうぞ其人の死骸と血とを渡して下さい。」何となればこんな人間は死骸や血に過ぎないから。然しもし彼にしてより、以上の者ならば、人たる者が自己以外のもの、故に不幸に陥るものではないと云ふ事を知るであらう。

(一) 敗軍の兵が、勝利軍に對して死者の遺骸埋葬の許しを乞ふ場合を暗に引用したものが。エビクテートスは外物や他人の爲に幸不幸を左右される者を死骸同様に考へたのである。

一〇 ローマにて登用を切望する者を戒む。

我々がもしローマの老人連のやうに自分の仕事を勉強するならば、我々も亦恐らく一角の事を成し遂げるかも知れぬ。私は私の年長者で現にローマの食糧長官になつてゐる人を知つてゐる。私は今でも記憶えてゐる、其の人が流刑からの歸途、此處へ來て、自分の是れまでの身上を話し、そして更にこれから先き還つても、靜に安らかに餘生を送る事に心がけようと言明したのである。彼曰く、私の餘生は幾何もない、で、私はそんな事は君にはできまい、ローマの匂ひを臭けば忽ち今云つた事をすっかり忘れるであらう、そして宮廷へ入る事が許され、ば喜んで飛込み、それを神に感謝するであらうと。彼答へて曰く、「エビクテートスよ、もし私が一

歩でも宮廷へ入る所を見付けたら、其の時こそ私の事を何とでも思つてくれ」と。さて、それから彼はどうしたか。彼がまだローマへ入らぬ内に皇帝の書信に接し、それを受取るや否や、一切を忘れて、以後次ぎ／＼と仕事を殖やしてゐる。私は、今彼の側へ行つて、彼が此處で喋つた事を想ひ出させ、そして私が彼よりも遙かに先見の明があつたと云つてやりたい。

さてかう云へば凡そ人と云ふものは須く無爲の動物たるべしと云ふ風にとれようか。決してそんな意味でない。「然し我々の生活は活動的でないのか」と、何故そんな事を云ふ、實際我々の生活は活動的なのだ。(然し俗人の活動と哲人の活動とは意味が違ふ)例へば私はどうかと云ふに夜が明けるや否や、生徒にもう一度讀み聽かすべきものを一寸想ひ出してみる。それから直ぐ竊かにかう思ふ、「人がどう讀むかと云ふ事は私の關する所でない、私にとつて肝腎なのは眠る事だ」と。

然しローマの老人連のする事と我々のそれとの間に實際どんな相似があるか。君等が彼等のする事を考へて見れば判る。彼等は終日何をしてゐる、計算とか一緒に相談するとか少しばかりの食糧、一寸とした土地乃至こんなやうな利益に關する相談ぐらゐるのものである。そこで、「儀少量の穀物を輸出致度御認可被下度」と云ふやうな請願書を受けてそれを讀む事と、「余は汝等がクリシッポスを讀んで世界の施政の何たるかを知らん事を希ふ、理性ある動物が、如何なる

地位を其處に占むるかを知らん事を希ふ、又汝等の何者なるか、汝等の善惡の本性の何たるかを考へよ」と云ふ請願書を受けてそれを讀む事との間にどんな相似があるか。此等は酷似してゐるか。同等の配慮を要求するか、彼を忘るも此を忘るも同一の恥辱であるか。

然らば我々教師だけが怠惰で寝坊なのか。否、寧ろ君等青年の方が遙かにさうなのだ。何となれば、我々老人は、青年等が楽しんでゐるのを見ると一緒に遊びたくなる位だが、それよりも君等の活動し熱中しつゝ、あるのを見れば、私はどの位君等のまじめな仕事に加はりたくなるか知れないからである。

一一 生得の愛情

エビクテートスが或高官の訪問を受けた時、いろ／＼の事に就いて其の人に尋ねたあとで妻子の有無をきいた。彼は有ると答へた。そこでエビクテートスは更に妻子とどう云ふ風に暮してゐるか尋ねた。彼は憐愍たるものと答へた。エビクテートスは何處が憐愍たるのか、一體、世人の結婚し子供を生むのは不幸になる爲めでなく、幸福になる爲めであるかと云つた。其人は答へて云ふ、「おれは子供の爲めにいやな思ひをするのだ、最近おれの小さい娘が病氣をして危険カハシと思つた時に、おれはとても娘と一緒にゐるのが堪らなくなつて、それから娘が癒つてし

まつたと云ふ知らせを聞くまでは家をあけてしまつた位だ」と。エピクテートスは云つた、「それで君は自分の行ひが正しかつたと思ふか」と。高官は答へた、「おれは自然の儘にしたのだ」と。さて、君の行爲が自然だつたと云ふ事を私に得心させてくれ、そんなら私は自然の儘の行爲が正しいものだ」と云ふ事を君に得心させてやらう」と。で彼が、「世人悉く、少くとも父となつたものは大概かうなのだ」と云つた。エピクテートスは云ふ、「私はそれを否認しない、然し、今問題となつてゐるのは、かう云ふ振舞が正か不正かと云ふ事である。何故なら、君の論法で行くと、痲腫も實際出来るものだから身體の爲めになる、と云ふ譯になるし、又一般に我々は、不正行爲とても、我々の殆ど全部、少くとも大概の者が不正行爲をするから自然だ、と云はねばならぬからである。だから君の振舞が自然だと云ふ譯を聴かせてくれ。」「それはできない。」「それは私の振舞が自然でない」と云ふ譯、正當でない」と云ふ譯を聴かせて貰はう。」

エピクテートスは云つた、「では、今假りに白か黒かと云ふ問題が起つたとせよ、此の黒白を區別するにどんな標準を用ひるか。」

「視覚だ」と彼は云つた。

「寒熱、硬軟の標準は何か。」

「觸覚だ。」

「では我々が、自然不自然、正不正を論ずる場合にどんな標準に據るのか。」

「おれには判らない」と彼は云つた。

「然し、色や臭ひや味の標準を知らない」と云つてもそれは大した損害ではないであらう、然し君は人間の正不正、自然不自然の標準を知らなくてもそれは大した損害でないと思ふか。」

「いや、それは極めて重大な損失だ。」

「では聞かう、或人が善なり正なりと思つた事は、何でも善なり正なりと断定してよろしいか。今日ユダヤ人、シリヤ人、エチプト人、ローマ人等が食物に就いて懐く所の様々な意見は悉く正しいか。」

「そんな事はあるまい」と高官は云つた。

「さて私が思ふに、もしエチプト人の意見が正しいとすれば、他の者は間違つてゐる、ユダヤ人の意見が正しいとすれば、他の者は正しい筈がない、これは必然の事である。」

「それに違ひない。」

「して、無智の存する所には、所要の事柄に關する學習、訓練が缺けてゐるのだ」高官は此の言を承引した。エピクテートスは云ふ。

「それが判つた上は、君は今後自然の標準を學ぶ事と並に其の標準を應用する事によつて各事

物を判定する事をのみ誠心考慮するであらう。然し當面の事件に就き、君の希望に對する一助としてこれだけの事を云ふ、「君は君の家族に對する愛情を自然であり、善であると思ふか」と。」

「確かにさうだ。」

「で、かう云ふ愛情が自然であり、善であるが、理性に合致したものは善でないのか。」

「そんな善はない。」

「それでは理性に適つたものは愛情と矛盾するか。」

「矛盾しないと思ふ。」

「尤もだ、もしさうでないと、相矛盾する二者の中、一が自然なのだから他が必然の歸結として不自然ならざるを得ないからである。さうでないか。」

「さうだ」と高官は云つた。

「然らば、苟も我々が愛情に富み而も理性に合したものを見出すならば、それを善且正と斷言するに憚らないのである。」

「同感だ。」

「さて、然らば君が病兒を棄て、逃げるのは理性に合はない、君もさう思ふであらう。然し尙

茲に研究すべき事は、それが愛情に合致するや否やと云ふ點である。」

「さうだ、研究してみよう。」

「では、君が君の子供に對して愛情を有つてゐたと云ふのに、君がそれを棄て、逃げたのは正しいか。そして子供の母親は子供に對して愛情を有つてゐないか。」

「確かに有つてゐる。」

「それでは母親も亦子供を棄て、逃亡するのが至當だつたかどうか。」

「至當でない。」

「保母は君の子供に愛情を有つか。」

「さうだ。」

「保母も亦子供を見棄てるのが當然だつたか。」

「そんな事はない。」

「して子供を預る教師は子供を可愛がらないか。」

「可愛がる。」

「それでは、彼も亦子供を見棄てるのが至當であつたか、そして、君等兩親や子供の周圍の人間達が深い愛情を有つてゐるからと云ふ譯で、子供はよるべきなき身となつて、放つておかれな

くはならないか、即ち子供を愛せず願みざる者の手の内で死な、くはならなかつたのか。』

『断じてそんな事はない。』

『今假りに君と同じ愛情を有つ者があるとする。ところで君が、おれは愛情があるのだから斯く／＼の事はしてもよいが、其の人はそんな事をしてはならぬと云ふならば、君の云ふ事は不當、不合理でないか。』

『不合理だ。』

『では聞きたい、君が病氣の時、君の親族、其他、妻子等が、君を置きざりにしてしまふほど、深い愛情を君に對して有つてゐる事を君は願ふか。』

『そんな事は決してない。』

『そして君は、君の味方になる者が、君に對して非常に愛情を有する爲にそれで君を始終病床に置きざりするほど、それほど彼等から愛して貰ひたいか。それとも、かう云ふ譯だから寧ろ、できる事なら、君は自分の敵から愛されて、そして見棄てられる事を願ふか。然し、もしさうなら、其の行爲には少しも愛情がなかつたと云ふ事になる、ところでさうすると、君が子供を見棄てたと云ふ事には何の動機もなかつたのか。さうではあるまい。それはローマの人が自分の最負の馬が疾走してゐる間自分で自分の顔を覆うてゐるのと同じ類のものである、そして豫期

に反して其馬が勝つと失神から甦る爲めに海綿を必要とするのだ。』

『して其の動機は何か。』

『今は其の事を詳しく論ずべき時であるまい、唯だかう云ふ事を信じてをれば十分である、即ち其原因——もし哲學者の云ふ事が眞實なら——を外に求めてはならぬ、どう云ふ場合に於ても、我々が或事をしたりしないだり、云つたり、云はないだり、得意になつたり、落膽したり、事象を回避したり、追求したりする原因は唯だ一つである。今私に對する原因、君に對する原因、即ち君から云へば、私の所へ來て、坐つて、聽く事、私から云へば現在私の言ふ通りのものを言ふ事、此の原因となる所のものに外ならないのだ。』

『してそれは何か。』

『それは、さうしようとする我々の意志ではないか。』

『其の通りだ。』

『して我々が別の事を意志したならば、其の意志した通りに振舞つたであらう。然らばアキレスの悲嘆の原因は即ちこれだ、バトロクロス(アキレスの親友)の死ではない。(何故なら友人が死んでも、それほど感動しない者があるから)。アキレスが悲嘆したいと思つたからである。君が先きに子供を置きざりにしたのは、さう云ふ行動を君が選んだからである。然し又君

が今後子供と一緒に暮すとすれば、其の原因はやはり同一である。そして君が今ローマへ行かうとするのは、君がそれを選ぶ（意志する）からである。君が君の志を變へるならば、君はローマへ行かないであらう。要するに死も、追放も、苦痛も乃至此の種の事は、我々の爲し爲さざるの原因ではなくて、我々自身の意見及我々の意志である。それが納得されたかどうか。』

『判つた。』

『そこで、いづれにせよ、原因の通りに結果が生起する。だから爾後、もし我々が間違つた行爲をするならば、いつでも我々はそれを行爲の原因たる我々の意志に歸するであらう。そして、我々は身體から癩腫や膿瘡を取り去らんとするにもまして、かやうな間違ひを除去し絶滅する事に努めるであらう。同様に我々は、我々の正しい行爲の原因に就いても斯く云ふであらう。我々の現在の意見を棄てるならば、現在の意見の結果たる行爲をも我々は棄てる事になるのだと云ふ事を信するから、我々は我々に對する禍の原因をば、もはや奴隸にも、隣人にも、妻子にも歸しないであらう、そして考へると考へざるとは我々の權内に屬し、外物に存するものではない。』

『同感だ』と彼は云つた。

『然らば我々は爾後、意見以外の事物の性質、其の状態、土地や、奴隸や、馬や、犬の性質状態を

究める事をせず、只管我々自身の意見を考査するであらう。』

『さうしたいものだ。』

『それ故君は、衆人の嘲笑を買つた動物即ちスコラステイコス（勤勉なる文筆家で、實際生活の仕事をしなかつた人）のやうにならねばならぬ、もし君が本當に君自身の意見を檢査する意志があるならば。そしてこれは君も承知の通り一朝一夕の仕事でないのだ。』

一二 知 足

諸神に就いて、或人は神は存在せぬと云ひ、或人は存在するが、無爲、無關心で、將來の事は豫考しないものだと云ふ。又第三の人は、神は存在し、將來を考へるものだが、それは重大な天界の事だけに就いてはあつて、地上の事は少しも考へるものでないと云ふ。第四の人は、神は地上並に天界の事を豫考するものであるが、唯だ一般的に豫考するだけで、個々の事象に互るものでないと云ふ。更にウリッセスやソークラテースの屬する第五種の人は、『神よ、我れ爾の知識なくしては動く事なし』と云ふ。

それ故、何をさし措いても先づ第一に一々の意見を研究し、其眞偽を確める必要がある。もし諸神が存在しないとすれば、神に従ふ事がどうして我々の正しい目的になるか。又諸神が存

在しても、事象に就いて少しも配慮せぬならば、此の場合にも亦神に従ふ事がどうして正とされるか。然し又諸神が存在し事象を配慮しても神人の間に交通がなく、又實際自分と神との間に交通がないなら、それでも神に従ふ事がどうして正とされるか。それ故聖賢は、此等の諸點を考へた上で、自己の精神を全世界の管理者たる神に委せる、丁度善良な市民が國法に對するやうに。だから教へを受ける爲めに來る者は須くかう云ふ志を懐くべきである、即ち、「どうしたら萬事に就いて神に従ふやうになれるか、どうしたら神の施政に満足するやうになれるか、どうしたら自由が得られるか」と。何故なら、一切の事象が己れの意志に適ひ、何人からも支障されない人こそ自由と云ひ得るからである。

『それでは自由とは狂氣の事か。』

決してさうでない、何となれば狂氣と自由とは相容れないからである。

『然し、おれは何事でも自分の思つた通りの結果になり、自分の思ふ通りの途をとる事を願ふのだ。』

君は狂氣だ、君は狂つてゐる。自由とは、けだかい尊いものだと云ふ事を君は知らないか。事物が私の氣紛れに願ふ通りになる事を氣紛れに希求するならば、それは、けだかくなればかりでなく極めて賤むべき事である。例へば私は Dion と云ふ名前を書かうとする時、自分勝手な字

を書かうと思ふか。否、私は正しい字を書くやうにと教はつてゐる。音楽はどうか。やはり其の通りである。一般にすべての技藝や學問に就いてはどうか。少しも變りはない。もしさうでなくて、知識と云ふものが各人各様の氣紛れに合すべきものだとなれば、事物の知識には何の價値もなくなる。然らば最重要の自由と云ふ事柄だけに於て、私は氣紛れに意欲する事を許されてゐるか。決してさうでない。事象が其の起るが儘に起らん事を願ふ、これこそ我々の學ぶべき事である。そして事象は如何に生起するか。これを處理する者の處理する儘に起るのである。そして彼は、夏と冬、豊富と窮乏、徳と不徳並に此の種の一切の對立を全一の調和の爲めに配置してゐる。そして我々各人に對して身體と身體の諸部分と、所有物と、伴侶とを與へてゐるのである。

我々はかう云ふ事象の配置を念頭において、さて、此の事象の組成を變更する爲めでなく——我々にはこれを變更する力もなく、又そんな力は我々の爲めにもならないから——我々の周圍の事象が現に在る通りのものであり、自然に存在するものである以上、我々は我々の精神をば、生起する事象に順應させておく爲めに學習の門に入るべきである。何故なら、我々は人類から逃れる事ができるか、どうしてそれが可能であるか。そして我々が彼等と交はるとしてさて、我々は彼等を變ずる事ができるか。誰れがそんな力を我々に與へたか。然らば彼等と交は

り行くに方つて残る所は何か、如何なる方法が発見されてゐるか。彼等は彼等で、其の善しと思ふ所を行ひ、我々は我々でやはり自然に合致した心状を保ち得るやうな方法があるか。然るに君は忍ぶ事を欲せず、足る事を知らない。そして一人である時には寂寥だと云ふ。多數人と一緒にをれば彼等を悪漢だ、追剥だと云ふ。そして自分の親子、兄弟、隣人を不足に思ふ。寧ろ一人でゐる時には、其の境地を平靜自由と名づけよ。自己を神々に似たりと思へ。又多數人と一緒にゐる時には、其の境地を群居だ、煩累だ、不安だと云はずに、祝典だ、集會だと云へ、斯くしてすべてに満足せよ。

そしてこれに満足しない者は、どう云ふ罰を受けるか。彼等の現状がとりもなほさず罰なのだ。獨居を不満に思ふ者があるか、然らば彼をして一人在らしめよ。(それが彼に對する罰である) 兩親を不満に思ふ者があるか、然らば其の者をして不孝兒たらしめよ、そして彼をして悲嘆せしめよ。自分の子供に不満を懐く者があるか、然らば其の者をして不仁の父たらしめよ。彼を牢獄に投ぜよ、何の牢獄か。彼の現在の境遇が其の儘牢獄である、何となれば、彼の境遇は彼の意志に反するものだからである。人の意志に反する所、それが即ち其の人の牢獄である。それ故ソークラテースは牢獄にはゐなかつた、彼は喜んで其處にゐたからである。『おれは跋でゐなくてはならないのか。』あさましき者よ、君は貧弱な一本の脚がないと云ふので、世を怨む

か。君は全の爲めに喜んでそれを捧げようと思はないのか。君はそんなものを抛擲しようと思はないか。君はそれを與へた者へ喜んで返さないのか。ゼウス神が、ゼウス神の面前で君の出生の糸を紡いだ所の運命神と共に順序よく定めてくれた世相を憤り不満に思ふか。全に比較すれば自分が如何に微小な部分であるかと云ふ事を知らないのか。微小だと云ふのは身體を指すのだ、何となれば睿智の點に於ては君は諸神に劣る者でないからである。睿智の量は長さや高さで計られるのでなく、思想によつて計られるのだからである。

然らば自分が諸神と比肩し得る部分、その部分を自分の善の所在と定めてはどうだ。『こんな兩親を有つとはなさない。』それでどうだ、君が事前に生れて、取捨選擇し、『かう云ふ男女と一緒にさせて此の瞬間におれを生まれせよ』と云ふ事が君に許されてゐるのか。そんな事は許されてなかつた。否、君の兩親が先づ存在し、然る後に君が生れると云ふ事は一個の必然事であつたのだ。どんな兩親から生れたか、當時在つた儘の兩親からだ。そこで兩親が現在のやうな兩親であるから君には施す術がないと云ふのか。さて君が何の爲に視力を有つてゐるかも知らないで、眼前に色彩を持つて來られても眼を覆うてゐるならば、君は不幸悲慘であらう。然るに起り來るあらゆる事象に對して偉大な靈と、けだかい精神とを有ちながら、それに氣づかずゐるならば尙一層不幸悲慘ではないか。君の有する力相應の物が君の近くにあるのだ、然

るに君は、折も折、其の力を最も活潑鋭敏ならしむべき瀬戸際になつて、其力を解雇したのだ。君は諸神が君の權外においた事物から超越する事を諸神から許され、唯だ權内の事物に就いて責任を負はされてゐるのだ。其の事を君は寧ろ諸神に感謝しないか。君の兩親、それを諸神が君の責任外に置いてゐるのだ。君の兄弟、君の身體、君の財産、そして君の死生、此等は悉く君の責任外に在るのだ。然らば諸神は何に對して君に責任を有たせたか。獨り自己の權内に屬するもの、表象を正しく使用する事である。然らば何故君は自分の責任外のことを脊負ふのか。是れ全く無用の煩累を自から招くのである。

一三 如何にせば諸神の意に適ふか

或人がエピクテートスに向つてどうして物を食べたらず神の意に適ふかと尋ねた。彼答へて曰く、もし君が正しく、満足して、靜かに、程よく、秩序正しく物を食べる事ができれば、それが亦諸神の意に適ふのではないか。然し君が湯を命じても召使が聞きつけない事もある、確かに聞えても微温湯しか持つて來ない事もある、或は召使が家の内にもない事さへもある。かう云ふ場合にもそれを口惜しがつたり、怒つたりしないなら、それが即ち諸神の心に適ふのではないか。

「然しどうしてかう云ふ召使のやうな人間を我慢してゐられよう。」

あさましき者よ、君は同じくゼウス神を父とし、同一根幹より生れた神の苗裔たる君自身の同胞に辛抱できないのであるか。君は偶々そんな高い地位に置かれたと云ふので、直ぐさま暴君たらんとするのか。君は自己の誰なるか、誰を支配するかを忘れたのか。彼等が血族たる事、本來同胞たる事、ゼウス神の苗裔たる事を忘れたのか。

「然しおれは召使(奴隸)を買つたのだ、彼等がおれを買つたのでない。」

君は今どちらを見てゐるのか、君は地上を見てゐるのだ、坑を見つゝゐるのだ、死んだ人間(死すべき人間と云ふ意味であらう)のこんな憐れな法律を見てゐるのだ、そして神の法律へは目もくれないでゐるのだ、判つたか。

一四 萬有は神の監視の下に在り

或人がエピクテートスに向つて、自分の一々の行動が神の監視の下に在ると云ふ事をどうしたら信じられるかと尋ねた。そこでエピクテートスは、君は萬物が一體として結合されてゐると思はないかと反問した。

「私はさう考へる。」

して地上の事象が、本來天の事象と協合一致してゐると思はないか。

『さう思はれる。』

さちなければ、宛ら神が植物に對して命令を與へるかのやうに、あれほど規則正しく花を開き、芽を出し、實を結び、熟し、實を落し、葉を落し、縮まつて、靜に休むやうな事がどうしてあり得よう。又さもなければ月の盈虧、日の去來に伴ふ地上事象の變轉がどうして見られよう。然し植物や我々の身體が斯く全宇宙と結合してゐるとすれば、我々の靈は遙かより、以上に結合してゐるのではないのか。そして我々の靈は神の一部の如くに神と接觸してゐるのではないか。そして神は此等の部分の各運動を神固有の運動として覺知するのでないか。今君は、神の施政に就き、一切の神事に就き、且同時に人事に就いて考へ、自分の感官に於ても悟性に於ても、同時に幾百千萬の事物の印象を受け、或事をば承引し、或事には異議を唱へ、又或事には判斷を差控へる事ができ、又種々雑多な事物からの多數印象を靈の中に保留し、そして此等印象の痕跡によつて動かされると、最初の印象其の儘の觀念を心頭に浮べ、數多の技能と幾百千の事物の記憶とを把住するのであるか。(君にそれだけの能力があるのに)神は萬物を照覽し到處に現在し、萬物から或傳達を受ける事ができないのであるか。太陽が全宇宙の斯く廣大な部分を照しながら、唯だ地球の蔭に隠れた僅な極少部分だけを照さすにおく事があらうか。然るに神の全身に

比すれば其の僅少部分に過ぎざる所の太陽其の物を造り、其の太陽を回轉させる所の神が萬物を覺知する事ができないのであるか。

『然しおれは一時に此等全部を了解する事が出来ない』と云ふのか。誰れが君の力をゼウス神に等しいと云つたか。けれども神は各人の許に各人の指導者たる守護神を置き、各人を其の守護の下に在らしめてゐる。此の指導者は決して眠る事なく、欺かれる事がない。神が我々各人を委せるのには是れ以上に適當な、細心な、守護者があらうか。君が戸を閉ぢて室内を暗くした時に、決して、『おれは一人だ』と云ふな、君は一人でないからである。神は其の内にある、君の守護神が内にあるのだ、彼等が君の爲す事を看取するに何の燈ともしびが要らうぞ。兵士が皇帝に誓ふやうに、君は此の神に誓ふべきである。然し給料を貰ふ所の傭兵は、皇帝の安泰を最も重んずる事を誓ふのに、斯くも多數の、斯くも貴い恩澤を蒙つてゐる君が、神に誓を立てないのか、否、誓を立て、もそれを守らうとしないのか。してどんな誓を立てるか。『決して背かざるべし決して非難せざるべし、神の與へたる物に不満を懷かざるべし、必要なる事を爲し或は忍ぶ事を厭はざるべし』と。これは兵士の誓に似てゐるか。兵士は我れ皇帝以上に何人をも尊敬する事なかるべしと誓ふ、然し茲では、我々は我々自身を何ものよりも尊敬すべしと誓ふのである。

一五 哲學の約束

或人がエビクテートスに向つて自分に對する兄弟の怒りを解くにはどう説きつけたらい、かと相談した時、エビクテートスは、『哲學は外物を人に與へようとするものではない』と答へた。もしそんな事をすれば、哲學は自己の領域外にある物へ手を出す事になるであらう。大工の取扱ふ材料は木材である、彫像師のそれは銅である、其の通り生活術の材料となるものは各人の生活だからである。

『それでは私の兄弟の材料は何であるか。』

其の間は又彼自身の生活術の範圍に屬する事である、然しそれは君の術にとつては一個の外物で、地所や健康や名聞と變りがない。然し哲學は此等の一つをも約束するものでない。哲學は云ふ、『如何なる場合にも余は支配的性能を自然に順應せしめんと欲す』と。誰の支配的性能をか、『余を包有せる者の支配的性能なり』と。

『そこでどうしたら兄弟の怒りが解けるか。』

兄弟を私の所へ伴れて來い、私は彼に話して聽かせる。然し私は彼の怒りに就いて何等君に言ふべき事がないのである。

そこで、相談に來た人は、『兄弟の私に對する怒りが解けなくても、私自身が自然に適つた状態を保つにはどうしたらいいか、それを知りたい』と云つた。エビクテートスはかう答へた。偉大な事は一朝にして生れるものでない、葡萄や無花果にしてもさうだからである。今君が私に向つて無花果が欲しいと云つても、私はそれには時がかゝると答へたい。先づ花を咲かせ、次に實を結ばせ、それから熟させるのだ。然らば無花果の實すら一朝にしてできないのに、君は人間の精神の果實をそんな短時間にやす／＼と得たいと思ふのか。たとひ私が君にさう云つてもそんな事を當てにするな。

一六 神 意

人間以外の動物には身體に對する用意が萬端できてゐて、飲食物のみならず、寢床まで備はり、靴も寢具も衣服も要らぬ、然るに我々はかう云ふ附屬物を悉く必要とする、然しそれを不思議がつてはいけない。何となれば動物は彼等自身の爲めに造られてゐるのではなくて、他に使役される爲めに造られてゐるので、従つて彼等が他の事物を必要とするやうに造られてゐるならば、それは道理に合はないからである。考へても見るがい、我々が我々自身のみならず、牛や驢馬の事まで心配して、其の衣服、靴、飲食の心配までするとしたらどうだ。兵士は靴を

穿き、服を着け、武器を携へて其の司令官の命令を待つてゐる、然るに、もし聯隊長が巡回して千人の兵士に一々靴を穿かせ、服を着せるとなつたら大抵ではない。丁度其の通りで、自然は使彼されるやうにできて、用意萬端整ひ、もはや少しも手のかゝらない動物を造つておくのである。それ故三尺の童子でも一本のステッキで牛を驅るのである。

然るに我々は、動物に就いては自分自身ほどに手がかゝらないで濟む事を感謝せずに、自己本位から神を怨む。然も、私はゼウス神及び諸神の名に於て敢て云ふ、此の世に存在する萬象は、人、然り、少くとも謙讓、知恩の人をして神の攝理を認知させるに十分である。大きな例は姑らく措いて、唯だ牛乳が草から生じ、チーズが牛乳からでき、羊毛が羊皮からとれる、と云ふ事だでもよい。誰が此等を造り或は工夫したか。「誰でもない」と君は云ふ。噫、驚くべき無恥よ、痴愚よ。

さて自然の大事業は姑く措き、其の小なる副次的業績を考察せよ。先づ我々の顎の毛などは最も無用に近いものであらう。ところでどうか、自然は又此の毛を最も適切に使用するのである。自然はこれによつて男女の區別をしないか、各人の内に在る自然は、遠方から既に、「我れは男子なり、男子と思つて我れに近づき來れ、男子として我れに語れ、外に何物をも探索する勿れ、此の標しを見よ」と聲明するのである。又女子の場合では、自然は女子の聲に幾分の柔みを混ぜ

て、其の代り顎の毛を取つておくのだ。君の云ふ所によると、さうではない、人間と云ふ動物には、差別の標しのないのが至當だつたのだ、そこで（黙つてゐたのでは男女の區別が判らないから）「おれは男だ」と銘々吹聴するのが至當だつたのである。然し此の標しは美しく、似合はしく、そして、尊けでないのか。牡雞の冠よりも、どれだけ美しいか、獅子の鬣よりもどれだけ似合はしいか知れない。それ故我々は神の與へた標しを保存し、兩性の區別を成るべく放棄し又は混同すべきでない。

我々の内に於ける神の事業はこれだけであるか。そして此等を其の價値に應じて十分に讚美し、言表するに如何なる言葉を以てすべきか。何となれば、もし我々に悟性があるならば、一人ゐても衆人と一緒にゐても斷えず讚歌を歌ひ、神に感謝し、其恩澤を語らないでどうする。我等が地を掘る時、耕す時、食する時、此の讚歌を神の爲に歌ふべきでないか。「神は偉いなり。神は我等に、以て耕すべき斯かる器を與へたり。神は偉いなり。神は我等に手と、飲む力と、胃と、不知不識の生長と、睡眠中にも尙呼吸する力とを與へたり」と。我々は機會ある毎に之を歌ひ、そして此等の事象を了解し且之を正しく使用する性能を我々に與へた事を思つて、最も偉大にして神聖なる讚歌を歌ふべきである。さて、君等は大概盲目になつてゐるが、誰か此の役目を果し、衆に代つて神の爲めに讚歌を歌ふべき者がなくていゝか。蹇へたる此老生が、神に讚歌を

歌ふ外に何の能がある。そこでもし私が鶯であるならば、私は鶯の役目を果たしたい、もし白鳥であるならば白鳥らしく振舞ひたい。然し私は現に理性を有する生物で、神を讚美すべき者たる以上、それが私の仕事である。私が此の地位を保つ事を許されてゐる限り、私はそれを果たし、此の地位を去るまい。私は君等が私と共に此の歌を合唱する事を勧める。

一七 論理の必要

一切の事象を分析し完くする性能は理性で、そして理性それ自身が分析されずにあるべきものでない以上、理性を分析するものは何か。此の分析は勿論理性自身か或は他物によつて行はるべきものである。然らば此の所謂他物も亦理性であるか或は理性以上の他の何物かである、然し斯かる事は不可能である、然しもしそれが他の理性だとすれば、又其の理性を分析する者は何か、斯くして底止する所を知らない。故に理性は理性自身によつて整理されるものと云ふ外はない。『さうだ、然し、一層緊要な事は我々の意見を矯正する事である。』然らば此點に就いて聴きたいのか。では聴け。然し萬一君が私に向つて、『おれには君の議論の眞偽が判り兼ねる』と云ふならば、そして萬一私が曖昧な事を云ひ、且君が、『はつきり云へ』と云ふならば、私はもはや君に用はない。『一層緊要な事は』云々なる君自身の言葉を君へ返上しよう。(エビクター)

トスは自己の論敵の口吻を其の儘真似て云うてゐる、彼の心は、其論敵が難解だと稱するのはやがて論理の必要なる事を示すものだ、一層緊要なる事は論理だと云ふにある。思ふにそれ故(ストアの教師は)推論の術を先づ極めてかゝるのだ、丁度穀物を量る前に度量を吟味してかゝるやうに。然し先づモディウス(乾量の名)とは何か、秤とは何かを極めないで、どうして尺度や重量を量る事ができる。

それ故かう云ふ場合に他物を悉く知るべき規準を十分に知り、正確に吟味しておかなければ、他物をどうして正確に検査し、完全に知る事ができよう。さうだ。然しモディウスとは木材に過ぎぬ、果實を結ばないものである。が、それは穀物を量るものである。論理も亦實を結ばない、と君は云ふ。此の事に就いては後で考へて見よう。然し假りにさうだととしても、論理には、他物を區別し吟味する力があれば十分である。そして謂はゞ尺を計り重量を量る力があれば十分である。誰がかう云ふか。それはクリシッポスカ、ゼーノーンか、クレアンテースだけか。アントイステネーヘもさう云はなかつたか。(犬儒學派に屬し、論理を排斥した人)名稱の研究は教育の始なりと云つた人は誰だ。そしてソークラテースはさう云はなんだか。クセノフォーンが、『彼は各名稱の意味如何、即ち名稱の研究より始めたり』と云つたが、それは誰れの事を云つたのか。

然らばクリシッポスを理解し解釋すると云ふ事は、偉大な驚嘆すべき事であるか。誰がそんな事を云つたか。然らば驚嘆すべき事とは何か。

自然の意志を理解する事である。

では君は、獨力でそれを會得する事ができるか。君は其の外何を必要とするか。何となれば、凡そ人が過失を犯すのは、無意志からであり、そして君が既に眞理を解してゐるとすれば、君は必然正しい行をする筈だからである。

然し實を云ふと、おれには、自然の意志が判らない。

然らばそれを解釋してくれる者は誰だ。

クリシッポスだと云ふ事だ。おれは進んで此の自然の解釋者の云ふ所を研究しよう。最初おれには彼の云ふ事が理解できぬ。おれはクリシッポスの解釋者を求める。(そこで解釋者は云ふ)『ローマ語で書いてあるものとして(茲では本人がローマ人で、クリシッポスの書いた希臘語をよく知らない者と看做してある)何と言つてあるか説明して見よ』と。『解釋者がこんなに威張るのはどうしたものか。』

たとひクリシッポスでも單に自然の意志を解説するだけで自分がそれを實行しないならば、決して不遜であつてはならぬ。況んや其の又クリシッポスの解釋者に於てをや。何故なら、我々は

クリシッポスの故にクリシッポスを要するのではなく、自然を理解する爲めに彼を要するのだからである。又我々は卜者の爲めに卜者を要するのではなくて、彼を通して未來を知り、諸神の與へる兆を知りたいからである。又我々は動物の内臓なるが故に其の内臓を必要視するのでない。此等(動物の内臓を見て吉凶を判断する風があつたのである)を通じて兆が示されるからである。又我々は唯だ鳥や大鴉を眺めて驚嘆するのでない、彼等を通して兆を啓示する所の神を眺めて驚嘆するのである。

故に私は此等の事象の解説者や卜者の處へ行つて、『私の爲めに内臓を見て、どんな兆が出てゐるか教へてくれ』と云ふ。そこで其の人は内臓をとり、それを開いて、判断する。曰く、『君には本來支障や強制を受けない所の生得の意志がある。内臓を見るとさう出てゐる。私は先づ承引と云ふ問題に就いて君に此の事を教へてやらう。一體、君が眞理を承引する事を誰が阻止し得るか。』『誰もできない』『誰が君を強制して虚偽を承引させる事ができるか。』『誰もできない。』『そこで君は此點に於て支障、強制、阻碍を受けざる所の意志の力を有つてゐる事を知るのである。然らば事物に對する欲望及び追求に就ても此通りではないか。して追求心を征服するものは他の追求心ではないか。欲望、嫌惡を征服するものは他の欲望、嫌惡ではないか。然し君は云ふ、『おまへがもしおれの面前へ死の恐怖をおくならば、おまへはおれを強制する事ができ

る」と。否、君を強制するものは君に示されたものではなくて、斯くくする方が死ぬよりもましだと思ふ君の意見である。それ故、此の點に於ても君を強制するのは君の意見だ、換言すれば意志が意志を強制するのだ。何となれば、もし神が、神自身から取つて我々に與へた所の自身の部分をば、神自身の爲に或は他の爲に支障されたり強制されたりするやうにしておいたとすれば、彼はもはや神でなく、又我々に就いて彼が相當の考慮を回らしてゐない事になるであらう。』

ト者は尙云ふ、『犠牲の内臓を占つたら以上の事が出た。君に現れた意味はこれだ。君は自由にならうと思へば自由になれる、誰をも咎めまいと思へばさうなれる、誰をも非難しないであらう。一切が君の心と、同時に神の心とに適ふであらう』と。

此の神託を受ける爲めに私は此のト者と哲學者とを訪ねる、そして此の解釋の故に彼を讚美するのではなく、彼が解釋を與へる所の其の事柄を讚美するのである。

一八 他人の過失を憤る勿れ

哲學者はかう云ふ、すべての人の原則は唯だ一つである、即ち承引の場合は、或事柄を然りとする信念から發し、否認の場合は或事柄を然らずとする信念から發し、判断を差控へる場合

は或事柄を不確なりとする信念から發する。それと同様に、物を追求する場合は其の物が人の利益だと云ふ信念から發するのである。そして一物を利益だと考へながら他物を欲求し、又は一物を正しと考へながら他物を追求する事は不可能であると。果して然らば我々は何故多くの人に對して憤るか。『彼等は盜賊だ、追剽だ』と君は云ふかも知れぬ。然し何を指して君は盜賊だ、追剽だと云ふか。彼等は善惡を穿き違へてゐるのである。然らば我々は彼等に對して憤るべきか、憐むべきか。寧ろ彼等の誤謬を指摘してやれ、然らば彼等は彼等の誤謬を放棄するであらう。もし彼等が其の自己の誤謬を知らなければ、彼等は現在の意見よりも勝れたものを有つてゐないのである。

『然らば此の追剽や此の姦通者を退治するのが悪いか。』

さうは云はずにかう云へ、『至要事を誤解し、黒白を見別ける視力に於てははなく。善惡を識別する能力に於て盲いた此の者、これを退治するのが悪いか』と。もし君がかう云ふならば君は自分の言が如何に不仁であり、それが丁度、『此の聾盲者を退治しては悪いか』と云ふのと同じだと云ふ事を知るであらう。然しもし、最大の禍とは最大事を失ふ事であり、各人の最大事は、當然あるべき様なる意志であり、そして誰か、此の意志を缺いてゐるとするならば、君は何故又其人を怒るか。君、君は他人の曲事を見て、其の爲に自然に反する心を起してはならぬ。

寧ろ彼を憐め。此の易慣性と易慣性を棄て、衆人の吐く、「此の咀ふべき、憎むべき奴よ」と云ふ言を棄てよ。君はどうしてそんなに早く利口になつたのか、どうしてさう怒りつばいののか。然らば何故我々は怒るのか。それは、我々が、かう云ふ人々から奪はれた物をそんなに大事がるからであるか。自分の衣服を讚美するな、然らば盜賊を怨む事もなくなるであらう。妻の美貌を讚美するな、然らば姦通者を怒る事もなくなるであらう。盜賊も姦通者も君の所有する物の内に席を有するのでなく、他に屬して君の權内には存せざる事物の内に席を有すると云ふ事を悟れ。此等の事物に暇をやつて、それを無價値だと悟つた上は、もはや誰を怒るか。然し此等の事物を重んずる限りは、盜賊や姦通者に對して怒らずに、寧ろ自分自身に對して怒れ。かう考へるがい、君は立派な着物を有つてゐる、隣人は有つてゐない、君は窓を有つてゐる、君は着物を乾して見せびらかしたいのだ。盜賊は人の善の何處にあるかを知らないで、善は衣服を所有する事に在りと考へてゐる、丁度君と同じやうに。然らば彼はそれを取りに来てはならないか。君が、人に其の欲しがる菓子を見せびらかしながら自分でみんな食べても、其の時彼等がそれを君から奪ふやうな事はなからうと君は思ふか。彼等を挑發するな、窓を有つな、着物を乾して窓から見せびらかすな。私が最近神棚の側に鐵製のランプをおかせておいた、戸口に音がしたので走つて行つて見るとランプが盗まれてゐた。私はつくづく考へた、ランプを取つ

て行つた者には何も不思議はないと。それからどうした。私は私自身に向つてかう云つた、「おまへは明日土製のランプを見出すであらう、人間は唯だ有つてゐるものを失ふだけだから」と。私は上着をなくした、上衣を有つてゐたからだ。私はあたまが痛い。自分の角の痛い事があるか。(あたまが有るから痛む事もある、角はないから痛む事はないと云ふ意味)然らば何故煩悶するか。何となれば、我々は我々が所有する物を失ひ、我々が所有する物に就いて痛みを感じるだけだからである。

然し暴君は縛るであらう。何をか、足だ。暴君は刎ねるであらう、何をか、首だ。然らば暴君が縛つたり刎ねたりしないものは何か、意志である。是れ古人が、「汝自身を知れ」と云ふ格言を教へた所以である。それ故我々は、先づ小事に就いて我々を鍛練し、それから大事に及ぶべきである。「私はあたまが痛い。」「あ、」と云ふな、私は耳が痛い、「あ、」と云ふな。此の意味は呻吟するなと云ふのではない、衷心から呻吟するなと云ふのである。召使が繻帶を持つて來るのが遅くてもわめいたり煩悶したりして、「みんなでおれを憎んでゐる」など、云ふな。そんな事を云ふ人間は誰からでも憎まれるものだからである。今後はかう云ふ意見を根柢として直立して自由に歩け。競技者のやうに自己の身體に依頼するな、何となれば、人間に於ける必勝の分は驢馬のそれと異なるからである。

然らば必勝者は誰か。それは意志に無關係な事象の爲めに惑亂されない人である。そこで私は一々の事情を検査してから、競技者を批評する場合には、「彼は第一回戦に勝つた、さて第二回にはどうだらう。暑氣が激しくなつたらどうだらう、してもしオリンピックヤへ出たらどうだらう」と云ふが、此の場合にも私は同じ事を云ふ、「彼の行手へ金錢を投つても、彼はそれを輕蔑するだらう。さて彼の行手へ少女を置いたら其の時はどうだ、そして暗がりだつたらどうだ、又少女でなくて一寸とした名譽だつたらどうだ、罵詈だつたらどうだ、讚辭だつたらどうだ、死だつたらどうだ。彼は一切を征服し得る。暑かつたらどうだ、雨だつたらどうだ、そしてもし彼が憂鬱だつたらどうだ、彼が眠つてゐたらどうだ、依然として彼は征服する。」これこそ私の所謂必勝の競技者であるのだ。

一九 我等は暴君に對して如何に振舞ふべきか

無教育者が何か勝れた點を有つてゐるか或はさうでないのにさうだと自分で思ひ込んでゐる時には必ず其の爲めに慢心する。例へば暴君が「おれは一切の支配者である」と云ふ。そこで君は私の爲めに何ができるか。君は私の欲望に何等の支障なからしめることができるか。どうして。君は君の避けんと欲する物を悉く避けるだけの必勝の力を有つてゐるか、君は間違なく自

分の目的を追求する力を有つてゐるか。どうして此の力を有つてゐるか。さて君が船の中にある時、君は自分自身に信頼するか、それとも舵手に信頼するか。戦車の中にある時、御者を措いて誰に信頼するか。他の一切の技能ではどうか。『其の通りである。』然らば君の力は何處に在るのか。『庶民が自分を敬ふ。』さて私も亦自分の益を大切にそれを洗ひ拭く。そして私の油壺をかける爲めに壁に木釘を打つ。そこで此等のものは私よりも勝れてゐるか。否、寧ろ此等のものは私の足らざる所を補ふ、それ故私は此等に配慮するのである。で私は自分の驢馬を世話しないか。私は其脚を洗つてやらないか。彼を清潔にしてやらないか。君は各人が自己を尊敬するものであつて、君に對しては自分の驢馬に對すると同じ尊敬を拂つてゐるのだと云ふ事を知らないのか。何故と云ふに、誰れが君に對して人としての敬意を拂つてゐるか。あつたら教へてくれ。誰れが君に私淑するか。ソークラテースに倣ふと同じやうに誰れが君に倣はうとするか。『然しおれはおまへの首を刎ねる事ができる。』尤もだ。私は忘れてゐた、私は君に對して丁度熱病や腹痛に對すると同じだけの考慮を拂ひ、ローマの熱病神に祭壇をしつらへると同じく君の爲めにも祭壇をしつらへなくてはならぬと云ふ事を。

然らば衆人を惑亂し威嚇するものは何か。暴君と暴君の衛兵とか。否、決してさうではない。私は然らざらん事を希望する。本来自由であるものが他物の爲めに惑亂され、或は自己以外の

他物に支障されると云ふ筈がない。人を惑亂するのは彼自身の意見である。何となれば、暴君が人に向つてきさまの足を縛るぞと云ふとき、足を重んずる者は、『許して下さい、憐んで下さい』と云ふ、然し自己の意志を重んずる者は、『よかつたら縛つてくれ』と云ふからである。『おまへは何とも思はないか。』『思はない。』『おれが支配者であると云ふ事をおまへに思ひ知らせてやらう。』『それはできない、ゼウス神は私を自由者にしてくれた。君はゼウス神が自分の愛兒の奴隷にされるのを放つておくと思ふか。然し君は私に死骸の支配者である。持つて行け。』『ではおまへがおれに近づく時、少しもおれを尊敬しないか。』『さうだ、私は私自身を尊敬する。私をして君を尊敬してゐると云はしめたいと君が思ふならば私は断言する、私は私の土瓶に對すると同一の敬意を君に對して有つてゐると。』

これは決して邪まな自愛心ではない。何となれば動物は何事でも自己の爲めにするやうにできてゐるからである。太陽すら萬事自己の爲めにする。否、ゼウス神すら尙然りである。然し神が雨の施與者、果實の施與者たり、諸神及人類の父たらんと欲しても、神が人類に有益でない限りは、さう云ふ機能と、さう云ふ名稱とを得られるものでないと云ふ事が君に判るであらう。そして一般に神は、理性ある動物(人間)の性質として、其の動物(人間)の共同の利益に何物かを寄與せざる限り己れ自身の利益をも決して得られないやうにしておくのである。斯くして、又

此の意味に於て、人間が何でも自己の爲めにと云ふ事は社交性に悖らないのである。何となれば、君は何を期待するか。人が己れ自身を、己れの利益を等閑にする事をか。もしさうならば一切の動物に自愛心と云ふ同一の根本原理があると云ふ事が成立たなくなる。

それでどうか。我々の意志に無關係な事象に就いて、不合理な根本觀念を懐き、其等を宛ら善又は悪だと思ふならば、我々は暴君を尊敬せざるを得なくなる。そして私は其の尊敬心は暴君へだけで、侍従にまでも及ばない事を希望する。皇帝から虎子おまこの主任にして貰ふと人が忽ちにして賢者になり上がるのはどうしたものだ。そして我々は忽ち、『フェリチオは仲々利口な事を云ふ』など、褒めるがどうしたものだ。願はくは彼世び皇帝の臥房より放逐せられて、其の痴漢たる本性を君に示さん事を。

エバフロディトゥス(嘗てエビクテートスを奴隷としてか、へた人)は奴隷として靴工をか、へてゐたが、役に立たぬと云ふので彼を賣つた。然るに僥倖にも、此の奴隷が朝臣の一人に買はれて、皇帝の靴工になつた。そこで、エバフロディトゥスは彼にどれだけ敬意を表するやうになつたか、君に見せたか。『フェリチオさんごきげん如何です』と。で、我々の一人が、『主人(エバフロディトゥス)は何をしてゐられるか』ときいて見たら、『主人はフェリチオと何か相談してゐる』と云ふ事であつた。彼は先に此の人間を役に立たぬと云つて賣つたではないか。然らば誰

れが靴工を一朝にして賢者にしたのか。これは意志に關係ないものを重んずる一例である。

保民官に昇進した者があるのか。そこで彼に會ふ者はすべて、彼に祝詞を呈する。或者は彼の眼に、或者は其の頸に、そして奴隷は其の手に接吻する、彼は自分の邸へ行くと煌々と松明がついてゐる。彼は廟宇に登り、此の場合の犠牲を供へる。さて善良な願望を有つたと云ふ理由で犠牲を供へた者があるか、自然に順つて行動したと云ふ理由で犠牲を供へた者があるか。何となれば、實際我々は、善だと信ずる事物の故を以て神に感謝する者だからである。

今日或人が、アウグストゥス帝の殿堂（アウグストゥス帝を神に祭つた殿堂で、ニコポリスに在つたのである）の祭司になりたいと云ふので私に相談した。で私は彼に云つた、『君放つておけ、勢多くして何の得る所もないのだ』と。『然し祭司になれば條款を作製する者が私の名を年號につける事になる』と彼は答へた。『では君は條款を讀む者の側にゐて、其人に、「そこに出てゐるのはおれの名だ」と云ふのか。そして君は今では、いつでも其處へ行つてそんな事が云へるが、死んだらどうするつもりか。』『自分の名が残る。』『名を石に刻んでおけ、そんなら残るだらう。』『然しニコポリス以外では君に關するどんな記憶が残るか。』『然し私は金の冠をつける事になる。』（祭司が犠牲を供へる時、金冠をつける）『苟も冠が欲しいならば、薔薇の冠をとつてそれをかぶれ、其の方が見かけは上品だから。』

二〇 理性は如何にして理性自身を省察するか

各技藝、各性能は、一定の事象をそれ／＼特別に觀察するのである。故に觀察するものが觀察されるものと同種類に屬する時は、それは必然それ自身をも觀察する事になる。然し種類が違ふ時には、自身を觀察すると云ふ事にならない。例へば靴工の技術は皮革に用ひられるが、然しそれ自身は材料たる革とは別物である。故にそれはそれ自身を觀察しない。又、文法家の術は説話を明晰ならしめる爲めに用ひられる、然らば其の術と明晰な説話とは、同一物であるか。否、決してさうでない。故にそれはそれ自身を觀察することができない。さて理性、それは本來何の爲めに我々に與へられてゐるか。表象を正しく使用せんが爲である。然らば理性其の物は何か。諸々の表象の體系（複合）である。故にそれは本來自己を省察する所の性能を有つてゐるのだ。又健全なる智慮、それは何物を觀察する爲めに我々に屬してゐるか。善と惡と、善惡いづれにも屬せざる無性のもとを觀察する爲めである。然らばそれ自身は何であるか。善である、智慮の缺如、それは何であるか。惡である。そこで君は、健全なる智慮とは必然自己と其の反對との双方を觀察するものだ、と云ふ事が判るか。故に表象を検討し、識別し、吟味せずには一物をも許容しないと云ふ事が哲學者の主要任務である。貨幣に就いてすら判るでないか。

即ち我々がそれに幾分でも利害関係を有するやうだと、我々は工夫を凝らし、試金者は様々な方法で貨幣の価値を試験せんとし、外觀や、手ざはりや、臭ひや、そして最後に音でそれを見るのである。彼は貨幣を落して、音を調べ、そして一回聴いたゞけでは満足しない。斯くして深く注意する結果、彼は音楽家になる。これと同様に我々が、正か、誤かと云ふ事から重大な結果を生ずると思ふ場合には、誤を生ずる事柄に對して非常に注意する。然し我々の憐むべき支配的性能の問題になると、我々は欠伸したり、眠つたりして、漫然、各表象を認容したりする、其の禍害に氣がつかないからである。

君が善惡に就いて如何に放心であり、善にも惡にもあらずる無性物に就いて如何に熱中するか、それを知りたければ、盲目になつた場合、欺かれた場合、それをどう感ずるか考へて見よ。然らば君が善惡に對する感じの甚だしく間違つてゐる事が判るであらう。然しこれは多大の準備と多大の勞作及び研究を要する問題である。さて君は至要の術をば僅少な勞作で修得できると思ふか。然も哲學者の要旨は極めて簡單である。それが知りたくばゼーノーン（ストア學派の創唱者）の文書を讀めば判る。

『人間の目的は諸神に従ふに在り、善の本性は表象の正用に在り』と、此の語数が如何に少いか。然し神とは何ぞや、表象とは何ぞや、個別的及普遍的性質とは何ぞや。かうなると實際多數の

語が必要になる。次ぎに萬一エビクローロスが來て、善は肉體に存せざるべからずと云ふと、そこで又多數の語が必要になる。そして我々是我々に於ける指導原理とは何ぞや、根本的本質的原理とは何ぞや、と云ふことを學ばなくてはならぬ。蝸牛の善は其の殻に在りとは云へまい、然らば人間の善は肉體に存すと云へるか。然しエビクローロスよ、君自身はこれよりも勝れた何物かを有つてゐるのだ。君の衷に在つて熟慮するものは何か、萬象を検討するものは何か、肉體其の物に就いて、『肉體は主要部分なり』との判断を下すものは何か。何故君は、夜、燈をつけてまで我々の爲めに勉強し、そんなに多數の著作をするのか。我々が、眞理の何たるか、我々の誰なるか、我々と君との關係如何に就いて無知ならざらんが爲めにか。そこで議論が多數の語を必要とするやうになるのである。

二二 賞讃を希ふこと勿れ

人がもし人生に於て正當の分を守るならば、其の分外の事物に垂涎しない。君は一體何を待望するか。

『おれはおれの欲望と嫌惡とが自然であり、おれの追求と回避とが自然であり、目的、計畫、承引が自然に順つてをればそれで満足である。』

然らば何故君は、咽喉の中に鐵串かたくしでも入つてゐるかのやうに我々の面前を容態ぶつて歩くのだ。

『のみならず、おれは、會ふ人毎に褒めて貰ひたい、そして後に隨いて來る者から、噫偉大なる哲學者よ』と叫んで貰ひたい。』

君が褒めて貰ひたいと思ふ其の人は誰だ、彼等は君が常に狂人と呼ぶ所の者ではないか。然らば君は狂人に褒めて貰ひたいのか。

二二 本有概念

本有概念とは萬人に共通のものである。一の本有概念は他の本有概念と衝突するものでない。何故なら、我々の内に、『善は有用なり、望ましきものなり、如何なる場合にも我等の追従追求すべきものなり』と云ふ事を否定する者が何處にある。『正義は美なり、我等に相應はしきものなり』と云ふ事を否定する者が何處にある。然らば矛盾はどう云ふ場合に起るか。本有概念を個々物に當て箴める時に起るのだ。『彼の行は正しい、彼は勇士である』と云ふ者があると一方では『さうでない。彼の行は馬鹿らしい』と云ふ。そこで人の間に論争が起る。之がユダヤ人とシリヤ人とエヂプト人とローマ人ととの争ひである。聖徳が萬物に優り、常に欣求すべきものな

りや否やと云ふ争ひではなくて、豚肉を食ふが神聖なりや否やと云ふ争ひである。アガムノーンとアキレースとの間にも此争が見られるであらう。二人を喚び出せ。アガムノーンよ、君はどう思ふか、合宜にして正義なる事は須く實行すべきではないか。『成るほどさうだ。』さてアキレースよ、君はどう思ふか。善は須く之を實行すべしと云ふ事を君は認めないか。『勿論さうだ。』然らば君等の本有概念を當面の事件に當て箴めて見よ。茲に論争が始まるのである。アガムノーンは云ふ、『おれがクリセイスを彼女の父親へ返すのは至當でない』と。アキレースは云ふ、『當然返すべきである』と。兩者のいづれか、『當爲』又は『義務』なる本有概念を誤用してゐるに違ひない。更にアガムノーンは云ふ、『そこでもしおれがクリセイスを返すべきだとするならば、おれは當然君等の中の誰かに賞與を頒けて貰ふが至當である。』アキレース答へて曰く、『ではおれの愛人(プリセイス)をよこせと云ふのか。』『さうだ、君の愛人をだ。』『それではおれだけが賞與なしで濟まさなくてはならないのか。』『おれだけが賞與がないのか。』斯くして争ひは起る。

然らば教育とは何か。教育とは、本有概念を自然に従つて個々の事象に適用し、次ぎに諸々の事象の内、或ものは我々の權内にあるが或ものは然らざる事を識別する途を學ぶ事である。即ち我々の權内に在るものは、意志と意志に依存する一切の行爲とである。我々の權内に在らざる

るものは身體と肉體の諸部分と財産と兩親と兄弟と子女と祖國と、そして一言に約せば、我々と共棲する所のものだと云ふ事を知る途を學ぶ事である。然らば我々は善を何處に定むべきか。如何なる種類のものを善とすべきか。我々の權内のものをか。

然らば健康、四肢の健全、生命は、善ではないのか。親子、祖國は善でないのか。そんな事を云つても誰が承知する。

では再び善の觀念を此等の事物へ移して見よう。人が損害を受けて、何の利益もない場合に其の人は喜ばうか。

それは不可能である。

そして彼は社會に對して適當の振舞を續ける事ができようか。できない。

何故なら私は性來自身自身の利益を顧念するやうにできてゐるのだからである。地所を有つのが私の利益なら、それを隣人から奪ふのも亦私の利益である。上衣を所有するのが私の利益なら、それを浴場から盗んで來るのも亦私の利益である。是れ戦争、内亂、虐政、陰謀の由つて起る所以である。そして私は、もはやゼウス神に對する私の義務を履行する事がどうしてできよう。何故と云ふに、私が損害を受けて不幸に陥るものとすれば、神は私の事を考慮しないので

ある。して神が私を現在の境遇に放置するならば、神が私にとつて何であるか。茲に於て私は神を憎む。然らば何故我々は熱病神の如き惡鬼の爲には無論の事、ゼウス神の爲にも殿堂や像を建てるのか。してゼウス神はどうして救主たり、雨の施與者たり、果實の施與者たり得るか。そして實際、我々がもし善の本質をかう云ふ物に在ると考へる以上は、かう云ふ結果になるのである。

然らば我々はどうしたらいいのか、これこそ眞理を生まんとして勞苦する眞の哲學者の研究問題である。さて私は善惡の何たるかを知らない。私は狂つてゐないか、狂人だ。然し私が假りに善の所在を私自身の意志に屬する事物の中に定めたとせよ、世人が私を笑ふであらう。指に澤山金の指輪を嵌めた白髪おやちが來て、頸を横に振つて云ふ、「これ、我が子よ、哲學を勉強するもい、が、然し知慧才覺も幾らか必要であるぞ。おまへのやつてゐる事はみんな馬鹿けてゐる。おまへは哲學者から三段論法を教はるが、然し、實行の事はおまへの方がよく知つてゐるのだ。』私がよく知つてゐるのなら、何故私を叱るのか。』こんな奴に何と云つてい、か。私が黙つてをれば、彼は怒鳴り出すであらう。私はかう云はなくてはならぬ、「宥してくれ。愛人を宥してやるやうに。私は本心を失つてゐる、私は狂人だ」と。(こんな事を云つてそんな人間を追拂ふより外に策はない、と云ふ意味)

二三 エピクローロスを駁す

エピクローロスすら我々が天性社交的だと云ふ事を認めてゐる、然し一旦我々の善の所在を彫骸(身體)に定めてしまつたので、外に言ふ事がなくなつたのである。何故なら、一方に於て彼は、善の性質に遠ざかつたものを褒めたり認容したりしてはならぬと極力主張するからである。其の主張は正しい。さて我々がもし我子に對して性來愛情がないものとすれば、どうして君の説から窺はれるやうな、子供に對する世話心などが起らうか。

何故君は賢者に子女を養育すべからずと説くのか。何故これが爲に賢者が煩累を招くと心配するか。何となれば、賢者は家の中で育つ所の鼯鼠の爲に煩累を招く事があるか。家の中の小さい鼯鼠が賢者に哀哭したとて賢者はそれを氣にするか。然しエピクローロスは一旦子供が生れ、ばもはや子供を愛せざる事及び子供の爲に配慮せざる事が我々の権内の事でなくなる(即ちこれを愛し、これに配慮せざるを得なくなる)と云ふ事を知つてゐる。エピクローロスは云ふ、「それ故苟も知慮ある者は公事に關係せず、何となれば、彼は斯かる事柄に携はる者に如何なる責任の生ずるかを知るを以てなり。實際我等がもし人中に在る事恰も蠅群の中に在るが如く振舞はんとせば何物にも拘束せらる、事なければなり」と。然も此の事(人たるの責任)を知りなが

ら、エピクローロスは我々は子女を養育すべからずとまで云ふのである。然し羊さへ其の子を見棄てない。狼もさうだ。そして人間は自分の子を見棄てるのか。君はどう云ふ考へるか、我々は須く羊の如く愚かなれと云ふのか。然し彼等さへ自分の子を見棄てない。それとも狼の如く兇暴なれと云ふのか。然し狼さへ子を見棄てない。さて自分の子が地に倒れて泣くの見ながら尙君の説に従はうとする者があらうか。君の父母が、將來君がこんな事を云ひ出すと云ふ事を神託によつて承知してゐたとしても、君の両親は決して君を見棄てなかつたであらうと、私は竊にかう思ふのである。

二四 我等は如何にして困難と闘ふべきか

艱難に出會つて始めて人の眞價が判る。それ故もし君が艱難に出會つたら、神が丁度力技の教師のやうに自分を亂暴な青年敵手に對抗させるのだと思へ。

「何の爲めに」と君は云ふかも知れぬ。勿論、君をオリンピアの勝利者にしようとしてゐる。然しそれは決して樂ではない。私の考へでは、君よりも有益な艱難に出會つてゐる者はあるまい。もし君が、競技者の其の少壯敵手に對する如く、其の艱難を利用しようと思ふならば、我は今ローマへ向けて一人の斥候を送りつ、ある^(二)。然し誰も臆病な斥候を送らない、そんな斥

候は、何處かで音を聞いたたり、影を見たりすれば、慄へて走り歸り、敵は近きに在りと報告する。今君が我々の處へ來て、『ローマの物情は寔に恐ろしい、殺戮は酸鼻である、追放は恐ろしい、讒謗は恐ろしい、窮乏は最も甚だしい。味方の者よ、逃れよ。敵は近くにいる』と云ふならば、我々は、答へて云ふ、『去れ、汝自身の爲めに豫言せよ。我々は唯だ一つの過失を犯してゐる、それは汝の如き者を斥候として送つた事である』と。

(一) ドミニティアヌス帝の當時、哲學者はローマ及イタリヤから放逐された。エピクテイトスも亦ローマからニコポリスへ行つて其處で講筵を開いたのである。茲では、暴君ドミニティアヌス帝治下の國情を知る爲めに、ニコポリスからローマへ行つてゐる誰かの事を指してゐるものらしい。

君より前に斥候(間諜)として送られたディオゲネースは別な報告を我々に齎してゐる。彼曰く、『死は悪でない、それは卑しいものでないからである、名聲とは狂人の噪音に過ぎぬ』と。して此の間諜は快苦に就いて、貧窮に就いて何と云ふか。彼曰く、『裸體は紫の衣に優る、地上に眠るは最も軟き床に眠るのである』と。彼は彼の一人の言の證據として、彼自身の勇氣、彼の平靜、自由、竝に彼れの健かな外觀、堅實な身體を示してゐる。彼曰く、『近くには敵影がない、世は平和である』と。『ディオゲネースよ、どうしてさうか。』彼答へて曰く、『おれは打たれてゐるか、おれは傷ついてゐるか、おれは逃亡したことがあるか』と。斥候は須くかうあるべきである。然し君は、我々の處へ來て次ぎくと報告する。君、もつと一度彼處へ行き、恐怖心を棄て、もつとはつきり探索したらどうだ。

『そしておれはどうするのか。』

君が船から上がる時にどうするか。君は舵とか橈とかを持つて行くか。それでは何を持つて行くか。君は君自身の物、君の褌や行李を持つて行く。さて、君が自分の物を覺えてゐる限りは、決して他人のものを、れのものだと云ふまい。帝(ドミニティアヌス)は云ふ、『おまへの元老院議官の裝束を棄てよ』と。そこで私は騎士の服裝を着けるのだ。『それをも脱げよ。』見よ、私はもう外袍しか着てゐない。『其の外袍をも棄てよ。』見よ、私は裸になつた。『然しおまへを見るとまだ嫉妬心が起る。』それなら私の貧弱な身體をすつかり没收してくれ。私が命令一下直に自分の身體を放棄する事ができるのに、尙私は其の人を恐れようか。

然し或人は私に其の財産を相續させてくれない。

そしてどうか。私は其等の財産が一として私の物でないと云ふ事を忘れてゐたのか。然らば我々が其等を我が物と呼ぶのはどう云ふ點でか。宿屋で、これはおれの寢床だと云ふのと同じやうなものである。旅屋の主人が死ぬ時、君に寢床を遺産として譲つてくれるならば、萬事都合がい、然し、それを他人へ渡すならば、其の人がそれを貰ふので、君は又別の寢床を探す

であらう。で、もしそれが見つからなければ、地上で眠るであらう。但し疚しからざる心を以て、鼾睡せよ。そして記憶せよ、悲劇とは、富者や國王や暴君の間に起るもので、貧者は悲劇中の人物となる事なく、唯だ出語りの一人となるだけだと云ふ事を。實際、國王は第一幕では順境で、『花環を以て宮殿を飾れ』と命ずる。それから、第三幕か第四幕ぐらゐになると、『噫、キタイローンよ、何故汝は我れを迎へたるか』と叫ぶ。あさましき者よ、足下の王冠は何處へ行つたか。足下の冠冕は何處へ行つたか。衛兵は全く足下を助けないので。

それ故、君がかう云ふ入々に近づく時には、自分は悲劇俳優に會ふのだと思へ。否、俳優ではなくて、オイディポス自身にである。然るに君はこんな人を幸福だと思つてゐる。彼は大衆を引き具して歩くからと。ところで私も衆人と一緒になつて歩くのだ。要するに此の一事を忘れるな、曰く、『戸は開けり』と。小兒よりも臆病であるな、小兒が遊びに倦むと、『もう遊びたくない』と云ふが、君も、嫌やになつたら、其の通りにせよ。『おれはもう遊ぶのが嫌やだ』と云へ。そして出て行け、然しもつとゐるくらゐなら、泣き言を云ふな。

(一)カイローンアの戦後、ディオゲネースはフィリッパ王の面前へ問諜として引き出された。

(二)死にたくなつたらいつでも死ねと云ふ意味。プリニウスは人間が自由意志に依つて死ぬ機能は、人生の衆苦の中に於て神が與へた最善のものだと云うてゐる。

二五 同 上

もし此等の事が道理であり、そして我々が痴愚でない限り、そして又我々が、『人の善悪は意志に存し、他は一切我等の關知する所にあらず』と主張しても、それが決して偽善でない限りは、我々にはや困惑する理由がなく、恐怖する理由がない。それ故今まで我々が關心した事は、我々の權能に依つて支配されないものである。そして他人の權内の事は、我々の關知しないものである。然らば、此の上尙どんな煩累が我々に残つてゐるか。

『然しおれを指導してくれ』と云ふか。何故、私は君を指導しなくてはならないか。ゼウス神が君に指導を與へてゐるではないか。神は君に、支障阻碍を受けざる所の君自身のものと、支障阻碍を受ける所の君自身の所有にあらざる物とを與へてゐるではないか。然らば君は神からどんな指圖、どんな命令を受けて來たのか。『極力汝自身のものを保て。他に屬するものを貪る事なかれ。廉直は汝自身のものなり、廉恥心は汝自身のものなり、然らば誰か此等のものを汝より奪ふを得ん。汝が此等を用ひんとするに方り、誰かこれを妨ぐるものぞ。されど汝は如何に行爲するか。汝が汝自身の所有に屬せざるものを求むる時則ち汝は汝自身のものを失ふなり』と。かう云ふ教示や命令を神から受けてゐながら、君は今更何物を私に要求するか。私が神よりも有

力であるか。神よりも一層信頼に値するか。然しもし君が此等を守るならば、外に何の必要がある。『然し神がそんな命令をおれに與へた例がない』と云ふか。君の本有概念を呈示せよ、哲學者の證明を呈示せよ、君の屢々聽いた事を呈示せよ、君自身が言つた事柄を呈示せよ、君の讀んだ事柄を呈示せよ、君が靜思した所のものを呈示せよ、然らば此等がいづれも神から出てゐる事を知るであらう。

『然らば我々はいつまで此等の神命を守り、いつまで此の遊戯を繼續するののか。』(前節末尾參照)。

遊戯が順調に續く間繼續するのだ。サトルナリア祭に於ては王が籤で選ばれる。かう云ふ遊戯をするのが習慣になつてゐるからである。で、王が命令を下す、曰く、『汝は呑め、汝は酒を調合せよ、汝は歌へ、汝は行け、汝は來れ』と。私は、私が命令に背いて其爲に遊戯を壊すといけないから、其の命令に従ふ。然し假に王が、『汝は汝自身を不幸なりと思へ』と云ふなら、私は答へて云ふ、『私はさうは考へられない、誰が私にさう考へる事を強制し得るか』と。又我々がアガムメノンとアキレースの劇を演ずる事に相談を極めたとする、アガムメノンに扮する者は私に向つて、『アキレースの許に行つて、彼よりプリセイスを奪へ』と云ふ、で、私は行く。アガムメノンが『來れ』と命するならば、私は來るのである。

何故と云ふに、我々が人生に處するには丁度假言的推論に對するやうでなくてはならぬ。『假に今は夜なりと假定せよ。』夜と假定しよう。然らば、『今は晝なりや。』否、何となれば私は、『今は夜なり』と云ふ假定を承認したからである。『汝今は夜なりと考ふるものと假定せよ。』さう假定しよう。『されど尙ほ今は夜なりと實際に信ぜよ。』それは上の假定からは生ずるものでない。他の場合でも此の通りである。『汝不幸なりと假定せよ。』さう假定しよう。『然らば汝は不幸なりや。』さうだ。『然らば汝は逆運に惱まざるものなりや。』さうだ。『されど又汝が不幸なりと實際に信ぜよ。』それは上の假定から生ずるものでない。そして神も亦余の然か信ずる事を禁ずるのである。然らば我々はいつまで此の命令を守るのか。守る事が有益なる限りである。即ち私が合宜且正理なるものを失はざる限りである。

更に、世の中には怒りつばくて氣むづかしい者がゐる。そして、『おれはこんな奴と一緒に食事して毎日ミシヤの戦争談を聽いてゐるに堪へられない。』おれが丘へ登つた話をしたがそれからおれは又包圍されたのだ』と云ふやうな話を。然し中には、『おれは寧ろ食事をして、彼が思ふ存分喋るのを聽きたい』と云ふ者もある。

そして君は此等各意見の價値を比較すべきである。但しそれを爲すに方つて意氣銷沈であるな、惱める人のやうであるな、自分を不幸だと思ふな。何となれば何人もこれを君に強制する

ものでないから。部屋が煙たいか。もし煙がひどくなければ私は室内にゐよう。もし激しければ、出て行く。何となれば、君は始終此の一事を記憶して確保せねばならぬ、曰く、『戸は開けり』と。『ニコポリスに住む勿れ。』と云ふか。私はニコポリスに住むまい。『アテネをも去れ。』私はアテネに住むまい。『ローマにも居住する勿れ』私はローマに居住しまい。『ギャロス島に在住せよ。』私はギャロスにゐよう。然しギャロス島に住むのは濛々たる煙の中に住むやうな気がする。そして私は何人からも居住を妨げられない場所へ行かう。何となれば其の居住地は萬人を容れるからである。して最後の上衣、それは貧弱な身體であるが、これ以上何人も私の上に權能を振ふ事ができぬ。デメトリウス(犬儒)がネロ帝に向つて、『爾、死を以て我れを威嚇す、されど本然の性は爾を威嚇せん』と云つた理由は茲に在る。私が貧弱な身體に心を牽かれる限り、私は自己を奴隸にしてゐるのである。僅少の財産に心を牽かれるならば、やはり同然である。何となれば、私は間もなく、自己が何に囚はれてゐるかを曝露するからである。蛇を打てば、首を引き込ます。其の通りだ、よく聽け、彼が大事な部分を打つのだ。苟も君が大事がつてゐる部分、其の部分を君の支配者が必ず打つのだ。これを知りつ、君は尙、誰れに諛ひ、誰れを恐れるか。

(一)ローマ帝政時代に罪人を送つたエーゲ海の荒涼たる島。

『然しおれは元老院議官の見物席へ一度坐つて見たい。』
それで君が自繩自縛に陥る事を知らないのか。
『ではどうしたら演技場で、うまく見物できるか。』

決して見物するな、さうすれば君は我れと我が身を縛るやうな事にならぬ。君は何故我れと我が身を苦めるか。さもなければ、暫く待て。そして演技が終つてから元老院議官席へ坐つて日向ぼつこをせよ。『自己を窘窮する者は自己なり、即ち我等自身の意見が、我等を窘窮するなり』と云ふ普通の眞理を記憶せよ。何となれば、罵詈が何だ、頑石の傍に立つてそれを罵詈して見よ、何の得る所がある。そこで、もし人が石のやうに傾聴してゐたら、罵詈する人に何の利益があるか。然し罵詈する者が罵詈される者の弱點を踏臺にして押へてゐると、何か々できるのだ。『彼から奪へ』と云ふか、『彼』とは何を意味するのか。『彼の上衣を捕へて剥ぎとれ』と云ふか。『それでおれはおまへに恥をか、せてやつたのだ』と云ふか。それが大に君の爲めになつてくれ、ばい。

ソークラテースの遣り方はかうであつた。彼がいつも顔色自若だつたのは此の爲めである。然るに我々は、自から自由無碍たるべき方法を學習せず、外の事を學習したがる。『哲學者は逆説を語る』と君は云ふ。然し他の技藝にも逆説があるではないか。そして物を見んが爲めに自

分の眼を刺す事よりも逆説的な事があるか。外科醫學を知らぬ者がそれを聞いたら、嘲笑しないか。然らば哲學上の眞理にも、未熟者には逆説的に思はれるもの、少からざる事に何の不思議があらう。

二六 人生の法則とは何ぞ

或人が假言的三段論法を讀みつゝあるのを見て、エビクテートスは云つた、「假定から生ずるものを承認せねばならぬと云ふ事も、やはり此の論法上の法則である」と。然し自然に従つて行動すると云ふ事が一層人生の法則たるに近いのだ。何故かと云ふに、もし我々があらゆる事象あらゆる境遇に於て、自然なるものを守らうと思ふならば、萬事に就いて我々が、條理を逸せず、矛盾を承認しないと云ふ事を以て當然我々の目的とすべき事は明白だからである。そこで哲學者は先づ我々に理論(事象の觀察)を練習させる、これは比較的やさしい。次に我々を一層困難な事象へ導いて行く。何となれば、理論では、教へられた通りにする事に何の妨げも起らないが、實人生の問題では、我々を誤らしめる物が少くないからである。然らば、「余は實人生の問題より着手せん」など云ふ者は嗤ふべきである、困難なものから始めるのは容易でないからである。そして我々は、自分の子供が哲學を學ぶのを好まない所の世の兩親に對して此論法

を用ふべきである。

「父よ、それでは私の行が間違つてゐますか、そして何が私に相應はしいか似合はしいか私には判らないのですか。私が實際それを學習する事ができずにゐるのに、あなたは何故私を咎めますか。もし私が學習してもいゝのならあなたから教へて貰ひたい。もしあなたにできないなら、それを教へることができると言明する人に就いて私が學ぶのを許してください。あなたはどう考へてゐますか。私が故意に悪を犯し、善を逸する者とお考へですか。さうでない事を希望します。それでは私の不正行爲の原因は何ですか。」無智である。「そこであなたは私が無智から脱する事を好まないのですか。怒られるだけでは音楽や航海術は學ばれません。それであなは私があなたの憤怒の力によつて渡生の術が學ばれると考へますか」と。然し眞に學習の意志ある事を示す所の子供のみが、父に向つてかう言ひ張る事を許されてゐるので、反之、宴會の席で誇示し、假言的三段論法の知識を誇示するだけの爲めに、それを讀んだり哲學者に師事する者は、自分の側に坐つてゐる元老院議員から褒めて貰ひたがつてゐる者と其目的に何の差違もない。ローマには大なる致富の機會があつて、此處ニコポリスで富と云はれるものも彼處では兒戲に過ぎぬ。人が表象を支配するの困難なる理由は茲に在る。即ち茲では判断を妨碍する事象の力が強大なのである。私の知人で、エバフロデイトゥスに就いて、餘財僅に百五十

萬デナリウス（然之ヲ十金下ある）しかないと云つて零した者がある。エバフロデイトゥスの奴隸（エビクテートゥスは一時エバフロデイトゥスの奴隸にかへられてゐた）たる我々は、彼を嚙つたが、エバフロデイトゥスは嚙ふ所ではなく、喫驚して叫んだ、『貧乏でお氣の毒だ、それでは黙つてゐられまい、どうして辛抱ができた』と。

エビクテートゥスが假言的三段論法を讀んでゐる者と呼んで間違を咎めた、そしてエビクテートゥスの助手が、かう讀むのだと云つて、今讀んでゐる者を嚙つた。其の時エビクテートゥスは其の助手に向つて云ふには、『君は君自身を嚙つてゐるのだ、君は此の青年を訓練もせず、又彼にかう云ふ問題が了解できるかどうかも確めておかなかつた。恐らく君は彼を讀み手、雇つただけであらう』と。更にエビクテートゥスは云ふ、そこでもし、複雑三段論法を理解するだけの力を有たない人があつたら、我々は其の人の爲す毀譽褒貶に信賴するか、彼に善惡の判断ができると認めるか。してこんな人が他人を非難しても、非難された方でそれを氣にするか。褒められたとて得意になるか。自の褒める方が假言的三段論法と云ふやうな小事に於て假定の結論の何たるかを解し得ないのに。

自己の支配的性能の如何を覺知する事、これが哲學の始めである。其の弱小なる事を知つてゐる者は、最大難事にこれを適用しはしないからである。然し、今日人々は一片をすら嚙下す

る事ができない辯に萬卷の書を購入してそれを貪食しようとする。だから彼等は嘔吐したり消化不良を起すのだ。そしてそれから腹痛や下痢や熱病を起すのだ。かう云ふ人は自分の能力を考へなくてはならぬ。理論に於て無智者を説服するのは、やさしい。然し實生活上の事柄に於ては、進んで確信を求める者は一人もなく、寧ろ自分に確信を與へてくれた人を憎む。然しソークラテースは生活を吟味せずに生活してはならぬと我々に忠告した。

二七 表象の現れ方は幾何。之に對する防衛策

外物が我々の心、映する（表象）には四通りの途がある。AがAとして現れる場合、非Aが非Aとして現れる場合、Aが非Aとして現れる場合、非AがAとして現れる場合。此等すべての場合に就いて、正しい判断を下すのが教育ある者の任務である。然し我々を悩ますものが何であらうと、我々はそれに對して救済策を講じなくてはならぬ、ピロオンやアカデミー學徒の詭辯が我々を悩ますならば、それに對して我々は防衛策を講じなくてはならぬ。事物が善でないのに其の表象が我々をして善なりと信ぜしめる場合には、我々はこれに對する救済策を要するのである。もし我々を悩ますものが習慣であるならば、我々は習慣に對する救済策を求めなくてはならぬ。然らば習慣に對する救済策とは何か。反對の習慣である。愚人はかう云ふ、『彼は

不幸にして死んだ、彼の父母は哀愁に耐へかねてゐる、彼は血氣盛りで死んだのだ、然も異郷で。』これと反對の語法を聴け、』さう云ふ用語をやめて、一の習慣に對せしむるに反對の習慣を以てせよ、詭辯に對せしむるに理論を以てせよ、理論の鍛練と訓練とを以てせよ。欺き易き表象に對しては須く明瞭なる、純潔なる、手近かなる本有概念を以てせよ』と。死が我々に惡として映ずるならば、直に、『惡を避くるは可なれども、死は必至のものなり』と云ふ法則を想へ。何となれば、私はどうしたらいいのか、何處へ行つてそれを逃れるか。私が、ゼウス神の息サルペトーンとして、『我れ行いて勇奮せん、然らずんば他の者に勇奮する機會を與へん。我れ自ら成就せずとも、他人が崇高なる行爲を爲す事を妬まざるべし』と云ふだけかい言葉が出ないものとせよ。かう云ふ立派な行ひは我々に不可能だとしても、少くともかう云ふ推論だけはできるでないか。

『死を逃れる場所を教へてくれ、おれの爲めに其の土地を見出してくれ、おれが訪ぬべき不死の人を教へてくれ。不死の呪ひを見付けてくれ。おれにそれが無い以上、おまへはおれに何を欲求するのか。おれは死を免れる事ができないのだ。おれは死の恐怖心から脱しきれずに、悲嘆し戦慄しつゝ、死ぬのか。何となれば、迷亂の原因は得べからざるものを求めるにあるからである。それ故おれが自分の望み通りに外物を變へる事ができれば、おれはそれを變へる。然し

もしできなければおれを妨げる者の眼を直ぐひんむいてやる。何故なら人は天性善なるものを奪はるゝに堪へず、惡なるものに陥るに堪へないからである。していよいよおれが境遇を變へる事もできず、又おれを妨碍する者の眼をひんむくこともできなければ、おれは坐つて呻吟する、そしてできる限り、ゼウス神でも、其の他の諸神でも罵つてやる。何故と云ふに彼等がおれの事を配慮しない以上、彼等はおれにとつて何であるか。』

さうだ、然し、君は神に背く事になるであらう。

『おれはどうして現在よりも悪くならうか。要するに、敬虔と利益とが一致しない限り、何人にも敬虔が保たれるものでないと云ふ事を忘れるな。これが必然の事ではないか。』

ピロンの學然やアカデミーの學徒は須く來て抗辯するが、私一個としてはそんな事を議論してゐる暇がない、又通有の意見（意見）を辯護する力もない。私は地所の事で訴訟事件が起つてさへ、私の利益の爲めに他人を頼んで辯護人になつて貰ふ。（我れと他人との間に通有の意見があるから、他人を頼んでもいい、と云ふ意味）そこで、私はどんな證據で満足するか。有り合せのもので満足するのだ。知覺は如何にして起るか、全身でか、特殊の部分でか、自分には恐らく説明できないであらう。（そんな面倒な議論は自分には判らない）、双方の説が私にとつて難問だからである。然し私は君と私とが同一人でないと云ふ事を完全に確知してゐる。どうして

判ると云ふか。私が物を口に入れる時、それを私の口へ持つて行くが君の口へは持つて行かないからである。私が麵麩を食へたいと思ふ時に、箸を握るやうな事は決してなく、必ず麵麩を目がけて行く。して感覺の確實性を一切否認する所のピロオン學徒たる君等は、私のやうな事はしないか。君等の内に浴場へ行かうと思つて粉屋へ飛び込む者があるか。

そしてどうだ。我々は全力を盡してこれを固守し、人類通有の意見を支持し、之を攻撃するものに對して武装すべきでないか。

(一) 懷疑派は普遍的承認と云ふものはないから通有の意見と云ふものも存在しないと論じたのであつた。

誰がさうでないかと云ふか。然し其の能力を有する者、餘暇を有する者が然かすべきである。然し戦慄し、迷亂し、内心阻喪した者は、寧ろ他の何物かに時を費すべきである。

二八 他人に對して憤るべからず。人の小事と大事

人が事物を承引する原因は何か。それが眞らしく思はれると云ふ事實に存する。然らば眞らしく思はれない事物を承引するのは、不可能である。何故か。眞理を愛好し、虚妄を不満とし、不確なる事柄に就いて承引を差控へるのは悟性の本質だからである。其の證據は何處に在る。

もしできるなら、今は夜なりと信ぜよ。それはできない。今は晝なりと云ふ君の考へを取り去れ。できない。星の数は複數だと信ぜよ、或は複數でないと信ぜよ。できない。然らば人が虚妄を承引する時には、彼が虚妄としてそれを故意に承引してゐるのではないと思へ。何となれば、プラトーンの云ふやうに、どんな靈も、故意に眞理を逸するものでないからである。寧ろ虚妄が彼には眞理と思はれるのである。そこで我々は命題の眞妄に相當するものを行動上に有するであらうか。

義務と義務にあらざるものと、利と不利と、可と不可と、かう云ふ種類のものである。

然らば人は自己に有利だと信じたものを選ばない譯には行かない。さうだ。然しメデアは何と云つたか。

『まことに、我れは、我が爲さんとする事の如何に悪しきかを知れり、然し尙激情は理性を克服す』と。

彼女は其の激情を恣ま、にして、自ら其の夫に復讐する事が、其の子供を保育する事よりも有利だと考へたからである。

さうだ、然し彼女は誤つてゐる。彼女に對して其の誤れる事をはつきり教へてやれ、然らば彼女は堪へ忍ぶであらう。然し君がそれを指摘しない限り、彼女は自分が思つた通り行ふ外は

あるまい。『さうだ。』

然らば君は此の女が不幸にして最大事を誤解して人間にならずに虻になつたと云うて何故其の女を怒るか。できるものなら寧ろ何故盲人や跛者を憐むやうに、至高性能の盲者跛者を憐まないのか。

そこで、人の行爲の規準は表象(意見)だと云ふ事、そして其の表象は或は正或は不正に現れる事、そしてもし正ならば彼に非難すべき所なく、もし不正ならば彼自身罰を受ける——何となれば誤れる者と其の誤れるが爲めに罰を受ける者とは別人であり得ないから——と云ふ事、苟も此の事を明かに記憶する者は決して他人を怒らない、他人に對して腹を立てない、他人を罵つたり咎めたりしない、他人を憎んだり他人と争つたりしない。

それ故此等の重大且恐るべき一切の所業の原因は、此處即ち表象(意見)に在るのだ。さうだそれが原因だ、そして他に何も無いのだ。イリアッドは、此の表象と表象の使用とから成り立つてゐるのである。パリスには、メネラウスの妻を伴れ去ると云ふ表象が現れたのだ、ヘレナには彼に従ふと云ふ表象が現れたのだ。然らばかう云ふ妻を棄てる事を利益だと感ずる表象がメネラウスに現れたなら、どうなつたであらうか。イリアッドのみならず、オデッセーもできなかったであらう。『それほどの重大事件がこんな詰らぬ事に關係あるのか。』然しそれほどの重大事

件と云ふのは何を指すのか。『戦争と内亂、そして多數人命の殺戮及都市の荒廢である。』それが何で重大事件か。『何でも無いのか。』然し多數の牡牛や、羊が死んで、燕や鳩の巢が澤山燒盡されたとして何が重大事件か。

『然らば前者は後者と同一であるか。』

全く同じである。一方では人間の身體が亡ぼされ、一方では牡牛や羊の身體が亡ぼされるのだ。一方では人間の住家が燒かれ、一方では鳩の巢が燒かれるのだ。其處に何の重大なる或は恐ろしい事があるか。人間の家屋と鳩の巢と、それら住家である限り、何の差異があるか。

唯だ人は桁と瓦と煉瓦とで自分の小さい家を建て、鳩は棒と泥で造ると云ふだけである。

『然らば人間と鳩と同種類であるか、君は何と云ふのか。』
肉體だけは極めて似てゐる。

『然らば人と鳩との間に全く區別はないか。』

私の言葉をさう解してくれるな、然し以上の諸點にはないのである。

『では何處に區別があるか。』

調べて見るがい、然らば他の點に於て區別の存する事を知るであらう。それは、人間には自分の行動に關する理解力があり、社交的傾向があり、信實心があり、謙讓心があり、着實性

があり、睿智があると云ふ事に存するのではないのか。

『それでは人の大善大悪は何處に在るのか。』此の差別の存する點に存するのである。もし此の差別が保護され、防護されてゐるならば、そして謙讓や信實心や、睿智が破壊されずゐるならば、人間も亦保存される、然し都市同様に破壊され、襲撃されるならば、人間も亦亡びるのである。そして重大事件とは茲に存するのである。君は云ふ、『希臘人がトロイに侵入して荒掠し、そしてパリスの兄弟が死んだのでパリスは大打撃を受けた』と。決してさうではない、何となれば、人間は自身のものにあらざる行動の爲に打撃を受けるのではなく、當時の事件と云ふは單に鵠の巢の破壊に過ぎなかつたからである。さてパリスの没落とは、彼が謙讓、信實、慇懃、眞摯の品性を失つた時に在るのだ。アキレースは、いつ没落したか。バトロクロス（アキレースの親友）の死んだ時か。さうではない、それは彼が立腹を始め、一少女の爲めに泣き、自分のトロイにゐるのは、婦女を得る爲めではなく、戦ふ爲めだと云ふ事を忘れた時である。これは、人間の没落であり、攻圍された状態である、都市の破壊である、茲に正しい意見は破壊され、敗朽するのである。

『然らば婦女が掠奪され、子供等が捕虜になり、男子が殺戮されても害悪ではないか。』君が事實に對してそんな意見を附け足すのはどう云ふ譯か。今度は私に説明してくれ。

『おれは説明しない、然しどうして其等は害悪でないのか。』

我々をして尺度に據らしめよ。本有概念を呈示せよ、我々が人の爲す事を見て尙驚きの足りないのは此の點を閑却してゐるからだ。我々が重量を計らうとすると時に、臆測で判断するのでない。直線か曲線かを見分けるには臆測で判断するのでない。苟も事の眞偽を知る事が我々の利害に關する限り、何人も臆測で行かうとはしない。然るに正不正、幸不幸、運不運の第一且唯一原因に關係ある事柄だけに就いて、我々は輕忽であり、臆測的であるのだ。茲には秤や尺度らしいものはなく、何等かの表象が映すれば我々は直ぐ様それに従つて行動する。然らばアガムノーンやアキレースは、表象のまに／＼あれほど多くの害悪を爲し、害悪に悩んだが、自分等は彼等よりも勝れてゐると思ふべきであるか、自分は表象だけで満足する者ではないか。してこれ以外に悲劇の原因はあるか。エウリピデースのアトレウスはどうだ、表象である。ソフオクレースのオイディポスはどうか、表象である。フォイニクスは？ 表象である。ヒポリトスは？ 表象である。然らば此の點を顧みない者はどんな人間だと君は思ふか。各表象に従ふ者の名を何と謂ふか。彼等は狂人と呼ばれる。そして我々の行動はそれと違ふか。

二九 不動心

善悪の本質は意志の性質に歸着する。

然らば外物とは何か。

それは意志の取扱ふ材料である。意志は此等の材料を取扱ひつゝ、自から善となり、悪となる。然らば意志はどうして善となるか。

それには意志が其の材料(即ち外物)其の物を過賞してはならぬ。何となれば材料に對する我の意見が正しければ、意志は善となる、然し意見が邪であれば意志は悪となるからである。神は此の掟を定めてかう云ふのである、『汝もし善なるものを得んとせば、これを汝自身に求めよ』と。然るに君は、『否、おれは他の物に求めよう』と云ふ。それをやめて、君自身にそれを求めよ。故に今、暴君が私を威嚇し、使者を遣して私を喚ぶならば、私は云ふ、あなたは誰れを威嚇されるのかと。もし暴君が私を縛るぞと云ふならば、私は云ふ、あなたは私の手や足を威嚇されるのであると答へる。もし暴君が私を獄へ入れるぞと云ふならば、私は云ふ、あなたは此貧弱な全身體を威嚇されるのであると。もし暴君が私を追放するぞと言ふならば、亦答は同一である。『然らば暴君は到底おまへを威嚇することが出来ないか。』さうだ、私がこんな事を少しも顧みるに足らないと信ずる限りは。但し少しでも之を畏れるならば、彼によつて威嚇されるもの

は私である。然らば結局私は誰れを畏れるのか。何の支配者をか。私自身の権内の事物の支配者をか。私自身の権内に在る事物を誰れが支配し得ようぞ、然らば私は私自身の権外の事物の支配者を畏れるか。そんなものは私にとつて何であるか。

『然らば哲學者たる者は、國王を蔑視せよと説くのか。』我々の中で國王に向つて國王の所有物に對する權能を要求する者があるか。私の貧弱な身體を持つて行け、私の財産を持つて行け、私の名聲を持つて行け、私の周圍の者を奪つて行け、もし私が誰れかに勸めて此等のものを要求せよと云ふならば、私は甘んじて世の非難を受ける。『よろしい。然しおれはおまへの意見を支配しようと思ふ』と。して、誰が君にそんな權力を與へたか。どうして君は他人の意見を征服し得るか。答へて云ふ、『脅迫によつてそれを征服しよう』と。然し意見を征服するものは意見の外にないことを君は知らないか。意志を征服するものは意志其の物だと云ふことを君は知らないか。『強者をして常に弱者に優らしめよ』と云ふ神の律法の極めて有力であり、極めて正當なのは、亦此の理に因るのである。十は一よりも強い。『どの點に於てか。』人を繫縛し、人を殺戮し、人を任意の場所へ拉し行き、人の所有物を奪ひ取る點で強いのである。故に十の一よりも強いのは斯く其の強い所以の點で強いのである。『然らば十はどの點で弱いのか。』

もし一の意見が正しく、十の意見が間違つてをればである。さて十は此の點で克つてあらうか。どうしてそんな事があらう。我々が計量器にかゝるとき、重い者のつた皿は下がるではないか。

『然らばソークラテースが雅典人からあんな待遇を受けたのは不思議でないか。』

あさましき者よ、何故ソークラテースがと云ふか、事實のありの儘を述べよ。『ソークラテースの貧弱な身體はそれよりも強い者によつて運び去られ、投獄せられ、そして或人がソークラテースの貧弱な身體に毒を與へたら身體は息を引きとつた、なんと不思議でないか』と。かう云ふべきである。これが不思議か。こんな事を不正と思ふか。こんな事で君は神を咎めるか。然らばソークラテースは此等に代はるものを有たなんだか。彼は善の本質を何と見たか。我々は君の言を聴かうか彼の言を聴かうか。してソークラテースは何と云ふか、『アニトスとメリトス(共に彼の刑執行長)とは、我れを殺す事を得ん、されど彼等は我れを害ふこと能はず』と、更に彼はかう云つた、『もしそが神の意志ならば然かあらしめよ』と。

然し劣弱な主義を有ちながら、優勝な主義を有する者に打克つ人があつたら知らせてくれ。それはできまい、否、それに近い事さへできまい。何となれば、自然及び神の律法は、優者をして常に劣者に克たしめよと云ふからである。

『何に於て克つのか。』

其の勝れた點に於て克つのだ、或る身體は他の身體よりも強い、多は一よりも強い。盜賊は盜賊ならざる者よりも強い、それ故私もランプを盗まれたのだ。盜賊は私よりも油斷のないと云ふ點で私よりも優者だつたからである。然し彼れはランプを盗んだ代價として、自分は盜賊となり、不信の徒となり、野獸に近づいたのである。彼は其の代價を廉いと思つた、願はくは廉なれ。

然し或者は私の外套を捕へて、私を市場へ拉れて行かうとする。或者は怒號して云ふ、『哲學者よ、おまへの學説は何の役に立つか。おまへは收監されるのだ、おまへは首を斬られるのだ』と。『我れよりも強き者、我が外套を捕ふとも我れは拉し行かれざるべし、十人の者、我れを捕へて、獄へ投ずとも、我れは人獄せざるべし』と、私はいつこんな哲學説を立てたか。然らば私は外に少しも修得した事がないのか。何事が起るとも、それが自分の意志と無關係な限り、それは自分にとつて無に等しいと云ふ事を修得したのである。然もそれが無價值であるか。然らば價値の存する點を知りつ、何故他所にそれを求めようか。

次ぎに私は獄中に坐しながら云ふ、『自分に對してあんなに怒號した者は言葉の意味を解しない、又哲學者の言行を少しも知らうとしない。あんな者には構ふまい』と。

然し私は再び獄を出よと云はれる、『もし在監の必要がないなら、私は出て行かう。もし復た必要が生じたら、私は歸つて来よう』と。『いつまでそんな事をしてゐるのか。』理性が自分に此の身體と共に在れよと命ずる間だ。もし其の命令がやんだら、此の身體を取つてくれ。そして、さらばである。但しこれを實行するに當つて我々は無謀であつてはならぬ。女々しくあつてはならぬ、其の理由は薄弱であつてはならぬ。何となれば、一方に於て神はそれを好まず、此のやうな世界と、此のやうな世界の住民とを必要とするからである。然し丁度ソークラテースの場合のやうに一旦神が退却の合圖を與へたら我々は主將の命令と思つて其の合圖に従はねばならぬ。

『さて然らば、我々は此の事を衆人に話すべきであるか。』

何故か。自分で承知してゐるだけで十分ではないか。子供らが手を叩いて来て、『今日はめでたいサトルナリア祭だ』と叫ぶのを見て、我々は、『サトルナリア祭なんかめでたくない』と云ふか。否。我々も亦一緒に手を叩く。然らば君が人を説服して改心させる事ができない時には、彼を子供だと思へ。そして彼と一緒に手を叩け。もしそれが嫌やなら黙つてをれ。

此の事を忘れるな。して我々がこんな艱難に出會つたら、我々の教養の有無を示すべき時が來たと思へ。何となれば、艱難に當つた者は、丁度三段論法の解答を修得して哲學の講筵から

出て來た青年と同じだからである。もし人からやさしい三段論法を課せられ、ば、彼は云ふ、『おれの修練の爲に寧ろ複雑、精緻な三段論法を課せよ』と。競技者さへ弱い對手を好まない、『彼はおれを打ける力がない』と云ふ。これは心のけだかい青年である、然るに君等は大概さうでない。試練の時が來ると、其の一人は必ず泣いて云ふ、『もつと修練しておけばよかつたのに』と。何をもつとか。其の修業の目的が實行に現はす爲めでないならば、何故そんなものを學んだのか。然し思ふに此の席に在る君等の中にも産みの苦みに在る婦人のやうな苦みを感じてゐる者は、『彼を襲つたやうな艱難がおれにも來ないとは残念だ、オリンピックヤへ行けば勝利の榮冠が得られるのに、一隅に籠居して一生を終はるのか、おれの爲に出陣の報せが來るのはいつだ』と云ふ者があらう。君等はすべてかう云ふ精神を有つべきである。皇帝のか、への劍客の中にすら、闘技の舞臺に立たないのを深く悲しみ恨んで、神に祈り、役人に向つて出場を懇請する者がある。君等の中にかう云ふ者はあるか。私は其の爲に態々ローマへ出かけて、私の競技者が何をしてゐるか、彼は自分の課題を如何に研究しつゝ、あるかを知りたいからである、『おれはそんな課題が嫌ひだ』と。はて課題の取捨は君の權内の事であるか。

君には今現に有する通りの身體が與へられてある。其のやうな両親、其のやうな同胞、其のやうな國、君の國內に於ける其のやうな土地が與へられてある。そこで君は私の所へ來て云ふ

『別の題を課せよ』と。君は自分に與へられた課題を處理するだけの能力を有たぬか。須く云へ、『これを課するは汝の分、自己を修練するは我が分』と。然るに君はさうは云はずに、『そんな題をやめておれの好きなものを出せ。おれにそんな反對論を出すのはやめて、おれの好きな反對論を出せ』と云ふ。悲劇俳優が自分の重大任務を忘れて、悲劇俳優とは、唯だ假面、靴、長外套にすぎぬと考へる時代が來よう、心せよ、此等は即ち材料であり、課題である。君は悲劇俳優か、それとも唯だの道化か。それを區別する科白を云へ。何故なら、此の兩者は裝束では少しも違ふ所がないから。そこで悲劇俳優が靴や假面を棄て、舞臺へ幽靈の役になつて出たら、悲劇俳優たる資格を失ふか。それとも依然として悲劇俳優か。彼が音聲をさへ有するなら依然として悲劇俳優たる事を失はないのである。

別の例を舉げて見よう。『おれはおまへに一州の統治權を與へよう』と云ふ者があれば、私はそれを受ける、そして一旦それを受けたら、教養ある者が如何に振舞ふかを現實に示さう。『其の服章を棄て、襤褸を纏うて件の統治者で登場せよ』と。然も私は尙固有の美聲を出し得るではないか。(即ち私が當然爲すべき事を爲し得るではないか)『然らば、おまへは人生の舞臺に於て何の役に扮するか。』神に召されたる證人としてある。神は云ふ、『進み出でよ。我が爲めの證人となれ。汝は、我が證人として出すに相應はしきものなればなり。意志以外の外物に

て善なるものありや、惡なるものありや、我れ人を害ふ事ありや、我れ各人に屬する善を各人以外のものに定めたりや。汝、神の爲に如何なる證據を示さんとするか』と。

『あ、主よ、私は悲惨な境遇に在る、私は不幸である、何人も私を世話してくれない。何人も私に施してくれない。世人は悉く私を罵り、私を惡評する』と。君の示さんとする證據はこれか、そして君は、君に斯かる名譽を與へ、斯かる證人たるに相應はしいものと考へた神の召喚を辱めようと云ふのか。

『然し權力者が、『汝は背神、瀆神なり』との宣告をおれに與へた場合を想像せよ』と。それで君はどうなるのか。『おれは『背神、瀆神なり』と云ふ宣告を受けた』と。それだけか、『さうだ。』然しもし其の人が、『晝ならば明るし』と云ふ假言的三段論法を余は誤れる斷定なりと判斷すと云つたと想像せよ、それで其三段論法はどうなつたか。此の場合、誰が被判斷者で、誰が被宣告者か。假言的三段論法か、それともその誤解者か。さて君に宣告を下す權力者は敬虔瀆神の何たるかを承知か。彼はそれを研究したか。それを學習したか。何處で、誰にか。音楽家は最低絃を聴いて最高絃だと云ふ者があつても顧みない。幾何學者は、圓の中心より圓周に至る直線は等しからずと云ふ者があつても顧みない。然るに眞の教育を受けた者が無教育者の敬虔瀆神、正不正を論斷するのを見てそれを氣にかけるのか。『あ、自稱哲學者の曲事よ』と。君

はそれを茲で知つたか。

君はかう云ふ事柄に關する些細な論議を他の怠け者に一任し、彼等をして一隅に坐して薄謝を受けるか、或は何人も我れに施さずと咄くに任せておいてはどうだ。そして進み出て、自分が修得した事を利用してはどうだ。今日必要なのはそんな些末な論議ではなくて、そんな事はストア學徒の文書には澤山あるからである。然らば何が必要なのか。此等を適用する者、自己の行爲によつて自己の言説を證明する者が必要なのだ。どうか、かう云ふ者になつてくれ。是れは我々が爾後學校に於て徒らに祖先の例を擧示する事なく、我々自身を以て軌範と爲さんが爲めである。

然らば、かう云ふ哲學問題の觀照は、何人の任務であるか。それは暇を有する人の任務である。人は觀照を好む動物だからである。然し主家を逃走した奴隸のやうに此等の事を觀照するのは恥辱である。我々は劇場にゐる時のやうに、安靜な心持で坐し、或時は悲劇俳優に、或時は樂人に耳を傾け、決して奴隸のやうであつてはならぬ。奴隸は坐席すると間もなく、俳優を褒めるかと思ふと忽ちあたりを見廻す。其の時、もし誰か、彼の主人の名を口にすれば、忽ち仰天して困惑する。哲學者がこんな風に造化の技(宇宙人生)を觀照するのは恥辱である。何故なら奴隸の主人とは何か。人を支配する者は人でない。支配者とは死、生である。快苦である。も

しそんなものがなければ、假令、皇帝の面前へ立つても平氣であらう。然し彼れは、此等及び雷電を以て迫つて来る。そして自分が此等を恐れるならば、主人を見る事、脱走せる奴隸の主人を見るが如くならざるを得ない。然しかう云ふ恐れのない間は、脱走した奴隸の一時劇場にゐるやうに自分は沐浴し、飲酒し、歌ふ、然も恐怖と不安の裡に。然し自分の諸々の主人、即ち主人の我を威壓する所以の武器から自分が脱する時は、其處に何の心痛があらう、何の主人があらう。

『それでは我々は此等の事を萬人に公言すべきであるか。』

否、寧ろ我々は愚人と調子を合はすべきである。そしてかう云ふべきである、『此の人は自分に善いと思ふ事をおれに推奨するのである。彼れを宥してやらう』と。何となれば、ソークラテースも、彼の監守人であり、そして彼の毒を仰ぐ所を見て泣いた獄吏を宥してかう云つたからである。曰く、『彼れの我が爲めに健氣にも泣く事よ』と。然し彼れは獄吏に向つて、『斯く斯くの理由により、我等は婦人を此の席より退かしめたり』と云つたか。否、彼れは自分の言を理解し得る友人にさう云つただけである。そして彼は獄吏を子供扱ひにしたのである。

三〇 難局に處する途

我々が權勢者を訪ねる時には、第三者が亦天上から様子を見てゐる事、そして、彼よりも此の第三者の心に適ふやうにすべきだと云ふ事を忘れてはならぬ。天上の觀者は君に尋ねる。「學園に於て汝は常に追放や繫縛や死や汚辱を何と呼びたるか。」「我れは常に其等を非善非惡の無性と呼びなしたり。」「然らば今、汝は其等を何と呼ぶか、其等は以前と異なるや。」「否。」「然らば異なりたるものは寧ろ汝か。」「否。」「然らば云へ、如何なるものが無性なるかを。」「意志に關係なき事象なり。」「然らば其の結果は如何。」「意志に關係なき事象は、我れにとつて無價値なり。」「汝は善を何と考ふるか。」「それは正しき意志と表象の正用となり。」「然らば其の目的は如何。」「爾に従ふ事なり。」「汝は今尙然か云ふか。」「我れは今尙然か云ふなり。』

然らば臆する所なく權勢者を訪ねよ、そして此の事を忘れるな、然らば、當然爲すべき事を學んだ青年と然らざる人間との區別が君に判るであらう。私は實際、君がかう考へるであらうと思ふ、即ち、「無價値のものに對して何故我々はあれほど大袈裟な準備をするのか、こんなものが世人の所謂權勢か、これが控への間か。これが侍従か。これが近衛兵か。こんな事の爲に自分はあんなに澤山講義を聞いたのか。此等は無價値である。自分は寧ろ或重大事の爲めに準備してゐたのだ」と。

第一卷

一 大膽にして細心

恐らく人によつては哲學者の意見を逆説だと思ふであらう、然し尙萬事を爲すに當つて細心であり同時に大膽であり得るものかどうかをできるだけ吟味して見よう。何故なら細心は謂はば大膽の反對と思はれるもので、反對は決して相容れないからである。此の事に關し、衆人が思つてゐる逆説と云ふのは、かう云ふ種類のものだと私は考へるのである。即ち、若し我々が同一事に對して須く細心且大膽なるべしと主張するならば、我々は結合し得ざるものを結合すると云うて非難されても仕方がない。然し我々の主張する意味に於ては何處に困難があらう。何となれば屢々云はれ、且證明された事であるが、善の本性とは表象の使用如何に存し、惡の本性も亦然りとすれば、而して我々の意志と無關係な事柄は善にも惡にもあらずとすれば、意志の關せざる事象に就いては大膽に、然らざる事象に就いては細心なれと云ふ哲學者の主張に何の逆説があらう。何故なら惡とは意志の惡しき修練に存するとすれば、意志の關する事象に對して細心でありさへすればよいのだからである。然し我々の意志に關係なく従つて我々の權

内に在らざる事象は我々にとつて無に等しいとすれば、此等の事象に對して我々は大胆でなくてはならぬ。斯くして我々は細心なると同時に大胆であり、又實に細心なるが故に大胆になるであらう。何となれば、眞に悪なる事柄に就いて細心であれば、其結果として我々は然らざる事柄に對して大胆になるからである。

そこで我々は鹿と同一の状態に在る。鹿が驚いて獵師の羽根から逃ける時、(獵師は羽根や様様の色の物を糸につけて鹿を嚇しつゝ、網の方へ追ふ)、どちらを向いて何處へ逃げ隠れようとするか。彼等は網の方へ向き、斯くして恐るべきものと恐るべからざるものとを混同する事によつて身を亡ぼしてしまふのだ。我々の行状も亦然りである。どう云ふ場合に我々は恐れるか、意志に無關係な事柄に就いてある。反之、どう云ふ場合に我々は、さながら何の危険もないかのやうに大胆に振舞ふか。意志に關係ある事柄に對してある。そこで、我々は、意志の關係外の事物を甘く射當てさへすれば、誤解しても、輕卒に、或は破廉恥に或は何物かを求めんとする下賤な欲望の下に行動しても、我々は何とも思はないのである。然るに死とか追放とか苦痛とか汚名とかの惧れがあると、我々は慄然として逃げ出さうとする。それ故大事を誤る者にはありさうなことだが、本然の大胆は變じて、厚顔となり、自暴自棄、輕忽、破廉恥となる、そして本然の細心と謙讓とは變じて恐怖や混亂に満ちた臆病と醜陋とに變ずる。何となれば人がも

し意志及意志の作用を修練する所の事物に就いて細心であるならば、彼は細心ならんと意志する事によつて又直に其の避けんと欲する事物を避ける事ができるからである。然し彼がもし、其の權能及意志の内に存せざる事物に細心であり、他人の權内に屬する事物即ち我々の避けんと欲して避け得ざる事物を避けんとするならば、彼は、戦々兢兢として迷亂せざるを得ない。何となれば恐るべきものは死や苦痛ではなくて、寧ろ死や苦痛に對する恐怖心だからである。それ故我々は、「死は惡にあらず、恥づべき死こそ惡なれ」と歌つた詩人(エウリピデース)に與みするのである。

然らば死に對しては大胆に、死を恐れる心に對しては細心なるべきである。然るに我々は現在これと反對に、死に對しては之を逃れようとするのである。そして死に關する我々の意見に就ては放心、輕卒、無關心である。ソークラテースは、常に此等を適切にも鬼面と名付けてゐる。何故と云ふに、子供等は何も知らないからこれを恐るが、我々も亦、日常の事件に對してかう云ふ心情を懷く。然も其の理由は子供等の鬼面に於けると同一である。何故なら、子供とは何か、無智である。子供とは何か、知識の缺乏である。もし子供が眞相を知つてをれば、決して大人に劣るものでないからである。死とは何か。鬼面である。裏を返して吟味せよ。見よ、それは噛みつくものでない、貧弱な身體は是れまで通り早晚精神から分離すべきものであ

る。然らば今それが分離したとて何故當惑するのか。何となれば、今分離しなければ、後に至つて分離するからである。何故か。宇宙の周期を完からしめんが爲めである、蓋し宇宙の周期は現在と未來と過去とを必要とするからである。苦痛とは何か。鬼面である。裏を返して吟味せよ。憐むべき身體は正面を見て不快を感じ、裏面を見るや一變して喜悅を感じる。それが嫌やなら、『戸は開けり』である。嫌やでなければ忍べ。何故なら戸はいつでも開いてゐる筈だからである。斯くして我々は何の煩ひもなくなるのである。

此等の原理はどう云ふ結果を齎すか。それは最もけだかく、そして眞の教育ある者にとつて最も相應はしい所の平靜、無畏、自由の境地であるべきだ。此等の事柄に關し我々は、自由人におのみ教育を施すべしと云ふ多數者の説を信じてはならぬ、寧ろ教育ある者のおのみ自由なりと云ふ哲學者の言に聽くべきだからである。『どうしてか。』それはかうだ。自由とは我々の欲する通りに生活する事ではないか。『さうだ。』然らば人間たる君等は誤謬の裡に生活する事を欲するか。『欲しない。』然らば誤謬の裡に生活する者は自由ではない。君等は恐怖の裡に生活する事を欲するか。悲哀の裡に生活する事を欲するか。迷亂の裡に生活する事を欲するか。『そんな事は決してない。』然らば恐怖や悲哀や迷亂の境地に在る者は自由でない。然しこんな境地を脱出すれば同時に誰でも、奴隷の境地から脱出するのである。然らば立法家が、『吾人は自由人にの

み教育を受くる事を許す』と云うても、どうして我々はいつまでもそれを信じてゐられよう。何故と云ふに、哲學者は、『吾人は教育を受けたる者にあらざれば自由とは認めず』と云ふからである。換言すれば神がそれを認めないのである。然らば人が町奉行の面前で自分 奴隷を轉向させ(奴隷釋放の式)ても、それは何でもないのである。否、彼は何かをした事になる。何か。彼は奉行の面前で自己の奴隷を轉向させたのだ。それだけか。否、ある。彼は又奴隷の爲めに税を拂はねばならぬ。さて此の儀式を濟ませた者は、自由になつたのではないか。否、迷亂から脱したとは云へないと同じく自由になつたとも云へないのだ。さて君は他人を釋放するが、君自身の上に君臨する所の支配者を有つてゐないか。金錢が、少女が、少年が、暴君が、暴君の寵臣が君の支配者でないか。さもなければ、君が此の種の試み(危険)へ出掛ける時に何故慄へるか。大膽なるべき事柄と細心なるべき事柄とを判定する原理を學び、常にそれを手許におけ、自己の意志の關せざる事柄に於て大膽なれ、意志の關する事柄に於て細心なれと私が屢々教へたのは此の爲めである。

『私はあなたに自分のした事をお聞かせしました、そしてあなたはそれを承知してをられる筈です。』

『何にでか。』

「私の小論文です。」^(三)

君が自分の欲望や嫌悪をどう取扱ふか、それを示してくれ。そして、君は自分の欲する所のものを逸し、避けんと欲する物に却つて逢着してゐないかどうかを示してくれ。然しそんな長い苦心慘愴の論文、もし君が賢明ならば、それを取つて抹殺するであらう。

「してソークラテースは物を書きませんでしたか。」^(三)

彼ほど書いた者はない、(ソークラテースに著述があると云ふ話は聞かないが、此處で書く、と云ふのは語る、と云ふくらゐの意味に解してよいと思ふ) 然しどう書いたか。彼は自分の主義を論難する人間や、自分の方から論難すべき人間が始終自分の側にはゐなかつたので、自分自身と議論し、自分自身を検討し、そして少くとも常に或一つの問題を實際的に取扱つてゐたのである。これこそ哲學者たる者の書くべき事柄である。然し今云つた小論文とか、方法上の事などは他人に任せ、愚人に任せ、或は既に迷亂を脱して、現在餘暇を有する所の幸福な人に任せ、或は結果を考慮するには餘りに愚な人に任せたのである。

(一)(二)(三)、エヒクテートスの弟子で自分の著述を誇る者の云つた言葉。

そして今機會があれば、君は、行つて君の所持するものを誇示して朗讀し、且徒らにそれを見せびらかして、見よ、余が如何に對話を作るかを、と云ふか。そんな事を云はずに寧ろかう云へ、

「見よ、余が、失望に陥らざる事を、見よ、余が余の回避せんとする所のものに陥らざる事を。余の面前に死を持ち來れ、然らば汝は知るであらう。余の面前に苦痛、牢獄、汚名及び宣告を持ち來れ」と。これこそ學校を出た青年が、當然誇示すべき事である。然し外の事は他人に任せろがい、。そして其等に就て誰れにも語るな。そしてそんな事で人から褒められてもそれを肯うな。自分は凡愚だと思へ。唯だ自分は欲求する所のものを逸する事なく、回避せんと欲する所のものに陥らせざる方法を知つてゐる者だと云ふ事を示せ。訴訟事件や、問題や、三段論法は他人の研究に一任せよ、君は須く死、桎梏、拷問、追放に就いて専心考慮せよ、そして其の際必ず、此等の苦難を自分に與へ、且、意志の權外に存する暴力と相對峙せる場合、理性の支配力の眞價を發揮し得る所の位置に相應はしい者と君を評定した所の者に大膽に信頼せよ。茲に於て人は須く細心なると同時に大膽なれと云ふ此の逆説は、もはや不可能でも逆説でもなくなるであらう。意志を以て如何ともすべからざる事象に對しては大膽であれ、意志を以て左右し得る事象に對しては細心であれ。

二 平 靜

君は今法廷に入るのだが自分の主張しようと思ふ事と自分が成就しようと思ふ事とをよく考

へなくてはならぬ。何となれば、もし君が意志を自然に合致させて行かうと思ふならば、君は至極安全であり、あらゆる便宜を有し、何の面倒もないからである。君が自己の権内にある所の本来無碍なるものを失はざらんとする限り、そして此等を以て満足する限りは他に求める所がないからである。何故なら、誰が此等の事を支配するか。誰がそれを奪取し得るか。もし君が謙讓、忠實でありたいと思ふ限り、誰がそれを阻止するか。もし君が強制拘束を受けまいとするならば、誰が君を強制して君が欲望すべからずと考へる物を欲望せしめようか。誰が君を強制して、君が回避すべきものにあらずと考へるものを回避させるか。然し君は何と云ふか。判官は君には恐ろしく思はれ、宣告を下すであらう。然し君をしてそれを脱せんと悶へさせる事がどうしてできよう。然らば對象の追求も回避も自分の権内の事だとすれば、外に何を求めるか。これを以て自己の序文とせよ、自己の叙説とせよ、自己の確證とせよ、勝利とせよ、結論とせよ、自己の受ける讃辭とせよ。

故にソークラテースは、其の審問に對する用意をせよと注意してくれた者に向つてかう云つた、曰く、「然らば君は余が一生を通じて其の用意を爲しつゝ、ありきと思はざるや、如何なる用意を以てか。余は余の権内の事を保持しをれり、然らば如何。余は余の私的生活に於ても公的生活に於ても、未だ會て不正を行ひし事あらざるなり」と。然し君が外物、即ち自分の貧弱な身

體や些少の財産や、瑣々たる名聞をも保持したいと思ふならば、私は忠告する、君は今直ぐ一切の準備を爲し、次に君の判官や敵の性質を考慮せよと。もし其の膝下に伏する必要があるならば、其膝下に伏せよ。もし泣く必要があるならば、泣け。呻吟の必要があるならば呻吟せよ。何となれば、君が一旦自分の権内の事物を外物に屈伏させた以上は、直に奴隸となり、反抗をやめよ、そして、或時は奴隸たらんとし、或時は奴隸たらざらんとするやうな事をやめて、寧ろ全力を盡して、彼か此か、自由か奴隸か、有識者か無識者か、良種の雄鶏か劣等な雄鶏か死ぬまで打撲を忍ぶか直に屈伏するか、何れかに決すべきだからである。幾度も打たれた後で遂に屈伏するやうな事はやめるがい。然し此等が賤しい事であるならば、即時、其の區別を明かにせよ、善惡の本性は何處に在るか、真理の存する所に在る。真理及び自然の存する所、其處に細心がある。真理及び自然の存する所、其處に亦大膽がある。

何故と云ふに、君はどう考へるか、もしソークラテースが外物を保持したいと思ひながら尙進みでて、「アニトスとメリトスは余を殺す事を得ん、されど彼等は余を害ふこと能はず」と云つたであらうか。君はさう思ふか。彼はそれが自分の生命や好運を保持する途でなく、却つて別の結果に終る事を知らないほどに愚かであつたか。然らば彼が、己れの敵を眼中におかず却つて彼等を激させさへしたのは何故か。それは私の友人ヘラクリトスと同じである、即ち、へ

ラクリトスはロードスに在る少しばかりの土地に關して一寸した訴訟事件に拘はつてゐるが、判官に對して自己の正常なる事を證明し、そして其辯論の結論に於て、『私はあなたに嘆願しない、又あなたがどう云ふ判決を下されても氣にかけない、そしてあなたの審問を受けてゐる者は私ではなくて寧ろあなたです』と云つた。そして彼は訴訟に敗けたのである。かう云ふ必要はなかつたのだ。嘆願はするな、然し、『私は嘆願しない』とも云ふな、丁度ソークラテースの場合のやうに、故意に裁判官を怒らせる適當の時機が来るまでは。然し君も亦、『私は嘆願しない』と云ひたいのなら、君は何も待つてゐる必要はない。審問を受けよとの命令にさへ服従する必要がない。何となれば、自分が磔刑になりたいのなら辛抱してをれ、然らば磔刑臺が来るであらうから。然し審問を受けて、できる限り自分の辯明をしたいのなら、其の目的に副ふやうにしないでならぬ、但し其の辯明に際しても、自己の品性を保持する事を心がけよ。

従つて、又、『おれの爲すべき事を教へてくれ』と云ふのは滑稽である。私は何を君に教へるのか。『さて、どんな事件に出逢つても、それに対応し得るやうにおれの心を鍛練してくれ。』はてそれは一文不知の人間が、『何でも名前が出た時に何と書くべきかを教へてくれ』と云ふのと少しも違はない。何故なら、私が Dion と書けと云ひつけても、他の人が來て、Dion ではなく Theon だと云ひ出したら、彼はどうするか。どう書くか。然しもし、君が書を實習してをれば、

君は要求された事を何でも書く用意もできてゐるのである。もし其の用意がなければ、私は君に何と教へよう。何となれば、場合によつて別の事が必要になつた時に、君は何と云ひ、何と書くか。そこで此の普遍的訓言を記憶せよ、然らば、何の教示も要らないであらう。然し萬一君が外物に垂涎するならば、必然の勢として、君自身の支配者の意志の儘に彼方此方と踰越せざるを得ない。して支配者とは誰か。それは君が得んと欲し或は避けんと欲する所の事物を支配し得る者に他ならない。

三 哲學者へ人を推薦する者に告ぐ

ディオゲネースは自分に推薦狀を買ひに來た者に對して立派な答へをしてゐる。『君が一個の人間だと云ふ事は推薦狀を受ける人が君に會へば直ぐ判る。そしてもし彼が經驗によつて善人と悪人との區別に熟達してをれば、君の善なるか悪なるかが判るであらう。然しもし經驗がなければ、私が彼に幾千度書狀を書いても決して判るまい』と。君は丁度銀貨の眞贋を人に試験して買ひたいと頼むやうなものである。もし其の人が銀貨の試験に熟練してをれば、彼は君の價值を知るであらう、何故なら、君（銀貨）が君自身を推薦するであらうから。然らば我々は人生に於ても、銀貨の鑑定家が、『銀貨を持つて來い、それを試験してやる』と云ひ得るやうに何等かの技

能を有すべきである。然し三段論法の場合では、私は、『誰でも君の好きな人を伴れて来い、さすれば私は三段論法を解き得る人と然らざる人とを君に代つて鑑別してやる』と云ひたい。何故か。私が三段論法を解き得るからである。私の有つてゐる力は、苟も三段論法を解き得る人を見抜く事のできる人なら必ず具備せねばならぬ力である。然し人生に於て、私はどう云ふ行動をとるべきであるか。或時には私は一事を善と呼び、或時には其の同一事を惡と呼ぶ。何故そんな事をするか、三段論法の場合とは違つて、私が其の事に就いて無智であり、未熟だからである。

四 姦通者

エビクテートスが、『人は誠實となるやうに作られてゐる、そして誠實を無視する者は、人間たる特色を無視する者だ』と、かう云つた時、丁度世間から文學者と思はれてゐる人で同市で嘗て姦通罪を犯した者が入つて来た。そこでエビクテートスは尙語を繼いで云つた。然しもし我が出生の目的たる此の誠實を棄てて、隣人の妻に對して野心を懐くならば、我々は一體何事を爲しつ、あるのか。破壊顛覆するのではないか。誰をか。誠實なる謙讓なる神聖なる人間である。それだけか。否、善隣の誼と友愛と社會とを顛覆しつ、あるのでないか。して我々は自己を如何なる位置に置きつ、あるのか。私は君をどう考へようか。憐人としてか、友人とし

てか。どんな種類の隣人か、友人か。公民としてか。私はどの點で君を信用しようか。實際君が使ひ途のないほどやくざな器であるならば、君は糞塚に投げ棄てられ、そして誰も慫々君を拾ひ上げないであらう。然し君が人間として人間に相應はしい役目を果す事ができないならば、我々は君をどう處置したらいいか。何故と云ふに、君が友人たる役目を果たし得ないと假定せよ、然らば君は奴隸たる役目を果たし得るか。誰が君を信用するか。そこで君も亦無用の器として且一片の糞として糞塚の何處かへ投げられる事で満足しないか。そして君は、誰も文學者たるおれを顧みないと云ふか。それは君が不善無用の徒だからである。それは丁度胡蜂が、何人もおれを愛さないで逃げて行き、暇さへあれば自分を叩き落とすと云つて不平を云ふやうなものである、君には針がある、其の針で刺されたものは誰でも悶へ苦む。君はどうして欲しいのか。君はをるべき場所がないのである。

『然らば女子は本來共有物でないのか。』

共有物である、小豚は來客全部の共有物である、然し其の肉片が分配されてしまつた後で、自分で差支へないと思つたら、行つて次席に在る人の分を掴み取るか、或は何食はぬ顔してそれを盗むか、或は自分の手を伸ばしてそれを握れ、そして一片も裂き取る事ができないなら、指をそれに浸して甜めよ。それこそ立派な相客だ！ それこそ眞にソークラテース式賓客だ！

『さて劇場は市民の共有物ではないか』と、だから一同が坐席してから、もし君が差支へないと
思つたら、来て、其の人を追ひ出せと云ふのだ！女子が本来共有物だと云ふのも此の意味であ
る。立法者が、饗宴の主人として、女子を分配してから、君は自己の分を要望するだけでは満
足せず、他人の分をも掠めて味はねばならないのか。

『然しおれは文學者で、アルケデーモス（ストア派の哲學者）を理解してゐる。』

それではアルケデーモスを立派に理解して、然も姦夫になれ、不實者になれ、そして人間よ
りも寧ろ狼になれ、大猿になれ。何故と云ふか、其の間に少しの差違もないからである。

五 大度と慎重とは如何にして竝立するか

事物（材料）其の物は無性（非善、非惡）である、然し其の用方は無性でない。それではどうし
たら、不動、平靜なると同時に、慎重にして輕忽、怠慢ならざるを得るか。骰子を遊ぶ者の眞似
をすればよい。數取は無性である、骰子は無性である。骰子を轉がして何が出るかは、私に判
らない。然し慎重に巧みに骰子を轉がす事、それは私の責任である。其の通り人生に於ても大
任は茲に存するのである。即ち事象を鑑別し、分離し、そして云へ、「外物は我が權内に在ら
ず、意志は我が權内に在り」と。然し、我れは善惡を何處に求むべきか。内面、即ち我れ自身の

ものに於てある。然し、我れ自身に屬せざるものに就いては、善惡損益等の呼稱を控へよ。
『然らば我々は此等の事象を放漫に取扱ふべきであるか。』

決してさうでない。何となれば、これは一方に於て意志の性能に對して不都合であり、従つて
自然に反するものだからである。然し使用の如何は無性でないから、我々の行爲は慎重であら
ねばならぬ、そして、材料は無性であるから我々は又確乎たる、平靜なる行爲をしなくてはな
らぬ。何となれば、我々の取扱ふものが無性でない場合には（即ち我々の意志を以て左右し得る
場合には）自分は何人にも拘束、強制される事がないからである。支障、強制を受ける懼ある
所では其等の一物を得ようとしてもそれは自分の權内の事ではなく、又善でも惡でもない。然
し其用法は善か惡かである、そして用法は自分の權内に屬する事である。然し周圍の事物に影
響される人の慎重と、これを顧慮しない人の不動心と、此兩者を融合する事は困難である。け
れどもそれは不可能でない。もし不可能ならば、幸福は不可能になる。然し我々は航海をして
ゐる時のやうに行動すべきである。航海の場合に自分にできる事は何か。船長や、水夫や、日や、
機會を選ぶ事である。さて乗り出してから暴風に逢ふ。然しこれ以上私は何を心配するか。何
となれば自分の爲すべき事はもはや済んでゐるからである。事は他人——船長に屬する。然し
船は沈没しつゝある。——そこで私はどうするのか。自分は、自分が爲し得る唯一の事をしよ

う、何か。溺れる際に畏る、所なく、悲鳴する事なく、神を咎むる事なく、生れたる者は滅びざるべからざる事を覺悟する事である。何となれば、私は不滅の存在ではなくて、一個の人間であり、一時間は一日の一部分であると同じく、私は全の一部分だからである。私は時の如くに現じ、時の如くに去らねばならぬ。どうして去るか。即ち窒死するのか、熱病で死ぬのか。それは私の關知する所でない。私は此の種の何等かの途によつて去るべき運命にあるからである。毬戲の熟練家が爲す事も此の通りである。何人も毬が善か悪かと氣にする者はない、其の投げ方、捕へ方を氣にするのである。故に投毬捕毬の熟練、技術、敏捷、判斷は茲に存するのである。

然し、もし我々が、投毬捕毬に際して迷亂し、畏怖するならば、それはどんな遊戯になるかそして、我々はどうして着實にならうか、遊戯の順序をどうして知らうか。一人は投げよと云ふ、一人は投げるなと云ふ、一人はおまへは一度投げたでないかと云ふ。これは争論で、遊戯ではない。だからソークラテースはよく毬戲を解したと謂ふべきである。

『どうしてか。』

法廷の審問を冗談視したのだ。彼は云ふ、『アニトスよ、足下は余を以て神を信仰せざる者と云はる、も、それは如何なる譯にや。足下は鬼神を何者と考へらる、か。彼等は諸神の子にあら

すや。或は諸神と人間との混成にあらずや」と。アニトスが然りと云つたときに、ソークラテースは、『(驢馬の一種なる)驢馬の存在を信じつ、然も驢馬の存在を信ぜざる事を得と足下は思惟せらる、や』と云つた、而も毬の遊戯でもしてゐるかのやうに。そして彼の毬とは何か。生命であり、縲紲であり、追放であり、嚙毒であり、妻子との死別であつたのだ。此等の事柄を彼は弄びつ、あつたのである。然も尙彼は毬戲を遊び、巧みに遊んだのである。我々も亦さうあるべきである。我々も、競技者と同じく、飽くまで慎重であらねばならぬ、然し毬其の物に就いては同じく無關心であらねばならぬ。何故と云ふに、我々は外物に對しては全力を盡して我々の技を振ひ、然も外物を重視せず、外物の何たるかを問はず、それに對して我々の技を發揮すべきだからである。織工でもさうだ、彼は羊毛を造るのではなく、與へられた羊毛に對して己れの技を振ふのである。他人は君に食物及び財産を與へ、そして又其等を沒收、然り、君の貧弱な身體をも沒收する事ができるのだ。それ故材料を買つたら、それに加工せよ。そこでもし君が何の罰も受けずに法廷から出て來れば、遭ふ人毎に君の放免を祝ふであらう。然し具眼の士は、審判所に於ける君の振舞が正當であつたと云ふ事を知つた上で始めて君を褒め、喜ぶのである。然しもし君の放免が君の不正行爲に因ると云ふ事を發見するならば、前とは反對である。何となれば、喜悅の合理的なる處、其處に亦祝賀が合理的だからである。

然らば、或外物が自然に順ひ、他の或外物が自然に反すと云はれるのはどう云ふ譯か。それは丁度我々が社會から離れた個々別々の人間と看做される場合と同じである。例へば私は足に向つて、足が清潔であるのが自然だと云ふ。然し足を足として認め、身體から離れた單獨のものとは認めない場合には、足が泥中に踏込み、荆棘を踏みしだき、又時として全身體の犠牲となつて切斷されるのが其の本分である。さもなければ、それはもはや足でない。我々は自身身に就いても亦かう云ふ風に考ふべきである。君は何物か。人間である。もし君が自分を他人と關係のない單獨な人間だと考へるならば老齡まで存へ、富を作り、健康を保つのが自然である。然しもし君が自分を人間と考へ、或全體の一部と考へるならば、君が時として病氣に罹り、時として航海し、危険を冒し、時として窮乏に陥り、又時として夭折するのが全體の爲である。然らば何故君は悶へるか。君は知らないか、足が身體から分離すれば、それはもはや足でない、それと同じく、君が他人から分離すればもはや人間ではないと云ふ事を。何故と云ふに、人間とは何か。第一には神及人から成立する國家の一部であり、次に此の國家の次位に在りと謂はれる宇宙の縮圖たる所の國家の一部である。

「然らば私は審判を受け、或者は熱病に罹り、或者は海を航海し、或者は死に、そして或者は宣告を受けなければならないのか。」

さうだ。何となれば、斯かる身體に於て、斯かる世界に於て、斯かる多數の仲間の内に於ては、斯かる事件が、我々の中の誰かに起らないと云ふ事は不可能だからである。然らば君が此の世へ生れ出た以上、當然云ふべき事を云ひ、此等の事象を正しく案配するのが自分の義務である。そこで或者は云ふ、「おれは、おまへがおれに對して不正を働いたと断定する」と。願はくは其の断定が大に君を益せん事を。私は私の分を盡した、然し君が亦自分の本分を果したかどうか。君自身で検査するがい、君が自分で氣づかずにいるる惧れもあらうから。

六 無 性

假言的命題其の物は我々に無關係な事である、然しそれに關する可否の断定は無關係な事でない、それは知識か、意見か、或は誤謬かである。これと同じく人生は無性(非善非惡)である。然しながら人生に處する道は無性でない。そこで此等の事象も亦無性だと云ふ者があつても、決して其の爲めに怠けてはならぬ。又此等の事象を考慮せよと云ふ者があつても、決して墮落したり、材料(外物)を讚美したりしてはならぬ。

そして自分に準備のない事象に關しては、おとなしくして、他人が自分より勝れてゐてもそれを怒らないやうに自己の準備と力とを知るのが善である。何故なら君は君で、三段論法の點で

は彼等よりも自分が勝れてゐると主張する。そしてもし他人がこれを聞いて怒るならば、君は『おれは三段論法を學んだのだ、そして君等は學んでゐないのだ』と云つて彼等を慰撫するからである。其のやうに、實習の必要ある事柄に就いては、實習によらざれば得られざる物を求めずにそれを實習した者に一任するがよい。そして自己の不動心を以て満足するのである。例へば『或人に挨拶して来い』と云ふ。『どう云ふ風にか。』『下品にならないやうに。』『然しおれは締め出されて入れない、何故ならおれは窓から入る方法を教はつてゐないから。そして戸が締まつてをればおれは是非とも歸つて来るかそれとも窓から入らなくてはならない。』『然しそれでも話しかけて見よ。』『どう云ふ風にか。』『下品にならないやうに。』けれども甘く行かなかつたと假定せよ。それは君の關する事か、それとも彼の關する事か。然らば何故君は他人に屬するものを要求するか。常に自分の分と他人の分とを忘れなければ決して惱亂する事がない。それ故、『未來の事が不確なる間は、余は常に、自然の儘を保持するに適したるものを固執す、何となれば神自ら余に斯かる選擇の性能を與へたればなり』と云ふクリシッポスの言葉は至言である。然し假に、私が病氣になるやうに運命づけられてゐる事を知つてをれば、私は其方へ進んでさへ行かうと思ふ、何となれば、足も亦、睿智があれば進んで泥中に入らうと思ふであらうから。何故か。麥の穂は何故に生ずるか。成熟する爲めではないか。してそれが刈取られる爲に成熟す

るのである。何となれば彼等は他物を離れた單獨なものでないからである。そこで萬一彼等に知覺があるならば、彼等は刈取られたくないと思ふべきであるか。否、刈取られないと云ふ事は麥にとつて禍である。それ故我々は、人間の場合に於ても、死がなければ、成熟や收穫がないと同様に、禍だと云ふ事を知らねばならぬ。然るに我々が刈取られねばならぬものであり、且自己の刈取られる事を知りながら、それを怒るのである。これは馬をよく檢べた者が馬に屬するものを熟知してゐるやうには我々が自己の何たるかを知らず又人間に屬するものを研究してゐないからである。然しクリサンタスは將に敵を討たんとしつゝ、あるとき、退却の喇叭が聞えたのでそれを差控へた。即ち彼は、自己の性向に従ふよりも主將の命に従ふべきだと思つたのである。然るに我々の内一人として、宿命の召喚を聞いてさへ直にそれに従はうとする者はない、寧ろ悲泣し、呻吟し、そして受くべき苦はすべて受けて、それを『境遇』(逆境)と呼ぶ。どんな境遇か。もし君の周圍のものをすべて境遇と名づけるならば、萬事が境遇(逆境)である。然し苦難を指して境遇と云ふならば、生れた者の死ぬのに何の苦難がある。破壊の器は劍か、刑車か、海か、瓦石か、將た暴君かである。何故君は冥府へ下る途を氣にするのか。どの途をとつても同じ事だ。然し眞實を聽きたければ教へてやる、暴君の指定する冥府への途は最も近い。暴君が人を殺すに六ヶ月を超える事はない、然るに熱病が人命を斷つのに往々一年もか

かる。すべてかう云ふ事は單なる音である、空なる名稱の噪音に過ぎない。

『自分は皇帝に殺されさうだ。』

して地震の頻繁なニコポリスに住む私には何の危険もないか。そして君がアドリヤ海を横断する時どんな危険があるか。君の生命が危険なのでないか。

『さうだ、然し自分は今意見の爲に危険に瀕してゐる。』

意見とは君自身の意見か、どうして危険なのか。誰が君を強制して君の欲せざる意見を懐かせる事ができるか。それとも他人の意見の爲めに身に危険が迫ると云ふのか。他人が間違つた意見を有つてゐたとて君にそんな危険があるか。

『然し自分は今追放される所だ。おれを追放しようと思ふ意見を有つてゐる者があるのだ。』

追放とは何か。ローマ以外の場所へ行く事か。

『さうだ、然しもし自分がギアロスへ遣られるとしたらどうであらう。』

もしそれが君に相當な事ならば、君は其處へ行くであらう。もしさうでないならば、ギアロスでなくて他所へ行く事ができる、其處へは今君をギアロスへ追放する者も亦、嫌やでも應でも行かなくてはならぬのである。然らば何故君は何か重大事件でやもあるかのやうにローマへ出かけるのか。そんな事にいろ／＼準備するのは勿體ない。だから恰憫な青年ならばかう云ふ、

『こんな事ならあんなに澤山な書物を読み、あんなに澤山な書物を書き、老いばれ爺の側であんなに長く坐つてゐるほどの事はなかつたのだ』と。唯だ自己のものと然らざるものとのけぢめを忘れるな。決して他人のものを我が物だと云ふな。法官席と牢獄とは、それ／＼一個の場所である、一は高く一は低い、然しどちらにゐても意志に高下はない、高下なくしておかうとさへ思へば。其時こそ我々はソークラテースに倣つて獄中でも讃歌を詠む事ができるであらう。然し我々の現在の有様では、先づかう云ふ事を反省すべきである、即ち、我々が獄中にゐるのに、他人が我々に向つて、『君に讃歌を朗讀してやらうか』と云ふ時、それを怒らずに忍ぶ事ができるかどうか。我々は云ふであらう、『何故おれを苦めるのだ、おれが今悲境に沈んでゐる事を知らないのか。こんな有様で讃歌などを聞いてをられると思ふか』と。どんな境遇か。『私は死ぬのだ。』して他の者は永劫に生きるのか。

七ト 占

占ひを不當に重んずる結果として數多の義務を怠る者が我々の内に少なくない。何故と云ふに卜者は死か危難か疾病か、或は一般に此種のもの以外に何を判知し得るか。故に私が味方の爲に危険を冒さねばならぬとすれば、否、味方の爲に一命をさへ棄てるのが私の義務だとするならば、占ひの必要は何處に在る。私は善惡の本質を私に教へ、兩者の表徴を説明してくれる

ト者を自身の衷に有するではないか。然らば私は何の必要あつて、生贄の内臓や、鳥の飛び方（共に占ひの方法）に相談するのか。そしてト者が、『君の爲によい占ひが出た』と云ふ時、何故これに甘んずるか。何が私の爲めであるか、何が善であるか、彼に判るのか。彼は内臓を見て占ひができる以上、善惡の占ひもできるのか。何となれば、もしかう云ふ占ひができれば、美醜、正邪の占ひもできる筈だからである。ト者よ、私に對する兆が何と出たか教へてくれ。それは、生か、死か、貧か、富か。

然し此等が私の爲めになるかどうか、私はそれを君に聽かうと云ふのではない。君は我々一同が誤謬に陥つてゐる、異論百出の事柄（即ち未來の事など）に對して意見を吐きながら、文法の問題に就いて何故意見を立てないのか。（人の知らぬ未來の事を豫見する力がある位なら、既知の事、即ち文法などに就いて立派な意見が吐かれさうなものだがと云ふ意味）配所のグラティルラ（ドミニティアヌス帝の爲めに追放された貴婦人）の處へ一ヶ月分の食糧を船で送らうとした女は、いくら送つても、皇帝の爲めに押へられるぞと云つた者に對して、立派に答へてゐる、曰く、『食糧を送らずにゐるよりも、寧ろそれを送つて全部皇帝に押へられた方がい、』と。

然らば、我々は何故屢々ト占に頼るか、臆病心からである。將來の事件に關する危惧からである。従つて我々はト者に諛ふのである。『先生、私は父の財産を相續できませうか』と。そこで

ト者は云ふ、『こつと、就いては生贄を供へて見よう』と。『はい、福運の神の命ぜられます通りに。』そこでト者が、『相續できる』と云へば、我々は丁度彼から遺産でも貰つたかのやうに彼に感謝する。結果は彼等の爲に弄ばれるのである。

そこで我々はどうすべきであるか。我々は須く欲望や嫌惡を棄て、占ひを受くべきである。旅人が岐路に立つて會ふ人にどの道を行くべきかを尋ねる際左道よりは右道を行きたいなど、云ふ願ひを起さないと同じやうでなければならぬ。彼れは自分の目的地へ行く道以外にどんな道をも欲求しないからである。これと同様に我々は、又神を案内者と思つて神託を受くべきである。我々は眼を使ふ際に、眼に向つて、我々の欲する物を我々に現示せよとは云はずに、眼の我々に示すが儘に外物の印象を受けるが、丁度其の通りでありたい。然るに今我々は戦慄しつゝ、ト者の手を取り、一方では神の援けを呼びながらト者に懇願し、『先生、憐んで下さい、どうか安らかに此の艱難を免れさせて下さい』と云ふ。あさましき者よ、君は最善なるものを措いて何を求めるのか。そして神の喜ぶものよりも尙善なるものがあるのか、何故君は又君だけで自分の審判者たり、忠言者たるト者を墮落させ、邪路へ導くのか。

八 善の本質

神は有益である、然し善も亦有益である。然らば神の本性の存する所、其處に善の本性も亦存すると云うて差支ない。然らば神の本性とは何か。肉體か。決してさうではない。地所か。さうでない。名聞か。さうでない。睿智か、知識か、正しい理性か。さうだ。然らば善の本性を専ら其處に求むべきである。何となれば、私は、君がそれを植物に求めまいと思ふからである。さうだ。理性なき動物に求めるか。否。然らば君がそれを理性ある動物に求める以上、何故尙理性的動物の無理性的動物よりも勝れた點にそれを求めないか。さて植物は表象を使用する力さへない、それ故君は善と云ふ語をそれに適用しない。そこで善には此の表象使用が必ず伴ふべきものである。使用だけではないか、何故なら、もしさうだとすれば、善、幸、不幸は動物にも存すと云ひ得るからである。然し君はさうは云はない、それは、當然である。何となれば、彼等は此の表象を大に使用するけれども、然も彼等は表象使用に對する理解力がないからである。そしてそれには十分の理由がある、彼等の存在目的は、他のものに奉仕する事である、そして彼等は何等の優越權を振ふものではないからである。思ふに驢馬は他のものに優越する爲めに存在するのではあるまい。さうだ。我々が何物かを擔ひ得る所の背を要したからである。そして彼の歩行の能力をも我々は實際必用としたのである。此の理由で、彼は表象を使用する性能を賦與されたのである、使用する性能までもなかつたら、彼は歩く事もできなかつたであらう。

らう。そして彼の天賦は茲に盡きてゐる。何となれば、もし彼が表象の用法に關する理解力をも賦與されてゐたとすれば、當然の歸結として彼は我々に隸屬したり、かう云ふ務めをする事もなく、寧ろ我々と同等のものであつたであらう。

そこで君は善の本性をば、善の唯一淵源と謂ふべき理性ある動物に求めないのか。それではどうか、動植物も亦神の作物ではないか。さうだ。然し彼等は靈長でもなく、又神の一部分でもない。けれども君は靈長である。神の分身である。君は自己の内に神の或部分を有つてゐる。然らば何故君は自己の尊貴なる系統を忘れてゐるか。自己の本源地を知らないのか。君が食事をする時、食事する自分の誰なるか、自分が養ふ者の誰なるかを忘れるか。君が、婦人と交る時、交る自分の誰なるかを忘れるか。君が公衆に接する時、自己を鍛練する時、討論する時、自分が神(自己の神性)を養ひ、神を鍛練しつ、ある事を知らないか。あさましき者よ、君は神を携へてゐるながら、それを知らないのだ。君は、私の所謂神とは、銀や金やの神、外物の事だと思つてゐるのか。君は、心内に神を藏しつ、然も不淨な思念と下賤な行爲で神を辱めつつある事を知らないのである。そして神の寫像が眼前にあつてさへ、君は現に爲しつ、ある事を爲し得ないのに、神其のものが現に心内に存在して、萬事を照覽し、聽取しつ、あるのに、そんな思念や行爲を恥かしくと思はず、實際、自己の本性を忘却して神の怒を招くのである。そこで

我々が青年を學校から實生活へと送り出す際に、彼が不正なる行爲をなさざるや、食物に就いて不節制ならざるや、婦人と不正の交際を結ばざるやと懸念するのか、そして彼を包む襦袢が彼の品位を落とさざるや、美服が彼を傲慢ならしめざるやと懸念するのか。此の青年は（もしさう云ふ振舞をすれば）彼れ自身の神を知らないものである、誰と共に世に乗り出すかを知らないのである。然し我々は、彼が、『願はくは、我れ爾（神）と共に在らん事を』と云ふのを聴くに耐へられようか。君は自分に神を有つてゐないか。そして神が在るのに他の物を求めるのか。それとも神はこれ以外の事を君に告げるか。もし君がフィディヤス作のアテナかゼウスの彫像かであるならば、君は、己れ自身と作家と双方に就いて考へるであらう。そしてもし君に理解力があるならば、自分を作つた者と自分自身とを辱める事をせぬやうにと努めるであらう。そして、觀者に對して不體裁な様子をせぬやうにと努めるであらう。然るにゼウスが君を作つてくれたと云ふ譯で、君は自分の様子には構はないのか。然も彼の作家は此の作家と似てゐるか、彼の作品は此の作品と似てゐるか。例へば、如何なる作品が、其の製作に當つて作家の振つた技能をそれ自身の裡に有するか。（作家には生きた技能があるけれども、出来た作品其の物は死物であつて、生きた技能を有つてゐないと云ふ意味）それは大理石か青銅か、金か象牙かでないか。そしてフィディヤスの作つたアテナは、一旦其の手を延ばして、勝利の神の像を手の上に

載せてからは、永久に其の姿態でゐるのである。然るに、神の作品（人間）は、運動の力を有する、呼吸する、事物の表象を使用する性能と其等を吟味する力とを有する。君自身がかう云ふ作家の作品でありながら、此作家を辱めるのか。して私は何と云はうか、彼は君を作つたばかりでなく、君を君自身へ委任し、君自身への寄託物としたのである。君は之を忘れてゐるばかりでなく、此の信託されたものを辱めるのか。然し、もし神が孤兒を君へ託したとして、君は孤兒を其のやうに粗末にするか。神は君自身を君に世話させて、『汝以外、汝を寄託するに相應しき者はなし。我に代つて彼を其の自然の儘に、其の謙讓、忠實、剛毅、豪膽、沈着、平靜の性を失はざらしめよ』と云ふ。然るに君は此の期待に背いてゐる。

『此奴はどうしてこんな傲慢な風をして、不遜な顔付をするのだ』と云ふ人があるかも知れぬ。私は、まだ哲學者に似合はしいだけの威容を有つてゐない、何となれば、私は私の學んだもの、承引したものにまだ信賴してゐないからである。私は尙依然として自己の軟弱を惧れる。私に自信を與へよ、然らば私は當然有つべき容貌と當然有つべき態度とを示すであらう。そして私は、出来あがつた、磨きをかけた彫像を君に見せてやらう。君は何を期待するか。不遜な容貌か。オリンピヤに在るゼウス神の像は、眉を釣り上げてゐるか。否、其の容貌は今にも、

我が言語は撤回すべからず、又誤る事なし

と云はうとしてゐる者に相應はしく落ちついてゐる。私は自己を斯くの如き者、即ち忠實、謙讓、崇高、平靜なるものとして君に示したい。そして又老病死を脱したものとてか。否、神に相應はしく死し、神に相應はしく病むのである。此の力を私は有つてゐる、これが私に可能である。然しこれ以外の事は私の所有でもなく又可能でもない。私は哲學者たる力を君に示さう。それはどんな力か。求めて失望する事なく、避けんを欲して避け得ざる事なく、正しく追求し、不撓の志操を有ち、承引を輕忽にせざる事である。此等を君に示したいのである。

九 人間たるの資格なくして哲學者たるの資格を装ふ者

人間たる天性の約束を果たす事だけでもやさしくはない。何故なら、抑々人間とは何か。理性ある必滅の存在である、然らば理性の性能があると云ふ點で、我々は何物と區別されるか。野獸とである、其の外に何とか。羊などの動物とである。然らば野獸の眞似をしないやうにせよ。さもなければ、人間たる資格を失ふのである。君は君の約束を果さないのである。羊の眞似をしないやうにせよ、さもなければ、人間の本性が失はれるのである。羊の眞似とは何か。我々が貪慾な、淫佚な、輕卒な、卑陋な、無分別な振舞をする時、我々は何へ傾いたのか。羊へである。何を失つたのか。理性の性能をである。我々が好争的な、有害な、疢癘な、兇猛な

振舞をする時、我々は何へ傾いたのか。野獸へである。それ故我々の内の或者は大野獸で、或者は小野獸である、そして不良な卑小な根性を有つてゐるのである。それ故我々は、「願はくは獅子の餌とらん哉」と云ふのだ。(一層食はれるなら高尚な獸に食はれたいと云ふ意味)然し斯して人間が人間として振舞ふ約束が破られるのである。何故なら、どう云ふ場合に複合命題が眞理とされるか。(複合命題とは數個の立言相集つて一命題を爲し、其等諸立言の中、一が虚妄ならば全命題が虚妄となるものを指す)其本性が約束する事柄を果す場合である。故に複合命題が眞理となるのは、それが眞理の結合たる場合である。然らば選言命題の眞理となるのはどんな場合か。其約束を果たす場合である。(選言命題の一例。快樂は善なるか將た惡なるかなり)笛、琵琶、馬、犬はどう云ふ場合に存立するか。(彼等が夫れ々々、其の約束を果たす場合に於てある)然らば人の人たる所以も亦、これと同様に存立し、喪失するのに何の不思議がある。各人はそれに相應する所の行爲によつて向上し、存立するのである。即ち大工は木匠業により、文法家は文法術によつて存立するのである。然るにもし人が常に文法に背いた文章を書くならば、彼れの技能は必ず、不正格になり崩壊するであらう。斯くして謙讓の行動は謙讓な人間を確保し、不遜な行動は彼れを亡ぼす。そして誠實な行動は誠實な人間を確保し、其の反對の行動は彼れを亡ぼすのである。そして一方に於て、反對の行動は反對の品性を強める、即

破廉恥は破廉恥な人間を、不信は不信な人間を、悪口は悪口する人間を強め、憤怒は怒り易い人間を、不當な受授は、貪慾な人間を益々貪慾ならしめるのである。

それ故、哲學者は我々を戒めて、知るだけで満足せず、これに加ふるに研究と次ぎに實習とを以てせよと云ふ。何となれば、我々は久しく其の反對の習慣を養ひ、そして眞實な意見に反する意見を實行してゐるからである。そこで、我々が又正しい意見を實行しないならば、我々は他の意見の解説者たるに過ぎないであらう。何となれば、今日我々の仲間で、學理上から善悪を論じ得ない者があらうか。例へば、『諸々の事物の内、或ものは善なり、或ものは悪なり、而して或ものは無性なり、然らば善とは徳及徳を分有するものなり、而して悪とは此の反對なり、無性なるものは富、健康及び名聞なり』など、云ふ事である、そこでもし、此の論辯の最中に、萬一何か異常に大きな音がするか、或は、列席者の誰かが我々を嗤ひでもすれば、我々は惱亂する。哲學者よ、君が論じつ、あつたものは何處へ行つたのか。何處からそんな事を持ち出して論じたのか。唯だ唇からだ。然らば何故君は他人の與へる援助を汚すか。何故至要の問題を骰子のやうに弄ぶか。何となれば、倉庫へ食糧や酒を貯藏する事と、それを飲食する事とは、別問題だからである。飲食した物は、消化し、分布し、筋肉、骨格、血液、健全な色艶、健全な呼吸になる。貯藏した物、それを君は好きな時直に取出して人に見せる事ができる、然しそれから

得らるべき利益は、單に君がそれを所有することを人に示すに止まる。何となれば、君が此等の學説を説明するのと、別の學説を説明するのと其の間に何の差違があるか。(説明だけでは役に立たぬ、須く實行に表せと云ふ意味)今坐つて、そして學理に従つてエピクロースの學説を説明せよ、然らば恐らく君は、エピクローロス自身よりも有効に説明するであらう。然らば何故君はストア學徒と自稱するか。何故多數の人を欺くか。君は希臘人でありながら、何故ユダヤ人の眞似をするか。君は、人が何故それ／＼ユダヤ人、シリヤ人、エヂプト人と呼ばれるか其の譯を知らないか。そして我々がどちらへも傾く人間を見ると、彼はユダヤ人でない、ユダヤ人の眞似をしてゐるのだと云ふのが普通だ。然しもし彼がユダヤ教に染つた人の感情を有ち、そして、其の教派を信奉するならば、彼は名實共にユダヤ人である。(エピクテートスは猶太人と云ふ名稱の下に猶太人と基督教徒とを混同してゐるらしい)斯くして我々も偽りの洗禮を受けると名はユダヤ人だが、實は別なものである。我々の感情が我々の言葉と一致しないのである。我々が知つた振りをして言つたり誇つたりする事と、我々の實行する事との間に非常な懸隔がある。斯くして我々は、人間たる資格の約束さへ果たし得ないのに、其の上尙哲學者たる責任を脊負ふのである。それは丁度十封度の重量に堪へ得ない者がアチャックスの扛けた石を扛けようとするのと同じである。

一〇 名稱と義務

自己の誰なるかを考へよ、第一、君は一個の人間である。即ちそれは意志の性能以上に勝れたものを有たないのである。他のものは悉く意志に従属するのである。此の性能自身は、羈束を受けず、何物にも隷屬しないのである。次に理性を有する點で自分が何物と區別されてゐるかを考へよ。君は野獸と區別されてゐる。家畜と區別されてゐる。加之、君は世界の公民である、其の一部分である、使役される部分ではなくて、支配する部分である。何となれば、君は神の世界施政を了解し、世相の關係を考察する能力を有するからである。然らば公民たる資格は何を約束するか。私利を圖らない事である。萬事につけて自分を社會から分離したものは考へない事である。寧ろ手足に理性や自然の組織を理解する力があるものと假定して、さてその手足のやうに行爲する事である。何となれば、手足は決して全身と無關係に運動したり、欲望したりしないからである。故に哲學者は云ふ、『善人は、病、死及び身體の切斷と云ふものは、普遍の布置に従つて自己に充當されてゐる事、そして全が部分の上座に位し、國家が市民の上位に在ることを知つてゐるから、もし彼が起るべき事象を豫見すれば、自ら進んで自己の病死及切斷へと赴くであらう』と。寔に至言である。然し我々は今、未來に就いては不案内であるから、其

の本性上最も我々の選擇に適するものを固執するのが我々の義務である、何となれば、我々は特に其のやうにできてゐるからである。

次に君は自分が子であると云ふ事を忘れるな。子たる資格は何か。子の物はすべて父に屬すと考へ、萬事に就いて父に服従し、他人に向つて父を悪口せず、父の禍となる事を云はず、行はず、でき得る限り父と共同して、萬事に就いて父に讓歩するにある。次に自分が又兄弟であると云ふ事、兄弟の資格としては讓歩せざるべからざる事、容易く承引し、兄弟を褒め、兄弟に逆つて己れの意志に無關係な事物の要求權を主張する事なく、寧ろ進んで其等を放棄し、以て自己の意志に屬する事物に於て大部分を分取せざるべからざる事を知らねばならぬ。例へば、萬草や、椅子を棄て、善良な性向を體得すればどうかと云ふ事を考へよ。其の方がどれだけ得策であるか。

次に、もし君が一國の元老院議員であるならば、自分の元老院議員たる事を記憶せよ。青年ならば青年たる事を、老人ならば老人たる事を記憶せよ。何となれば、此等の名稱をよく吟味すれば、夫れが相當の義務を指示するからである。然るに、もし君が自分の兄弟を誹謗しに行くならば、私は君に云ふ、君は自己の誰なるか、自己の名の何たるかを忘れたのである。次に、もし君が鍛工でありながら、槌の用法を誤るならば、自己の鍛工たる事を忘れた事にな

るであらう。もし君が兄弟たる事を忘れて、兄弟ではなく仇敵になるならば、其の時君は一物に代ふるに他物を以てした事にならぬであらうか。そして温しい社交的な人間にならずに、有害な野獸に墮し、人を裏切り、人に噛みついて尚君は一物をも失はないのであらうか。損するに云ふには金を失はねばならぬ。して其の金以外は何を失つても損にならないか。もし君が文法や音楽の術を失ふならば、其の喪失を損害と思ふであらうか。そして君が謙讓、中庸、温良を失つても、何等の損失でないと考へるか。然も前者は或外的な、意志に無關係な原因によつて失はれるのであるが、反之、後者は我々自身の過失によつて失はれるのである。前者は、その缺如又は喪失が恥辱とはならないものである。後者は、その缺如又は喪失が恥辱となり、非難の種となり、不幸を招來するものである。變童は何を失ふか。彼は人間たる資格を失ふのである。彼をして變童たらしめる人間は何を失ふか。他の多くの事を失ふ、そして變童と同様に人間たる資格を失ふ。姦夫は何を失ふか。彼は謙讓、溫和、貞節、市民の資格、隣人の資格を失ふのである。憤怒する者は何を失ふか。他の何物かを失ふ。儒夫は何を失ふか。他の何物かを失ふ。不善なる者は何物かを失ひ損するのである。そこで君がもし、損害とは金錢の喪失以外にないと思ふならば、すべて以上の人々は何等の禍も損害も受けない事になる。否、恐らく彼等は、此等いづれかの行爲によつて少し許りの金錢を收受するならば、却て利益してゐるかも知

知れぬ。然し考へなくてはならぬ、君がもし何事につけそれを僅かな金錢だけから見れば、鼻を失くしても君の説によれば損害ではないのだ。君は云ふ、それは損害だ、何故ならそれは身體を毀傷した事になるからと。然らば嗅覺だけを失つても損害にならないか。然らばこれを所有する者は利し、これを失ふ者は損害する所の靈の力と云ふものは存在しないであらうか。

『それはどんな力が。』

『ある。』

これを失ふ者に何の損害もないか。彼は一物をも失はないのか。彼は已れに屬する所の物を少しも失つてはゐないか。我々には固有の誠實心がないか。天賦の愛情、天賦の互助心、天賦の寛容心がないか。然らば甘んじて此等の物を失ふ人に、何の禍もないと云へるか。

『それでは害を加へる者に報いるに害を以てしてはいけないのか。』

先づ害とは何ぞやを考へよ。そして哲學者の言を想起せよ。何となれば、善は意志に存し、惡も亦意志に存する、とすれば、君の言ふ事は要するにかうではないか、即ち、『では彼がおれに對して不正を働いた事によつて彼自身を害したからには、おれも亦彼に對して何等かの不正を働く事によつて自分自身を害さうではないか』と。何故我々はかう云ふ事を心中に描いて見

ないのか。身體又は所有物に何等かの損傷があれば、それは即ち禍である、そして意志の作用に損傷があつても何等の禍にならぬ、何となれば誤つた考へを有ち、或は不正な行爲をして、頭にも眼にも將た臀にも苦痛はなく、又財産を失ふ事もないから、と君は考へるのだ。そして我々は偏へに此等の物の安泰を希ふ。然し意志を謙讓且誠實ならしめるか將た無恥且不實ならしめるかと云ふ事に就いては毫も考慮する事がなく、唯だ學校に於て數言をこれに費すだけである。故に我々は此等の數言に熟達するだけで、それ以上は全く零である。

一一 哲學の始

少くとも正しい途によつて入門する者にとつて哲學の始とは、必須の事項に就いて自己の弱小無能な事を自覺するにある。何となれば、我々は生れながら、直角三角形とか、四分音程とか、半音程とかの觀念を有つてゐるのではなくて、術に基く一定の媒介によつて、此等を一々學ぶのである。それ故此等を知らない者は、自分で知つてゐると思はない。然し、善惡、美醜、相應、不相應、幸不幸、可不可、當爲不當爲に關する本有觀念を有たず生れた者は一人もあるまい。それ故我々は、すべて此等の名稱を使用し、各個の場合に此等の本有觀念を適用する事に努める。例へば、『彼の行は可なり、不可なり、至當なり、不當なり。彼は不幸なりき、

幸福なりき。不正なりき、正なりき』と云ふやうなものである。我々の中でかう云ふ名稱を使はない者があらうか。我々は線(幾何學の)や音を學ぶまでは其等の用語を使用しないが、丁度其のやうに上記の諸名稱を學ぶまでは、それを使はずにゐる者が、我々の内にあらうか。ない。それは、我々が、謂はゞ自然に此の點に就いて既に何事かを教はつて生れた者だからである。そして此等から出發して我々は、此等に自負心を加へるのである。或人は云ふ、『おれに美醜が判らない譯はない、おれは美醜の觀念を有つてゐるではないか。』君は有つてゐる。『おれはそれを個々の事物に適用してゐるではないか。』適用してゐる。『ではそれを正しく適用しないと云ふのか。』問題の關鍵は茲に在る。そして茲に自負心が加はるのだ。何となれば、發足點たる此等の事項は既に承認されてゐるが、適用を誤る爲に茲に論争が生ずるからである。何故と云ふに、もし世人が上述の事柄の外に尙此の適用の力を有するならば、彼等は完全無缺な者だからである。然し今君が、本有觀念を正しく個々物に適用してゐると自信するからには、其の信する理由を示して貰ひたい。『おれはさう信するからだ。』然し他人はさうは考へない、他人は又自分の適用が正しいと思つてゐるのだ、さうでないか。『さうだ。』然らば二人が事物に對して相反する意見を有ちながら其の事物に對する本有觀念の適用が双方とも正しいと云へるのか。『さうは云へない。』然らば君は、自分の本有觀念の適用を正なりとする理由として、單に自分が

さう信ずると云ふ以上の事を我々に示し得るか。狂人は、自ら正しと思ふ事以上に何かするか。然らば又彼にとつてこれだけで十分の準尺となるか。『十分でない。』然らば單にさう思ふと云ふよりも以上へ進め、それは何か。

哲學の始は茲だ、即ち人々相互に意見の杆格ある事を知り、此の杆格の原因を究め、單にさう思はれると云ふだけのものを排斥し、さう思はれるものが果して其の真相を示すや否やを考查し、且我々が重量の測定に秤を發見し又、物の曲直を測るに大工の指金を案出したやうに何等かの規矩を見出だすのである。これこそ哲學の始である。『すべての人がそれ／＼正しと思つた事は何でも正しい事になるのか。』然らば矛盾するものがどうして正しいと云へるか。『では何でも正しいのではなく、我々に正しいと思はれる一切のものだけが正しいのか。』シリヤ人が正しと思ひ、埃及人が正しと思ふのと、君が正しと思ふのと比べて、君の方がどうして、又何故より、正しく思はれるか。又何故私或は他の人に比べて、君の方がより、正しく思はれるか。『少しも差がない。』然らば各人にさう思はれると云ふだけでは、まだ本質の何たるかを決定するに足らぬ。何となれば、重量に就いても長さに就いても、我々は單なる外觀で満足せず、それ／＼に應じて一定の規矩を案出して居る。然らば先の場合に於てもさう思はれると云ふ以上の規矩がないのか。して人間の最も大切な事柄が決定發見されずにあると云ふ事があり得ようか。

然らば何等かの規矩があるのである。然らば何故我々は、其の規矩を求めてそれを發見し、そして爾後それから寸毫も乖離する事なく、それを使用し、規矩なくしては一指をも動かさぬ、と云ふやうにならないのか。何となれば、思ふにそれが發見され、ば、それこそ單なる外觀を以て尺度とし、それを誤用する者の狂氣を治癒し、之によつて我々は、將來、或明瞭な既知の事柄(原則)を基として個々の場合に對し、明確な本有概念を適用し得る事になるからである。當面の研究項目に入るものは何か。『それは例へば快樂である。』それを定木に當て箴め、秤に投入せよ。善とは我々が當然信頼するを可とする所のものであるべきであるか。『さうだ。』してそれは我々が信頼すべき義務を有する物であるか。『さうだ。』不安定な事に信頼しても差支ないか。『否。』然らば快樂とは安定なものか。『否。』然らばそれをとつて秤の外へ棄て、善事の存する場所より遠ざけよ。然しもし君の視力が鈍つてゐて一つの秤で間に合はないならも一つの秤を持つて來い。善を以て誇りとしてもい、か。『さうだ。』然らば現在の快樂を誇りとするのは妥當であるか。妥當だと云はないやうにせよ。さもなければ、君は秤を使用する資格さへない者と私は思ふであらう。規矩の用意があれば、事項は斯くの如くに試験され、測量されるのだ。哲學の職分は、規矩を吟味し、確立する事にある。そして規矩の明かな場合にそれを使用するのが聖賢の行爲である。

一一 討論に就いて

討論の術を正しく使用する爲めに人は何を學ぶべきか、それは、我々の哲學者(ストア)に依つて正確に示されてゐる。然し學んだものを正しく使用する段になると、我々は全く實地の經驗がない。我々の内の任意の者を選んで、試みに無學の人を彼が討論の對手にせよ、然らば彼は件の對手をどうする事もできない。然し彼が其の對手を少しばかり動かして返答をさせても其の返答が的外づれだと彼は又對手をどうして見ようもない。そこで彼は對手を罵るか嘲るかして、『彼は無學者だ、始末にへない人間だ』と云ふ。扱て又人が路に迷つてゐるのを見ると案内人は、彼を正路へ伴れて来る。案内人は其の人を嘲りも罵りもしないで其の儘行つてしまふ。君も亦君の無學な對手に對して眞實を教へてやれ、然らば、彼はそれに従ふであらう。然し君が眞實を教へない限りは、彼を嘲るな、寧ろ自己の無能を悟れ。

そしてソークラテースはどうしたか。彼は其の論敵をして自己(ソークラテース)に對する證人たたらざるを得ざらしめ、そして彼は他に證人を求めなかつたのである。それ故彼は、余は他の證人を求めず、余の敵手を證人として満足す、而て余は他人(第三者)の意見を求めず、唯だ余と討論しつゝ、ある者の意見を求むるのみなり』と云ふ事ができたのである。何となれば、彼は

常に誰でも(矛盾の存する場合には)それを判知してそれを避け得る位に明瞭な本有觀念から結論を抽出させたからである、例へば、『嫉妬深い者は、心に喜びがあらうか。』否、寧ろ苦痛を感じる。』『では嫉妬とは(人の)禍を見て感ずる苦痛であらうか。そして禍に對する嫉妬とはどう云ふ嫉妬か。』そこで彼は其論敵をして嫉妬とは人の幸福を見て感ずる苦痛だと云はしめる。『然らば、人は自分にとつて無關係な者を嫉妬するであらうか。』『毫もない。』彼は斯して觀念を仕上げ、明確にそれを決定してから、もはや其處で止めて、そして『嫉妬とは何ぞ其の定義を下して見よ』など、は云はずに行つてしまふ。そして、對手が嫉妬の定義を下しても、『君の定義の用語が定義される事象に合致しないから君の定義は間違つてゐる』など、は云はなかつた。此等は専門用語で、従つて無學者には不快であり又殆ど不可解である、然も我々哲學者はかう云ふ用語を棄て兼ねてゐるのである。心内に映ずる表象に追従する無學者自身をして承認或は否認させる事は我々が此等の専門語を使つても到底出来ない相談である。従つて我々は其の不能を自覺してそんな事を企てない。少くとも細心な人間はそんな事をしない。然し、大多數の者、輕卒な者は、こんな討論を始めると、自分で混亂し、他人を混亂させる。そして最後に對手を罵り、對手から罵られて、出て行くのである。

さてソークラテースの最大特色は、討論に臨んで決して自から激せず、決して人を罵言せず、

侮辱せず、寧ろ相手の罵詈を忍んで論争を終結する事であつた。彼が此の點で如何に偉大な力を有つてゐたかを知りたければ、クセノフォーンのシンボジオンを讀め、然らば彼が如何に多數の議論を終結させたかを知るであらう。故に詩人等も口を極めて彼れの此の力を褒めてゐるが、それは至當である。

『彼は、忽にして巧みに大論争を終結せしめたり。』

さて、今日こんな事をするのは餘り安全でない、殊にローマでは。何故かと云ふに、こんな事を企てる者は、必ず隠れた處にゐてはならぬ、場合によつては、執政官の所へ行くか、或は金持の所へ行くかして問答せねばならぬ、即ち、『閣下、閣下は誰に御自分の馬を託されてゐますか御存じですか。』『知つてゐる。』『無頓着に誰にでもお預けになつてゐますか、馬の經驗のない者にお預けになつてゐますか。』『そんな事はない。』『それでは誰に閣下は、閣下の金銀の物品や閣下の禮服をお預けになりますか。』『おれはそんな物でも決して無頓着に人に預けはしない。』『で、閣下の御身體、閣下はそれを誰かにお託しになる事に就いて、もうお考へになつてゐますか。』『それに違ひない。』『恐らく經驗ある人、保健の術に長けた人にせう。』『それに違ひない。』『此等は閣下が所有せられる最善の物ですか、それとも他に何かもつとよい物をお有ちですか。』『それはどう云ふ意味か。』『此等の物を使用し、其等を一々試験し、そして熟考する所の

ものを云ふのです。』『では靈の事か。』『お説の通りです、私の意味は靈の事ですから。』『實際おれは、靈こそ私の所有する他の一切の物よりも遙に勝れてゐると考へる。』『では閣下がどうして靈の御世話をなさつてゐますか伺ひたいのです。』と云ふのは、それほど賢明で我國に於て名聲噴々たる閣下が、其の最も大切な所有物を粗略にして失くなる儘に放つておかれるとは思はれませんから。』『さうだ。』然し閣下は御自身で靈の御世話をなさいますか、他人から世話の方法を教はりましたか、それとも御自身で發見されたのですか。』話しが茲まで來ると危険だ。即ち先づ彼は、『それがおまへに何の關係があるか。おまへは誰だ』と云ふかも知れぬ。次にもし飽くまで彼にうるさく云ひかゝると彼は手を舉げて君に一撃を食はす。私自身も昔はかう云ふ教授法を大に賛成したが、しまひにかう云ふ危険に出逢つたのである。(これはエビクテートス自身のローマに於ける經驗を語つてゐるのである)

一三 懸念

人が心配してゐるのを見ると、私は、『此人は何を求めてゐるか』と云ふ。もし彼が自己の權内に在らざる物を求めてゐないとすれば、心配する譯がないではないか。それ故、琵琶彈きが自分獨りで歌つてゐる時には少しも心配しないが、舞臺へ出ると、假令音聲がよく技倆が勝れ

てゐても心配する、これは彼が上手に歌ひたいと思ふばかりでなく、喝采を得たいと思ふからである。然しそれは彼の権外の事である。従つて立派な腕がある者は大膽になる。少しも音楽の心得のない者を伴つて来い、然らば音楽家は其の者を少しも氣にかけない。然し自分に何も判らず又實地の經驗もないと心配になつて来る。これはどう云ふ事か。彼は群衆の何たるか、群衆の賞讃の何たるかを知らない。成るほど彼は最低絃及最高絃の弾き方は心得てゐる、然し、多數者の賞讃とは何か、それが人生に於てどんな力を有つてゐるか、彼はそれを知りもせず、それに就いて考へた事もないのである。それ故彼はどうしても戦々兢々として、顔色蒼白ならざるを得ないのである。そこで琵琶弾きの戦々兢々たるを見て彼を琵琶弾きでないとは云へない。然し彼に別の批評を下し得る、そして一つではなくて多くの批評を下し得る。先づ私は彼を他國人と呼び、そして云ふ、『彼は自分が世界の何處にゐるのかを知らない、長い間此處にゐるけれども、國家の法律、習慣を知らない、何が許され、何が禁ぜられてゐるかを知らない、そして、彼は此の法律を聴かせて貰ひ、説明して貰ふ爲めに未だ曾つて法律家に相談した事もない』と。遺言狀をどう書くべきかを知らず又其の心得ある人に相談もせず遺言狀を書く者はない、又輕卒に證文を書いたり、書入れをしたりしない。然し自己の如何に欲望し、嫌惡し、追求し、企畫し、目的を立つべきかに就いて法律家(茲では聖賢とか、哲學者とかを指す)に相談しないのである。

『法律家に相談しないとはどう云ふ意味か。』

それは、自己の意志する事が不法だと云ふ事を知らず、又必須事を欲求せずと云ふ事に氣がつかないと云ふ意味である。自己のものと他人のものとを知らずと云ふ意味である。それを知つてをれば、障碍もなく、怖れもない、と云ふ事を知らずと云ふ意味である。『どうしてか。』はて、害惡ならざる物を惧れる者があるか。『否。』又害惡には違ひないが自己の力を以て防止し得る物を惧れる人があるか。『否、決してない。』でもし意志に無關係な物は善でも惡でもなく、意志に依憑する物は悉く我々の權内に屬するとすれば、そして又我々の意志に反しては何人もそれを與奪し得ないとすれば、我々は尙何を心配するか。然るに我々は、自己の貧弱な身體とか些少の財産とか皇帝の意志とかを心配するが、内面の事象に就いては心配しないのである。我々は虚妄の意見を立てないやうにと心配するであらうか。否、心配しない。何となれば、それを虚妄ならしめると否とは自己の權内に屬するからである。自己の行動を自然に反せざらしめんと心配するであらうか。否。それに就いてさへ心配しない。それ故人が蒼くなるのを見たら、丁度醫者が顔色を見て此人は脾臓に故障がある、あの人は肝臓に故障があると云ふやうに、此の人の欲望と嫌惡に故障がある、彼は加減が悪い、彼は熱狂してゐると云

へ。何となれば、外に何事があつても其の爲めに顔色が変わるものではない、又戦慄するものではない、齒をガタ／＼させるものでない、或は、

『足どりも定かならず一歩一歩と歩み行く』

と云ふやうな事にはならないからである。それ故ゼーノーンはアンティゴノス（シリヤカマケドニヤの國王であらう）に會ひ行かうとする際に、少しも心配しなかつた、何となれば、此の國王はゼーノーンの欣求する事柄に對しては何等の權能をも振ふことができなかったし、そしてゼーノーンはアンティゴノスの權内に在る事物を欣求しなかつたからである。然しアンティゴノスはゼーノーンに會ふ際に心配した。何となれば、彼はゼーノーンの氣に入らうと思つたからである。然しこれは外物であつた。（國王の權外の事である）然るにゼーノーンはアンティゴノスの氣に入りたいとは思はなかつた。それは凡そ一技に長けた者は、全くの門外漢の氣に入りたいとは思はないからである。

『私は君の氣に入るやうにしよう。』

何故か。私は思ふ、人が人を尊敬するに方つて、尺度と云ふものがある、君はそれを知つてゐるであらう。君は善人の何たるか、悪人の何たるか、及び人が善人となり或は悪人となる所以を知る爲めに努力したことがあるか。然らば君自身が善人にならないのは、どう云ふ譯か。

『どうして私は善人にならないのか。』苟も善人たる者は嘆いたり、呻いたり、泣いたり、蒼くなつたり、慄へたりしない、又『彼は自分をどうもてなすか、どんな風に自分の話を聴くか』など、云ひはしないからである。君は何故他人に屬するものを氣にするのか、彼が君の云ふ事を悪く解するならばそれは彼の過失でないか。『さうだ。』過失を犯す者は即ち惡を犯す者でないか。『さうだ。』然らば何故君は、他人に屬するものを氣にするか。『其の質問は道理だ、然し私は彼にどう話しかけようか、それを心配するのである。』然らば君は君の意志する通り彼に話す事ができないのか。『然し私は狼狽しないかと惧れる。』君が自分で Dion と云ふ名を書かうと云ふ時狼狽しないかと心配するか。『否。』何故か、君が其の名を書く事を實習してゐるかでないか。『確にさうだ。』さて君が其名を讀む時やはり狼狽しないかと心配するか。（心配しない）そしてそれは何故か。それは、各技藝は、其技藝の取扱ふ事項に就て一定の力と自信とを有するからである。然らば君は話す事を實習してゐないか。して學校で、何を學んだのか。三段論法と換位命題とをか。何の爲めにか。それは説話を巧にする爲めでなかつたか。して巧みな説話とは、即ち機宜に、慎重に、賢明に、誤りなく、支障なく説話し、且、それを大膽にする事でないか。『さうだ。』然らば君が馬に乗つて野外へ出るに方つて、徒歩の人と競争するやうな事にならないかと心配するか。君に經驗があり、彼に經驗がない事柄に就いて憂慮するか。『然し

彼(私が會つて話さうと云ふ人間)は私に對して生殺の權を有つてゐる。『不幸なる人よ、然らば、眞實を語れ、大言壯語するな、哲學者を氣どるな、君の支配者たる者を承認する事を拒むな、寧ろ君が自分の身體と云ふ弱點を握られてゐる間は、誰でも君より強い者に従へ。事實あのやうに暴君や判官と談じ、獄中に於て語つた彼れソークラテースは、常に説話の方法を研究した。アレキサンドルや、海賊や、彼を買つた者とあのやうに談じた彼れディオゲネースは説話を實習してゐたのである。彼等は自己の實習した事柄に就て大膽であつた。然し君は須く行つて自分の仕事に就き、決してそれを離れるな。行つて一隅に坐し、三段論法を組立て、他人に其等を提出せよ。君の衷には一國を支配し得る素質がないのである。』

一四 人生の市場

或ローマ人が子息を伴れて入つて來て、一回の講義を聴き終つた時に、エピクテートスは、『これが教育の方法である』と云つて、そこで止めた。で、其のローマ人が續講を求めたので、エピクテートスは云つた。凡そ技藝と云ふものは、其の教授の際、それを知らない初學者に取つては面倒なものである。そして技藝修得の結果は、直にそれ相應の用途を見出だし、且其等は大概何等かの點で人を牽きつけ、人を喜ばすものである。

例へば製靴の仕事は、其傍にゐてそれを見てゐる者にとつては愉快な事でない、然し靴は有用なもので、見て不快なものでない。鍛工が鍛冶を練習してゐる際に鍛冶を知らない者が偶々其處に居合せてそれを見ても甚だ不快である、然し其の仕事は其の技藝の效用を示してゐる。然し此の事は音楽に於て遙かに甚だしい。何となれば、人が音楽を習つてゐる時に君が其處にゐれば、其の練習を頗る不快に感ずるであらう、然も音楽の効果は、それを全く知らない者にとつても愉快で、楽しいものである。

さて我々は哲學者の仕事も幾分これに似てゐると思ふ。哲學者は須く事象の成行に自己の希望を順應させ、斯くして自己の希望せざる事象が生起し、自己の希望する事象が生起せずと云ふ事のないやうにすべきである。此の結果として、哲學者の仕事は斯く定めた者は、欲望する物を逸する事なく、回避せんとする物に逢着する事なく、不安も、憂怖も、惱亂もなく、一生を過ごし、人と交はつては、父子、同胞、市民、夫妻、隣人、伴侶、治者、被治者として先天的並に後天的關係を保つのである。哲學者の仕事は我々はかう云ふ風に考へる。次ぎに此の仕事を成就する途は如何。

さて我々は、大工が一定の仕事を學んでから大工になり、水先案内が一定の仕事を學んでから水先案内になる事を知つてゐる。然らば恐らく哲學の場合に於ても、單に善人賢者たらんと